博　多　57

－博多遺跡群第85次調査の概要－

福岡市埋蔵文化財調査報告第522集

1997

福岡市教育委員会

博　多　57

－博多遺跡群第85次調査の概要－

福岡市埋蔵文化財調査報告第522集

調査番号 9433
遺跡略号 HKT85

1997

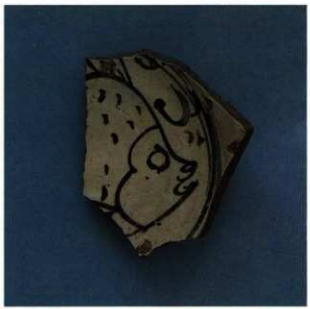
福岡市教育委員会

1255号遺構出土耀州窯系青磁

銭貨鋳型（石製）

銭貨鋳型（土製）

目貫金具



タイ陶器

726号遺構出土　片口鍋鋳型

726号遺構出土　鍋鋳型

序

福岡市博多区の北側、JR博多駅から博多湾にかけての都心部の地下には、博多遺跡群が眠っています。博多遺跡群は、古代から中世を通じて、東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した、都市遺跡です。政治性の希薄な、商業的かつ国際的な都市という点では、わが国では希有な遺跡であり、アジアの拠点都市をめざす現在の福岡市の原点と言うこともできるでしょう。

しかし、残念なことには、現在の都心部にあたるため、種々の開発行為による遺跡破壊は避けられません。福岡市教育委員会では、昭和57年以降、必要に応じて発掘調査を実施して、これに対応してまいりました。本書は、その第85次調査の成果を報告するものです。

第85次調査では、奈良時代から近現代にいたるさまざまな遺構・遺物を検出しました。特に、15世紀前半の鋳造関連遺物や15世紀から16世紀にかけての銭の鋳型など、金属生産の遺物には、見るべきものが多く、貴重な成果が上がりました。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力をいただいた三井不動産株式会社ならびに三井建設株式会社をはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成九年三月十五日

福岡市教育委員会
教育長　町　田　英　俊

例　言

1．本章は、共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した博多遺跡群第85次調査（福岡市博多区店屋町37）の概要報告書である。

2．本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。

3．本章に使用した遺構実測図は、甲斐孝司、佐藤信（福岡大学）、折茂由利、栃本伸一、大庭智子・大庭康時が作成した。また、製図には、折茂由利、下山槙子があたった。

4．本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準にしている。

5．本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・井上涼子・上塘貴代子・大庭康時が、一部の遺物の拓本は山田美樹が作成し、森本・井上・上塘・大庭康時が製図した。

6．本調査で出土した銅銭は、大庭智子が錆落とし・判読し、拓本を作成した。・そのほかの金属製品は、山田美樹が錆を落とした。

7．本章で報告する遺物については、遺構ごとに通し番号をつけて記述した。

8．本調査にかかわる遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。

9．本書にかかわる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・今井民代・下山槙子・萩尾朱美・森寿恵・山田美樹・入江規子・江上由喜子・野田真巨・桝屋育子・森純子があたった。

10．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9433	遺物略号	HKT-85
調査地地番	博多区上呉服町37	分布地図番号	天神49
開発面積	790.27㎡	調査面積	670㎡
調査期間	1994年9月1日～1995年7月28日		

本文目次

第一章　はじめに……1
1．発掘調査にいたるまで……1
2．発掘調査の組織と構成……1
3．遺跡の立地と歴史的環境……2
第二章　発掘調査の記録……5
1．発掘調査の方法……5
2．発掘調査の経過……5
3．基本層序……6
4．各遺構検出面の概要……18
(1) 第1面……18
(2) 第2面……19
(3) 第3面……19
(4) 第4面……22
(5) 第5面……22
(6) 第5B面……24
5．古代の遺構・遺物……25
(1) 竪穴住居跡……25
1683号遺構 25　1798号遺構 26
1829号遺構 27
(2) 井戸……30
1628号遺構 30　1697号遺構 35
1932号遺構 37　2004号遺構 38
(3) 土坑……39
1856号遺構 39　1871号遺構 39
1895号遺構 40
(4) 溝状遺構……42
1614号遺構・1666号遺構 42　1690号遺構 44
6．中世の遺構と遺物……45
(1) 井戸……45
727号遺構 45　915号遺構 46
916号遺構 46　935号遺構 49
1017号遺構 50　1243号遺構 52
1259号遺構 55　1345号遺構 56
1361号遺構 56　1443号遺構 58
1609号遺構 65　1698号遺構 66
1739号遺構 67　1774号遺構 68
1853号遺構 69　1987号遺構 71
1988号遺構 71

(2) 土坑……72
124号遺構 72 158号遺構・159号遺構 74
243号遺構 76 297号遺構 77
464号遺構 77 539号遺構・540号遺構・541号遺構 78
549号遺構 80 583号遺構 81
590号遺構 81 601号遺構 82
637号遺構 83 693号遺構 84
726号遺構 86 729号遺構 93
866号遺構 94 867号遺構 95
1163号遺構 97 1171号遺構 98
1236号遺構 100 1255号遺構 101
1276号遺構 102 1336号遺構 103
1362号遺構 104 1366号遺構 105
1493号遺構 106 1552号遺構 107
1579号遺構 109 1624号遺構 111
1715号遺構 112 1755号遺構 113
1800号遺構 114 1927号遺構 114
7．近世以降の遺構と遺物……118
052号遺構 118 150号遺構 119
152号遺構 120 153号遺構 121
157号遺構 122 192号遺構 123
252号遺構 125 319号遺構 126
403号遺構 127
8．その他の出土遺物……129
(1) 律令時代の遺物……129
(2) 中世の国産陶器・土器……132
(3) 輸入陶磁器……132
(4) 墨書陶磁器……139
(5) 土製品……139
(6) 石製品……139
(7) ガラス製品……139
(8) 金属製品……139
(9) 銅銭……144
第三章 まとめ……148
(1) 緑釉陶器について……148
(2) 銭貨鋳型について……148
(3) 博多遺跡群出土の銭貨鋳型について 下関市立大学 櫻木晋一……149

第一章　はじめに

1．発掘調査にいたるまで

平成六年(1994)3月10日三井不動産株式会社福岡支店より、福岡市博多区店屋町37に関する埋蔵文化財事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して提出された。申請地は、中世以来対外貿易で栄えた「博多」＝博多遺跡群の範囲に含まれていた。また、周辺でもこれまでたびたび発掘調査が実施されており、遺跡の存在は容易に推定できた。そこで、埋蔵文化財課ではまず試掘調査が必要と判断し、同年3月23日これを実施した。

試掘調査は、当時事前審査担当の主事であった山口譲治（現第二係長）によって行われた。この結果現地表から170センチで近世の遺構を検出し、260～280センチで古代の面にいたり、この間に古代・中世の包含層が確認できた。

一方、三井不動産株式会社から出された今回の開発計画はビル建設であり、埋蔵文化財が破壊されるのは必至であった。そこで、埋蔵文化財課では発掘調査は不可欠との結論を下し、三井不動産との協議に入った。幸いにして、三井不動産は、1988年に今回の申請地のすぐ東側でやはりビル建設にともなって発掘調査を委託した経験があり（博多遺跡群第39次調査）、三井建設も近接する呉服町で発掘調査を経験していた（第76次調査）。したがって、文化財の発掘調査に対するご理解をいただき、同年9月1日より発掘調査に着手することで合意を見た。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	三井不動産株式会社福岡支店	支店長	大角　靖生
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	尾花　剛　（前任）
			町田　英俊（現任）
調査総括	同　埋蔵文化財課	課長	折尾　学　（前任）
			荒巻　輝勝（現任）
	同　第二係長	山口譲治	
調査庶務	同　第一係	吉田麻由美（前任）	
		西田結香　（現任）	
調査担当	同　第二係	大庭康時	
調査補助員	西村智道		
調査作業	甲斐孝司　佐藤信（福岡大学）　安部しのぶ　池田菜穂子　石川君子		
	石橋亮　岩隈史郎　江越初代　大庭智子　岡野裕　小野博子　折茂由利		
	岸本祥子　北垣義克　久木田理　権藤利雄　篠崎伝三郎　渋村和憲		
	関加代子　関義種　曽根崎昭子　栃本伸一　中山登樹　能丸勢津子		
	萩尾寛文　花田克子　広瀬興史　藤原孝一郎　村崎祐子　百津等		
	山田美樹		

このほか、発掘作業に関わる諸条件の整備・調査中の便宜については、三井不動産株式会社福岡支店、三井建設株式会社九州支店よりご協力をいただいた。記して、謝する次第である。

3．遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄海灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開鑿された石堂川（御笠川）、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画される。

この御笠川と那珂川にはさまれた地域は、弥生時代以後の主要な遺跡がならぶ地域でもある。上流側から著名なものをあげると、奴国の中心地であり、奴国王墓も発見された須玖岡本遺跡を中心とする一帯の遺跡群、朝鮮系無文土器が多量に出土した諸岡遺跡、日本最古の水田・環濠集落として知られる板付遺跡、弥生時代の青銅器鋳造地のひとつである那珂遺跡、弥生時代後期の環濠群や絹で巻いた銅剣が甕棺より出土した比恵遺跡など、ほぼ直線上にならんでいる。博多遺跡群で調査されている弥生時代中期・後期の集落・甕棺墓群は、これら諸遺跡の延長上で理解できるだろう。さらに、そのまま博多湾を渡ると、志賀島の「漢委奴国王」金印出土遺跡にあたる。弥生時代中期に、周辺に可耕地を持たない砂丘上に忽然と出現する博多遺跡群は、奴国の海上活動の拠点集落として位置づけられる。5世紀後半に築かれたとされる博多1号墳（前方後円墳、推定墳丘長60m）も、那珂川右岸に展開する一連の前方後円墳の首長墓の流れの中で考えられよう。6世紀後半には、那の津官家が設置される。その推定位置については、福岡市南区三宅が当てられてきたが、1984年比恵遺跡で柵列に囲まれた倉庫群が発見されるにおよんでこれを官家にあてる説が浮上してきた。同様の、柵列に囲まれた倉庫群は、早良区有田・小田部遺跡群でも複数検出されており、その性格・実態についてはいまだ定まった評価をあたえられていないが、これらの地域が、有力な地位を保っていたことを示している。

律令時代にはいると、御笠川の最上流に大宰府がおかれ、九州の政治・軍事的中心地となる。博多湾岸には、博多遺跡群とは入り海ひとつを隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館がおかれた。博多遺跡群に官衙がおかれた記録はないが、石帯・銅製帯金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝銭・鴻臚館式瓦・老司式瓦などが出土しており、律令官人の存在が推定できる。

平安時代後半になって律令体制が弛緩すると、対外貿易も京都の中央政府の直接的掌握から、大宰府を通じての管理へと変質する。これが、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらしたであろうことは、想像に難くない。こうした流れの中で、11世紀には、博多に宋商人の居留が知られるようになる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは11世紀後半になってからで、膨大な量の輸入陶磁器が出土している。さらに、12世紀末から13世紀前半にかけて、聖福寺・承天寺の2大禅刹が博多綱首（博多在住宋商人）の後押しの元で、相次いで建立され、急速に都市化が進行したと見ることができる。

鎌倉時代、2度にわたる元寇で博多付近は戦場になるが、13世紀末には、鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地というのみではなく、九州の政治的中心地という面も持つにいたる。遺構の上では、13世紀末から14世紀初めにかけて、あちこちに道路がつくられており、それらは戦国時代まで続いていく。これらの道路は、必ずしも相互に規則性・統一性を持ってはいないが、中世後半を通じての博多の街区、景観はここにつくられたと言えよう。

南北朝時代頃から、博多の海岸部にあたる息浜の勃興・発展が著しく、博多の繁栄の中心は、内陸側の博多浜から、息浜へと移る。息浜商人らは、中国大陸の元・明のみならず、高麗・朝鮮、さらには琉球・東南アジアにまで進出して、貿易を行った。博多遺跡群からは、タイやベトナムの陶磁器が出土しており、これを裏付けている。また、この時代の民間貿易は、海賊である倭寇によって担われ

た一面もあり、博多にも倭寇の存在が記されている。

一方、南北朝時代、足利尊氏によって博多に九州探題がおかれたが、九州では懐良親王をいただく南朝方や、反尊氏である足利直冬の勢力が強く、探題の政治力・軍事力は強力なものとはなりえなかった。歌人としても知られる探題今川了俊のもとでは、南朝勢力は圧倒され、了俊は博多にあって朝鮮貿易などに積極的に乗り出す。しかし、了俊のこのような勢威は、将軍足利義満の不興を買い、了俊は探題の任を解かれ、九州を去る。その後、博多は筑前の少弐氏、豊後の大友氏、周防の大内氏らによる争奪の対象となった。室町時代後半の博多は、堺とならんで自治都市として著名だが、たびたび兵火にかかって焼亡している。

1586年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏の軍によって焼かれ、灰塵に帰す。翌年、島津氏を逐って九州平定を遂げた豊臣秀吉は、博多の復興を指示した。これがいわゆる太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以来続いた博多の諸道路、街区は廃される。太閤町割は、それまで町のあちこちで異なっていた道路の方向や街区を統一し、博多全体を長方形街区と短冊型地割りで仕切るものであった。こうして、中世都市博多は近世都市に生まれ変わった。

太閤町割と豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、博多は再びよみがえる。しかし、江戸時代にはいり、鎖国政策がとられるに及んで、貿易都市としての博多は幸をおろした。そして、黒田氏52万石の城下町福岡と対をなす商人町博多として福岡藩の藩都となり、そのまま明治維新を迎えたのである。

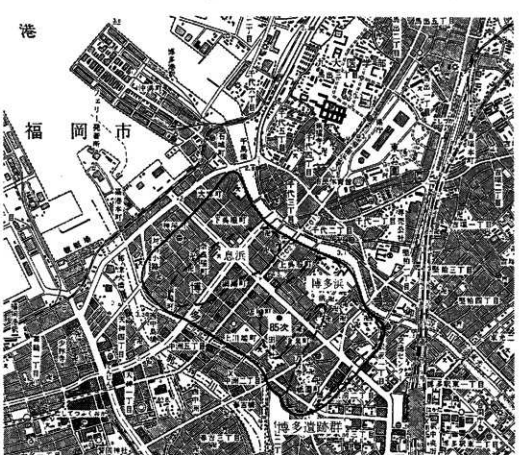


Fig.1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

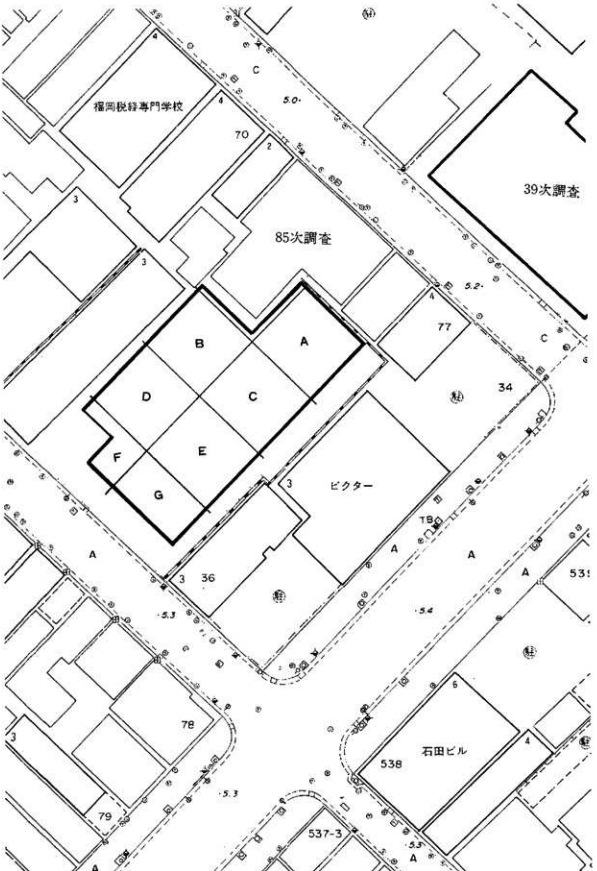


Fig.2　第85次調査地点位置図（1/500）

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法

発掘調査に際しては、試掘調査の所見から、現地表下150センチまでを事前に三井建設によってすきとってもらった。本調査での第1遺構検出面（以後第1面と略す。第2遺構検出面以下も同じ）以下の遺構検出面については、部分的にトレンチをいれたり、遺構壁面で土層堆積状況の観察を行ったりして、その深さを決定した。今回の調査では、最下層である古代の生活面（＝砂丘砂層上面）までに5面の遺構検出面を設定した。

掘り下げに当たっては、調査区全体に10メートルのグリッドを設定し、土層観察用の畦を残して人力で掘削した。掘削・遺構調査に伴う残土は調査区の南隅（G区）に仮置きし、適宜搬出することとした。このため、E区の一部とG区については、他のグリッドと並行して調査を行うことができず、調査の進行状況や都合に応じて、別途調査する形をとらざるをえなかった。したがって、この部分については、A区～F区が第4面まで進んだ後、第2面から最終遺構面である第5面までの調査を実施し、その終了を待って、これを埋め殺す形で、A区～F区の第5面を調査した。なお、G区については、調査進行の都合から第1面を設定しなかった。

遺構は、検出順に番号をつけ、遺構の種別に関わらず第○号遺構として登録し、遺物を取り上げた。したがって、A区～F区の第4面の遺構番号よりも、G区の第2面の遺構番号の方が大きい数字が付くなどの逆転現象が起きている。

遺構実測は、20分の1で平面図を作成した。平面実測図の基準点は、申請地と前面道路の形状に合わせて設定した。遺物の出土状況等から個別の平面図・断面図が必要と判断された遺構については、10分の1で実測した。土層実測図は、A区の南東壁とG区の南西壁で20分の1で作成した。

写真は、35ミリ版・6×7版のカメラを用い、それぞれモノクロとカラースライドフィルムで撮影した。遺物写真は、基本的に6×7版で撮影している。

2．発掘調査の経過

次に、発掘調査の経過を述べておく。

第85次調査は、1994年8月22日の三井建設による表土除去作業から始まった。これは、埋蔵文化財課による試掘調査の結果を受けたもので、調査担当である大庭康時が立ち会い、現地表下150センチまで重機で掘削した。

埋蔵文化財課としては、8月29日に第84次調査現場から発掘器材を搬入、続く30日に那珂整理室から不足した器材を搬入し調査にはいる準備を整え、9月1日より調査作業に着手した。

この一方で、博多地区の電話線地中埋設に伴う冷泉公園地内での発掘調査が緊急を要する状況となり、教育委員会の専門職の人手不足から、もっとも近くで発掘調査を担当していた大庭が、冷泉公園地内の発掘調査（第87次調査）も兼任することとなった。そこで、第85次調査第1面の遺構実測、第2面への掘り下げ作業と第87次調査とが並行するように工程をくみ、10月3日より、第87次調査を開始した。第87次調査は、11月22日まで要し、この間第85次調査は若干の遅滞を余儀なくされた。

また、翌1995年4月13日より5月14日まで、調査担当者の大庭が、福岡市教育委員会と西日本新聞社

による西日本文化フォーラムの中国湖北省陰湘城調査の一員として派遣された。この間、第85次調査は中断している。

以下、調査日誌から抜粋して箇条書きに経過を記す。

1994年 8 月22日　三井建設による表土剥ぎ開始。
9 月 1 日　北東端のA区より、遺構検出を始め、本格的に調査に着手する。
9 月 8・9 日　測量基準杭設定。
9 月10日　レベル移動。座標測量。
10月 3 日　第87次調査開始。
11月22日　第87次調査終了。
1995年 1 月17日　阪神大震災。
4 月 5 日　A～F区の第 4 面までの調査終了。
A～F区の第 5 面の調査に先行して、残土置き場になっていたG区の掘り上げを終わらせておくことにする。
4 月13日～ 5 月14日　中国湖北省陰湘城調査。この間、第85次調査中断。
5 月15日　第85次調査再開。
6 月 8 日　G区の調査を地山砂層まで終了させる。
6 月 9 日　A～F区の第 5 面の調査に取りかかる。
7 月23日　降雨激しく、現場はかなりの部分が冠水し、崩落する。
7 月27日　調査終了。器材片づけ。
7 月28日　調査器材撤収。

3．基本層序

G区南東壁で実測した土層図を、Fig.3に示す。基盤は、淡黄色の砂丘砂であり、この上に古代の包含層である褐色を基調とした砂層が乗り、これを中世の包含層がおおう。中世の包含層は、暗褐色を基調とした壌土である。本調査地点では、顕著な整地層は見られなかった。

1．暗褐色土．1層の上面がおおむね第2面に相当する
2．砂土
3．灰茶色砂質土
4．灰褐色土
5．暗褐色土．5層の上面が、おおむね第3面に相当する
6．炭・灰層．黒色を呈する
7．黄色砂
8．暗褐色土．やや砂質
9．暗灰色土
10．灰茶色土．やや粘質
11．灰褐色砂．しまりあり
12．灰褐色砂質土．12層の上面がおおむね第4面に相当する
13．淡黄色砂．地山砂丘砂層上面．一第5面

Fig.3　G区南東壁土層実測図（1/60）

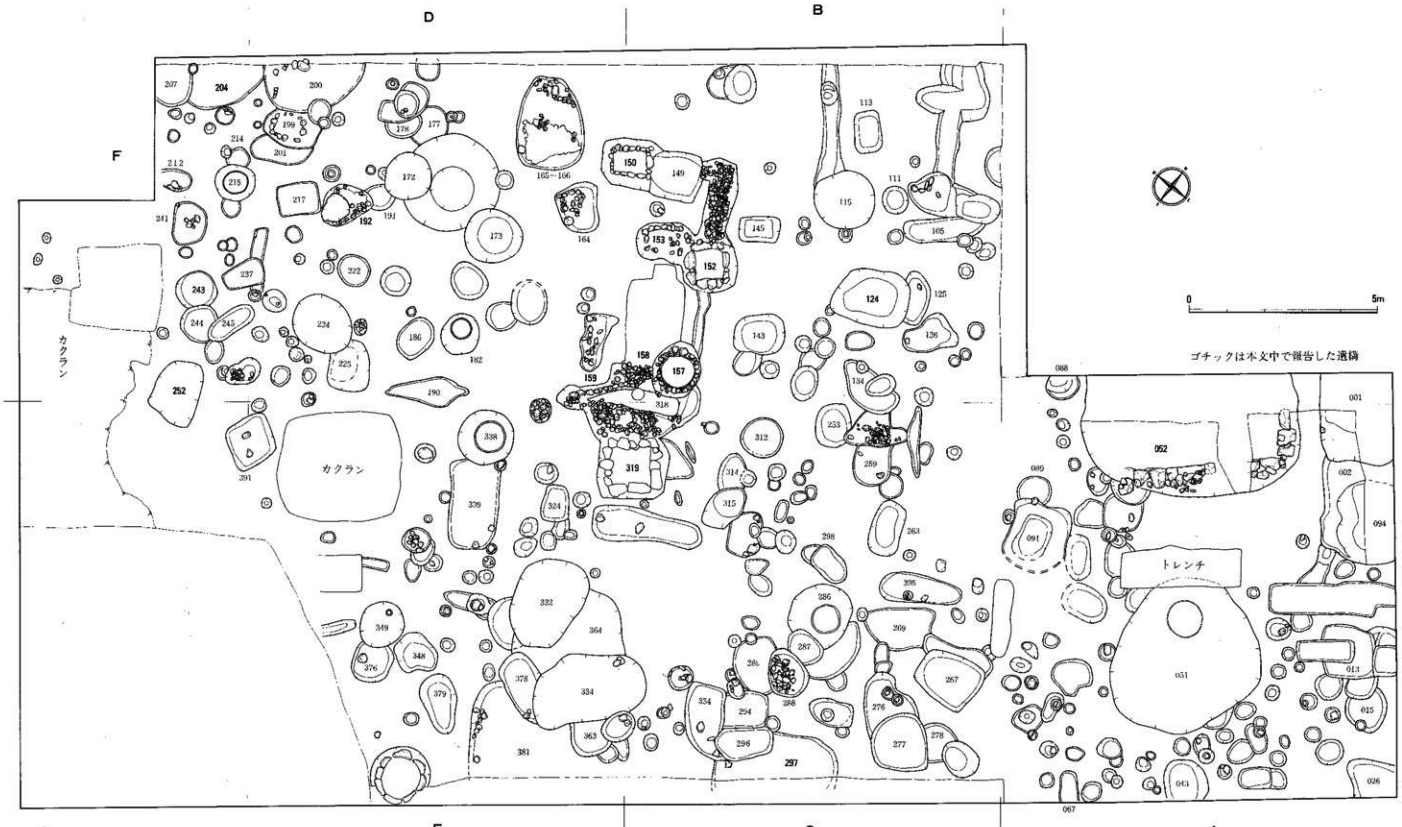


Fig.4　第1面遺構平面図（1/100）

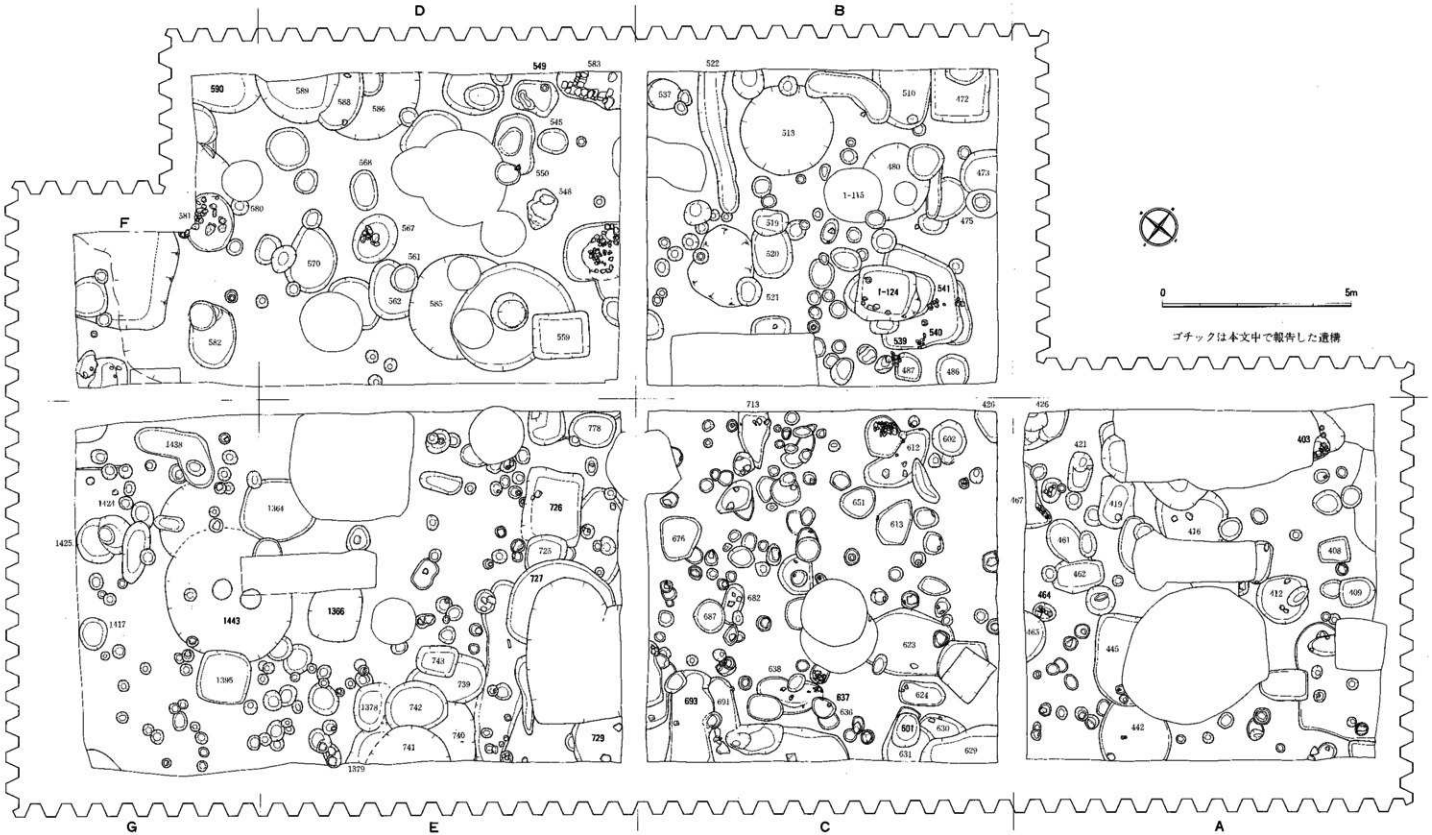


Fig.5　第２面遺構平面図（1/100）

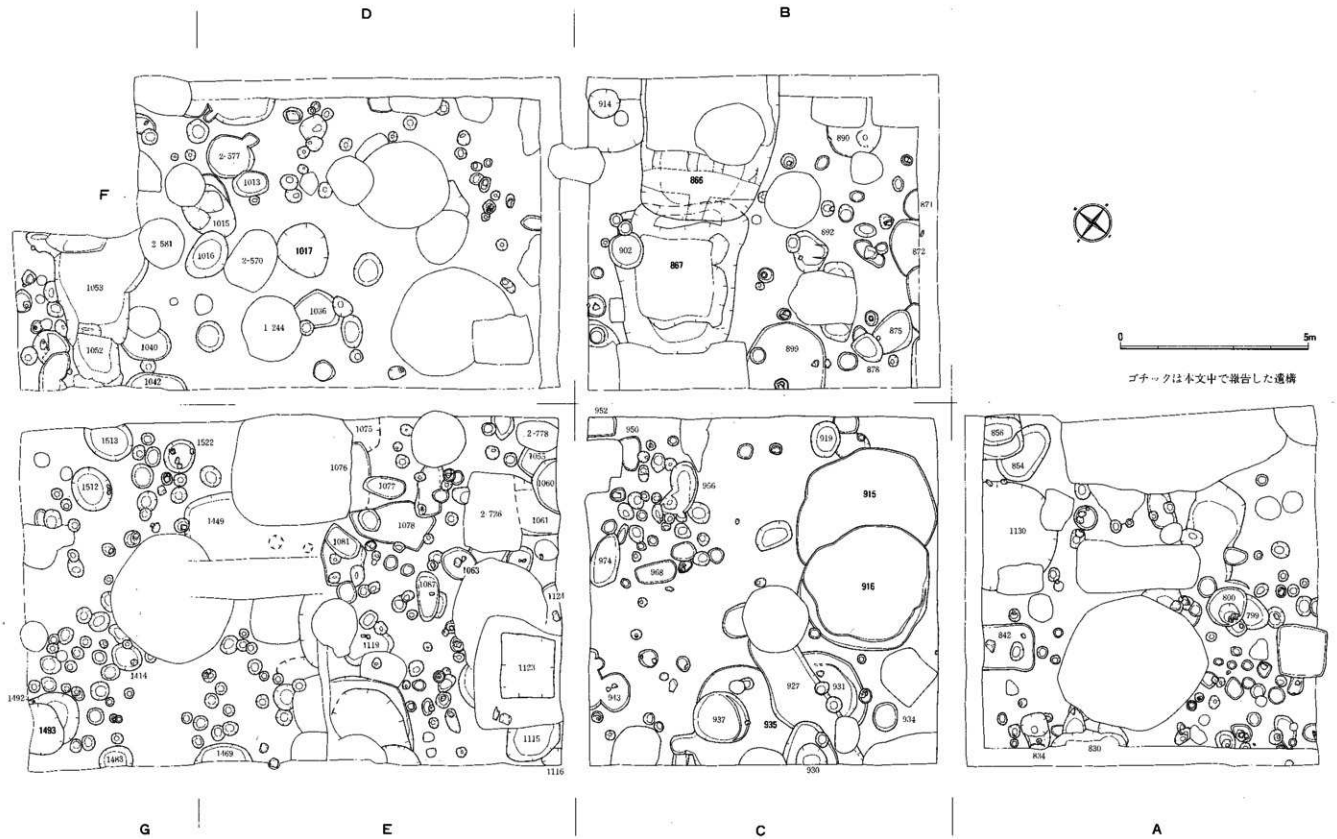


Fig.6　第3面遺構平面図（1/100）

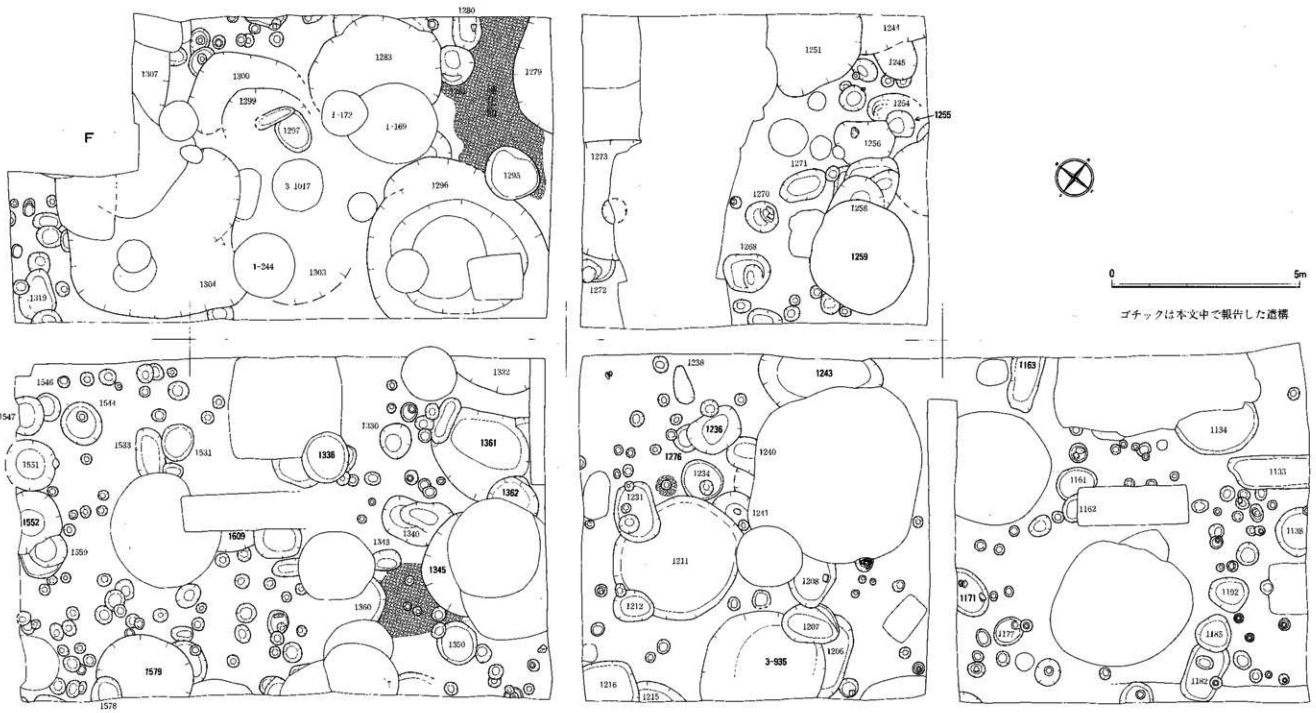


Fig.7　第4面遺構平面図（1/100）

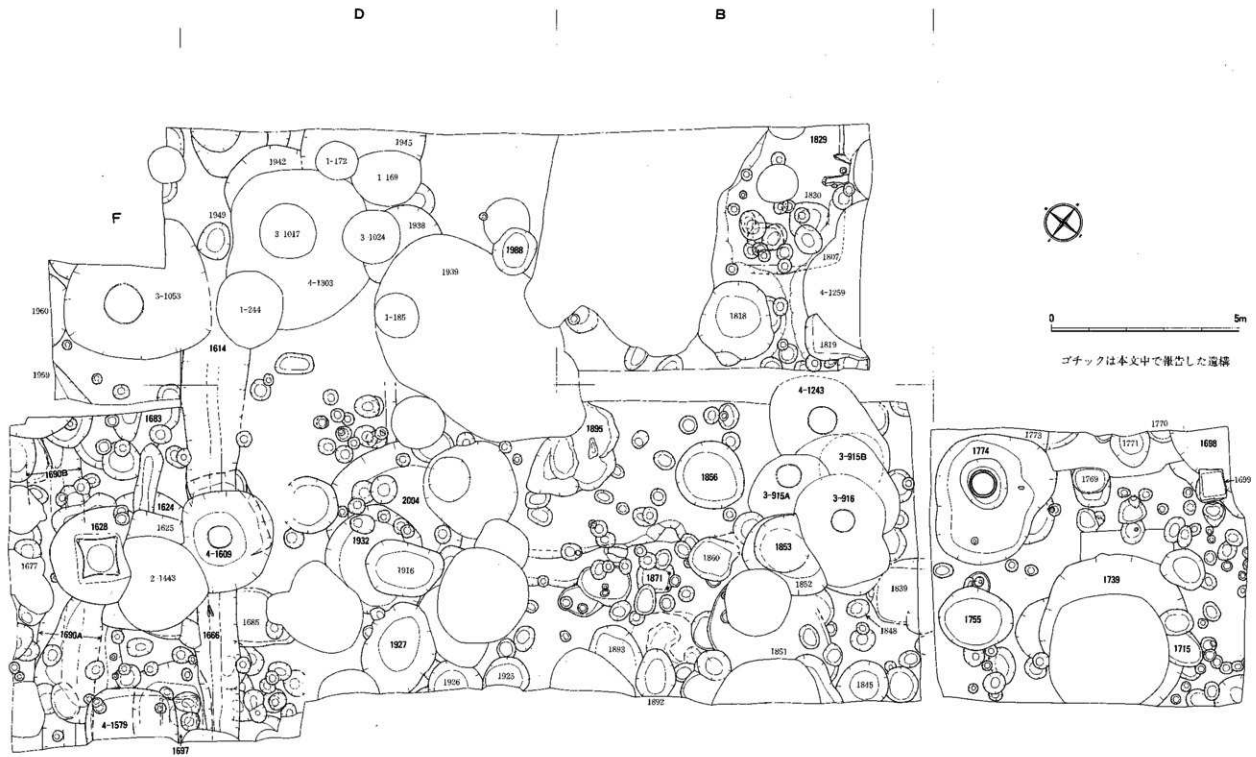


Fig.8　第5面遺構平面図（1/100）

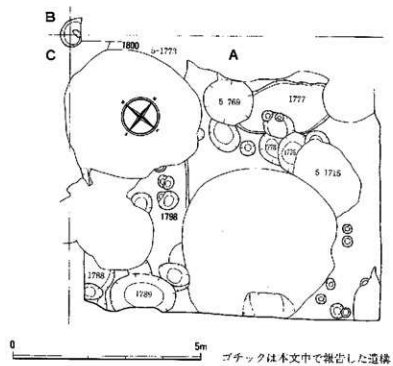


Fig.9　A区第5B面遺構平面図 (1/100)

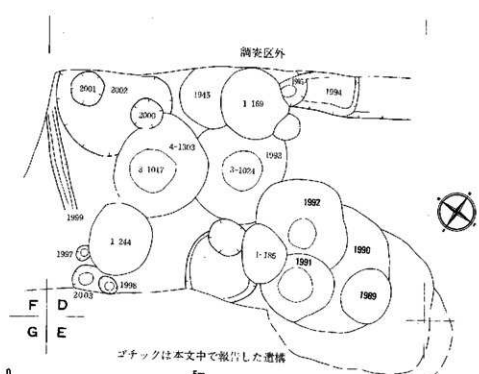


Fig.10　D区第5B面遺構平面図 (1/100)

4．各遺構検出面の概要

個別の遺構・遺物について説明する前に、個々の遺構検出を試みた遺構検出面について、簡単に述べておきたい。

(1) 第1面

三井建設による表土除去を受けて設定した、遺構検出面である。表土掘削の深度は、試掘調査の結果によるが、層位的には顕著な変化に基づくものではない。

おおむね、標高4.3メートル前後をはかる。また、残土を仮置きしていたG区では、調査工程と以下に述べる第1面の成果から、第1面の調査を割愛した。

遺構としては、井戸・土坑・溝状遺構・柱穴などを検出した。051号遺構、115号遺構、172号遺構、173号遺構、182号遺構、215号遺構、224号遺構、286号遺構、338号遺構、349号遺構などは井戸であるが、すべて近世以後の所産であった。とりわけ、215号遺構は良水の出る井戸で、近年まで周辺住民に利用されていたという。

土坑では、方形石組土坑が目だつ。ほとんどが、近世以後に属する。用途は特定できない。

B区とD区の境目付近では、「コ」字形の集石溝がみられる。遺物は少ないが、16世紀代の遺物が出土している。

第1面は、16世紀から近世初頭頃の遺構検出面であろう。

Ph.1　第1面全景（南西より）

(2) 第2面

標高3.9～4.1メートルで設定した遺構検出面である。第1面からは、30センチ前後掘り下げている。これは、大まかに土質の変わり目を追ったものだが、明瞭な鍵層を追求したものではない。

検出した遺構は、井戸・土坑・柱穴・溝状遺構である。この面ではまだ近世の遺構が残っており、403号遺構、409号遺構、461号遺構、472号遺構、559号遺構、727号遺構、740号遺構、741号遺構、742号遺構などは、近世以降に属する。

井戸では、513号遺構が15世紀、1443号遺構が13世紀代に属する。

土坑は、廃棄土坑がほとんどであるが、E区の726号遺構は、多数の鋳型片を廃棄している点で特筆に値する。後で詳述するが、平面が長方形を呈する箱型の土坑で、埋土の中程には真土とみられるきめ細かく適度の粘りけを持つ土がまとまって埋まっていた。取り瓶、ふいごの羽口、銅滓も出土しており、銅器の鋳造に関連した遺構と知れる。15世紀代の遺構である。第2面では、この他にも銅滓や取り瓶片が出土する遺構が多く、調査地内に点在している。目についた遺構を列挙すると、442号遺構（鋳型）、478号遺構（羽口）、520号遺構（銅滓・取り瓶）、562号遺構（取り瓶）、570号遺構（取り瓶）、580号遺構（取り瓶）、581号遺構（取り瓶）、726号遺構（鋳型・銅滓・取り瓶・羽口・鋳物土）、739号遺構（取り瓶）などである。このほか、鉄滓（椀型滓）を出す遺構も少なくない。

第2面の年代観としては、遺構の出土遺物から、16世紀が中心になり、一部15世紀の遺構がのぞいているといった状況である。ただし、調査区の北端に当たるA区では、1364号遺構、1417号遺構、1422号遺構、1425号遺構など12世紀後半代に属するとみられる遺構が検出されている。この一角だけ前代の遺構が検出された点からみて、埋没した旧地形の起伏で、この部分が高かった可能性が考えられる。

(3) 第3面

第2面から20センチほど掘り下げた、標高3.7～3.8メートルの遺構検出面である。

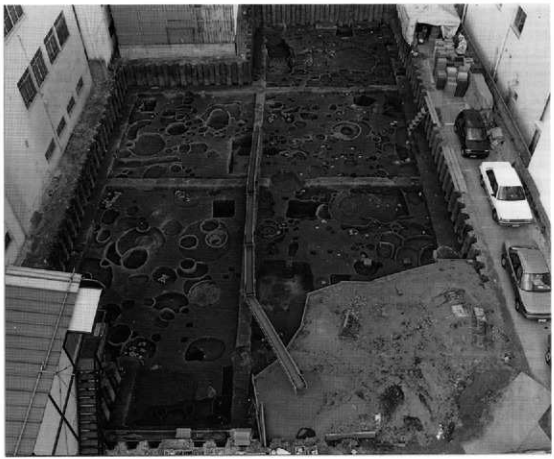
第2面からの掘り下げに先立って、A区・B区・D区にそれぞれ鍵型のトレンチをいれた。その結果、A区では、第2面の10～15センチほど下で、白色粘土による整地層を確認した。B区では第2面下には明らかな土の変化はなく、D区では第2面下25センチほどで若干土色の変化がみられた。結局、A区に見られた整地層は調査区全面には延びないと判断し、A区については白色粘土層を追い、B区以下については第2面下25センチを目安に掘り下げることとした。

第3面では、井戸・土坑・柱穴などを検出した。井戸では、D区の1017号遺構が、16世紀の井戸で、第2面あたりまでの掘り残しと思われる。そのほかの井戸は、おおむね12世紀後半から13世紀前半の井戸である。

土坑では、B区で検出した866号遺構、867号遺構のふたつの大型土坑が注目される。両者は切り合い関係にあり、さらに866号遺構は第2面の513号遺構に867号遺構は第3面の865号遺構に切られている。このため正確な形状は知りがたいが、長方形・箱型の大型土坑と推測できる。地下室的な用途を考えられよう。なお、この両遺構については、後で詳述する。

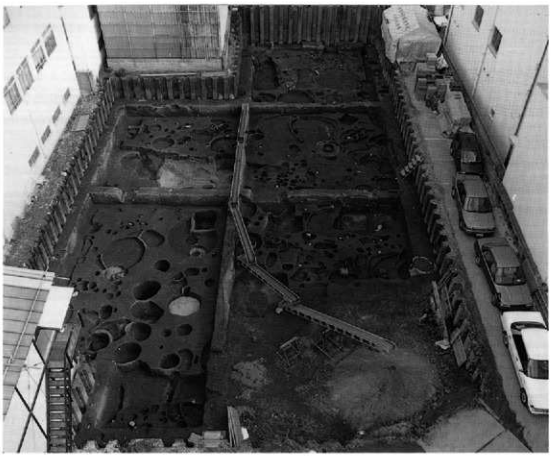
柱穴から、掘立柱建物跡を抽出することはできなかった。しかし、遺構全体図を見ると、全体的に柱筋が南北もしくは東西に並んでいることに気づくだろう。また、柱穴の密度に明らかな粗密があり、G区からE区・C区にかけての部分と、A区の東角付近に集中している。掘立柱建物跡の立替を念頭におくならば、この部分に東西棟もしくは南北棟が存在したと思われる。

第3面は、おおむね13世紀前半を中心とした時代に比定できる。



Ph. 2　第２面全景（南西より）

Ph. 3　E・G区第２面全景（北西より）



Ph. 4　第３面全景（南西より）

Ph. 5　E・G区第３面全景（北西より）

(4) 第4面

標高3.2～3.5メートルで設定した遺構検出面である。第3面からは、30～50センチほど掘り下げている。

第4面の設定については、D区の一部において確認できた黄色の硬化面と、砂質土による整地面を目安にしている。ただし、両者ともにごく一部分に留まり、調査区を通じての鍵層となりえたわけではない。したがって、第4面もたんに任意に設定したという一面を持つ。なお、この黄色硬化面に対して、検出当初は道路面の可能性を考えていた。しかし、路面としての広がりが追えず、硬化面の上面も湾曲するように波打つことから、道路ではないと結論した。おそらく、何らかの原因によって、鉄分が沈着した結果であろう。

第4面においても、井戸・土坑・柱穴などを検出した。主要な遺構について、その種類と時期を列記しておく。井戸では1243号遺構が12世紀後半、1259号遺構は13世紀に属する。土坑には、11世紀後半代から13世紀前半代、さらに上面での掘り残しと思うが15・16世紀のものまで検出した。

この面で特筆すべきは、A区の1163号遺構から、銭の石製鋳型が出土したことである。詳しくは後述するが、1163号遺構は、魚骨なども廃棄している15世紀代の廃棄土坑であり、折損した鋳型も廃棄されたものであろう。未使用であるが、石製の銭の鋳型はわが国で初例である。また、D・F区第4面出の遺構検出中に土製の銭の鋳型が出土した。これは使用してあり、破砕して銭を取り上げた後、廃棄したものであろう。鋳型の時期は確定しがたい。

第4面の年代は、12世紀前半を中心としたその前後であろう。

(5) 第5面

標高3メートル前後で設定した遺構検出面である。博多遺跡群の基盤である、砂丘砂層の上面に当たる。A区とD区において、遺構の重複のためか地山砂層がすっきりと出ず、だめ押し的にさらに掘り下げを行った。これを第5B面としている。

第5面では、奈良時代から中世初頭にかけての井戸・土坑・柱穴・溝を検出した。奈良時代で特筆すべきは、竪穴住居跡を検出したことである。遺構の重複により、必ずしも遺存状態は良くないが、2棟を検出した。もっとも残りがよかったのは、B区の1829号遺構であるが、この埋土中から滑石製の曲玉や小玉の未製品が出土している。滑石の露頭から離れた博多においてもチップを持ち込んで加工していたことを示す興味深い資料である。この他に奈良時代から平安時代初めの遺構と見られるものは、1683号遺構、1685号遺構、1690号遺構、1807号遺構、1830号遺構、1831号遺構、1845号遺構、1856号遺構、1871号遺構、1877号遺構、1895号遺構、1932号遺構、2004号遺構などである。このうち、1932号遺構や2004号遺構は、井戸である。

一方、10世紀代の遺構はきわめて少なく、ほとんど目につかなかった。11世紀代となると、井戸・土坑を中心に検出例が急増している。井戸では、1628号遺構、1697号遺構などがこれに当たる。これらの井戸は、曲げ物を水溜におき、方形に板を組んで井戸側にしている。12世紀以後の井戸にはみられなくなる構造である。1614号遺構と1666号遺構は、一連の溝である。1666号遺構には、馬の下顎が捨てられていた。11世紀前半の溝である。

これらの遺構から、第5面の年代は、8世紀から12世紀までとくくることができる。

Ph. 6　第４面全景（南西より）

Ph. 7　E・G区第４面全景（北西より）

Ph. 8　E・G区第５面全景（北西より）

(6)　第５Ｂ面

前節で述べたように、第５面ではＡ区とＤ区において遺構の重複のためにすべての遺構を確認し掘りあげきれなかった。そこで、この部分についてさらにもう一面を設定し、遺構の調査漏れをなくしたものである。Ａ区第５Ｂ面は標高3メートル前後、Ｄ区第５Ｂ面は標高2メートル前後で遺構検出を試みている。

まず、Ａ区では、竪穴住居跡と思われる1798号遺構を検出した。ただし、他の遺構に切られ、方形住居の北東辺の一部を確認したに留まる。このほか、柱穴・土坑などを検出した。すべて、8世紀から9世紀にかかる時期の所産であった。

Ｄ区第５Ｂ面は、ほとんど全面が井戸の切り合いであった。したがって、必ずしも古い遺構ばかりというわけではなく、古代から近代までの井戸の底付近をすべて掘りあげる格好となった。なお、これは第５面までのすべての井戸を含めて言えることだが、本調査地点での湧水レベルは標高1.8メートルくらいであり、博多遺跡群に一般的な0.8メートル前後に比べて著しく高い。よって、井戸下部の崩落も激しく、本調査地点の井戸はほとんど井戸側が見えるレベルまでは掘れなかった。

5．古代の遺構・遺物

この項目では、博多が中世の都市として繁栄を誇る以前の遺構のうち、主要な物について報告する。年代としては、8世紀から11世紀前半までを含む。

この時期の遺構としては、竪穴住居跡・井戸・土坑・柱穴がある。本来ならば、柱穴は掘立柱建物跡を構成するはずであるが、本調査地点では、遺構の重複が激しく、掘立柱建物跡を抽出することができなかった。

以下、遺構の種類ごとに主要な遺構について述べる。

(1) 竪穴住居跡

今回の調査では、竪穴住居跡と思われる遺構を3棟分検出した。ただし、明らかに竪穴住居跡と断言できるのは、1829号遺構のみである。

1683号遺構

G区第5面において検出した遺構である。F区にもまたがるはずであるが、F区では確認し損なってしまった。

一辺3メートル前後の方形住居の東壁付近を検出した物と考えている。竪穴の掘り込みは、18センチ前後をはかる。

Ph. 9　1683号遺構（北より）

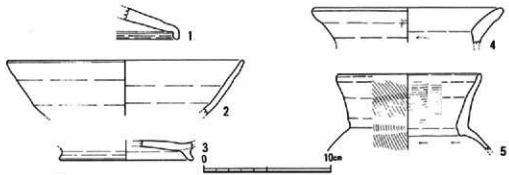


Fig.11　1683号遺構出土遺物実測図（1/3）

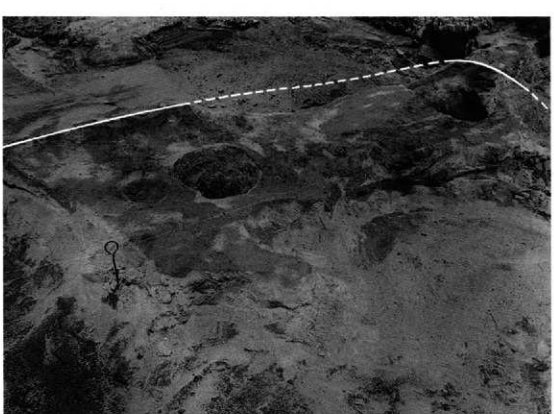
Fig.11に出土遺物の内図化できた物を示す。1~3は、**須恵器**である。1は、坏蓋で口縁端部を小さくしたにおり曲げる。2は、坏または碗の口縁である。おそらく高台付き坏の口縁部だろう。3は、高台付き坏の底部である。4･5は、**土師器**である。4は、甕である。口縁部の内外面は横撫で、体部内面は箆削りする。5は、壺である。口縁部と体部外面は刷毛目調整、体部内面は削り調整を加える。

これらの遺物からみて、8世紀中頃の年代が与えられよう。

Fig.12　1798号遺構出土遺物実測図（1/3）

1798号遺構

A区第5B面で検出した住居跡である。北東壁の一部を検出したに留まる。竪穴の掘り込みは、15センチ前後が残っていた。



Ph.10　1798号遺構（西より）

Fig.12に図化できた遺物を示す。須恵器の坏蓋で、口縁端部は、不明瞭ながら屈曲する。
この遺物からみて、8世紀末から9世紀初めにかかるものと考えられる。

1829号遺構

B区第5面で検出した竪穴住居跡である。周囲を他の遺構に切られ、また北西側は調査区外に出るため、全容を知りえない。ただし、北東壁に竈が残っており、これを中軸として南東壁を折り返すと、一辺5.5メートルという数字がえられる。竪穴の掘り込みは、16～20センチをはかる。主柱穴は、確認できなかった。

竈は、白色のシルト質粘土でつくられ、袖の部分が「ハ」字形に残っていた。左右の袖の間には、焼土・焼砂が見られた。竈中央に小さいピットがみられ、支柱をもうけていた可能性が考えられる。

Fig.14に出土遺物を示す。1は、須恵器である。坏蓋で、ボタン状のつまみが付く。口縁端部は、折り返して垂下する。竈の袖の近くから出土しており、完形品である。2～5は、土師器である。2・3は脚で、筒部の内面は削り調整、他は刷毛目調整する。4は、土師器の壺であるが、焼成はむしろ瓦質と

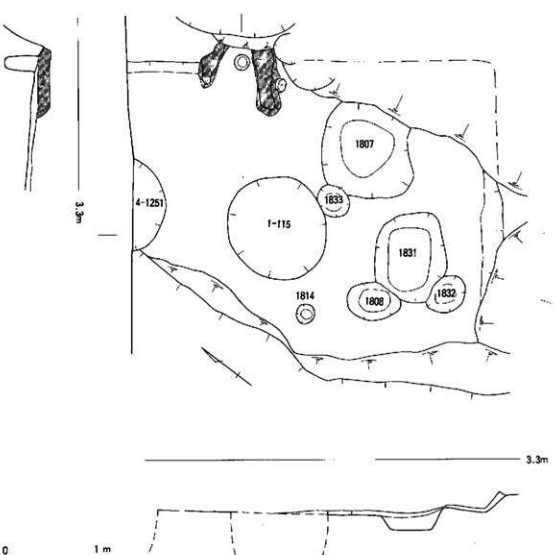
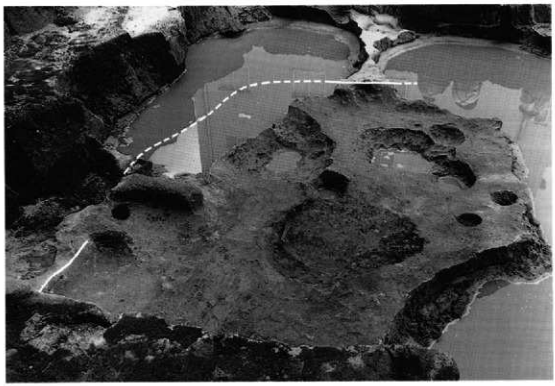


Fig.13　1829号遺構実測図（1/40）



Ph.11　1829号遺構（西より）

Ph.12　1829号遺構竈（南西より）

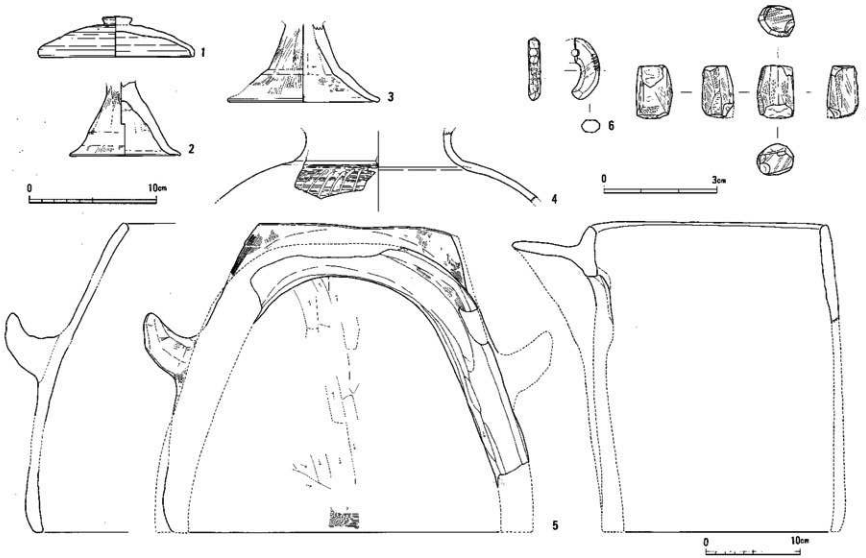
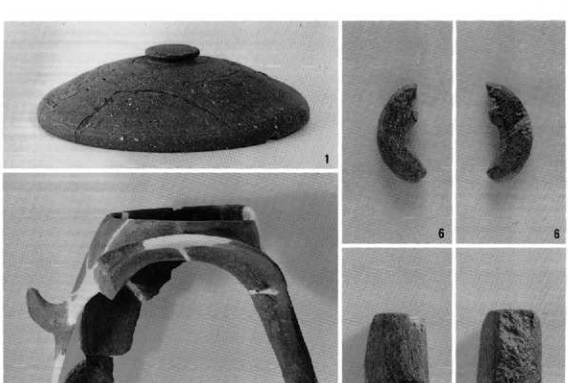


Fig.14 1829号遺構出土遺物実測図（1～4-1/3, 5-1/4, 6・7-1/1）



Ph.13　1829号遺構出土遺物（縮尺不同）

いうに近い。体部外面は、横方向の篦磨きの上に暗文状に縦の磨きを加える。内面は、平滑に撫で調整する。5は、竈である。内面は荒い縦方向の削り、外面は細かい刷毛目調整する。

6・7は、**滑石製品**である。6は、匁玉で頭部の一部を欠く。7は、管玉の未製品である。

これらの出土遺物からみて、8世紀末の竪穴住居跡と考える。

(2)　井戸

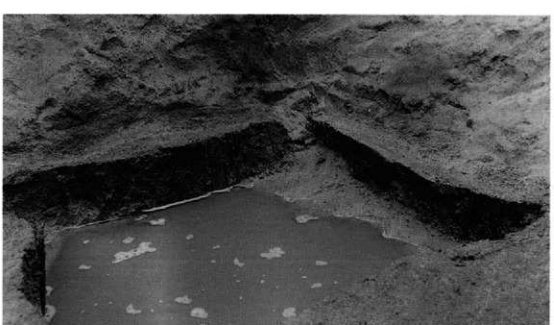
本調査で検出した古代の井戸は、8世紀の井戸と11世紀後半の井戸とにわかれる。8世紀の井戸は、湧水のため最下部まで調査できず結論は下せないが、掘りえた範囲では素掘りであった。これに対して、11世紀後半の井戸は水溜と井戸側を設けているという違いがみられた。ただし、これまでの博多遺跡群の調査では、8世紀・9世紀の井戸でも曲げ物の水溜と方形板組の井戸側を設ける例は多く確認されており、本調査地点での相違点がそのまま一般的であるということではない。

1628号遺構

G区第5面で検出した井戸である。第2面検出の1443号遺構（井戸）に切られ、掘り方の三分の一程度を失う。

検出面から170センチほど掘り下げたところで、井戸側の痕跡を確認した。井戸側は、板材を横方向に寝かせて方形に立てており、四隅には杭を打ち込んでいる。井戸側北角の一部分で、板材の痕跡が二重になっており、上に積み上げられていたものと推測できる。また、井戸側の中央で、水溜の痕跡

Ph.14　1628号遺構（東より）



Ph.15　1628号遺構井戸側（東より）

を検出したが、降雨と湧水のため流されてしまい、実測図作成時にはすでに確認できなかった。円形の木質だったので、曲げ物であろうと思う。

井戸側は一辺100センチ、水溜は推定で直径70センチ、掘り方は径260センチの円形を呈する。

出土遺物を、Fig.16・17、Ph.16に示す。1〜9は、**土師器**である。1は、小碗であろう。内外面とも篦磨きする。2〜4は、碗である。2は内外面とも篦磨き、3は内面篦磨き外面横撫で、4は内外面とも横撫で調整する。5は、高台部である。大型品であり、壺または鉢の底部であろうか。6・7は、焼き塩壺の破片である。内面には目の細かい布目が残る。外面は、指押さえする。8・9は、甕である。口縁は横撫で、体部内面は削り、外面は縦方向の刷毛目調整する。

10〜14は、**越州窯系青磁**である。10・14は、全面施釉で輪状高台につくる。10は高台の畳付きに目痕が付くが、14では高台の内側に付く。また、14は見込みに沈線文(文字か)を持ち、体部上半を篦で押さえて輪花につくる。11・12は、

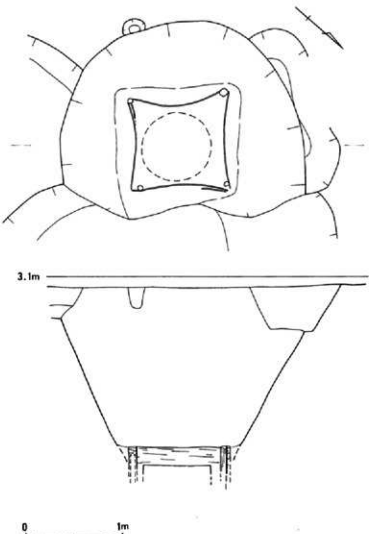


Fig.15　1628号遺構実測図 (1/40)

Ph.16　1628号遺構出土遺物

平高台である。外底部は、露胎である。15～18は、白磁である。15は、皿と思われる。全体に施釉する。16は、底部である。高台は露胎であるが、高台際近くまで露胎としている。17・18は、口縁を玉縁につくる。19・20は、陶器である。壺であり、同一個体の可能性が考えられる。灰緑色の釉をかける。

21～23は、平瓦である。21は上面に布目、下面に縄目叩きを、22・23は上面に布目、下面に斜め格子の叩きを施す。

これらの出土遺物からみて、1628号遺構を11世紀前半代に比定したい。

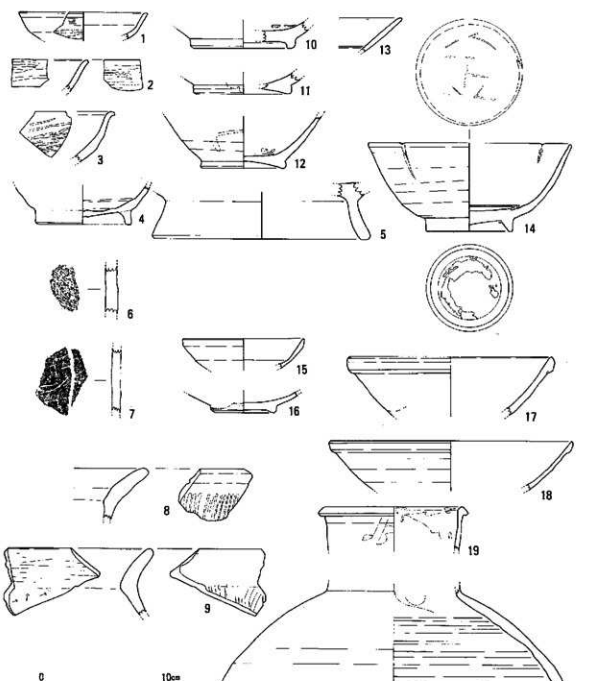


Fig.16　1628号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

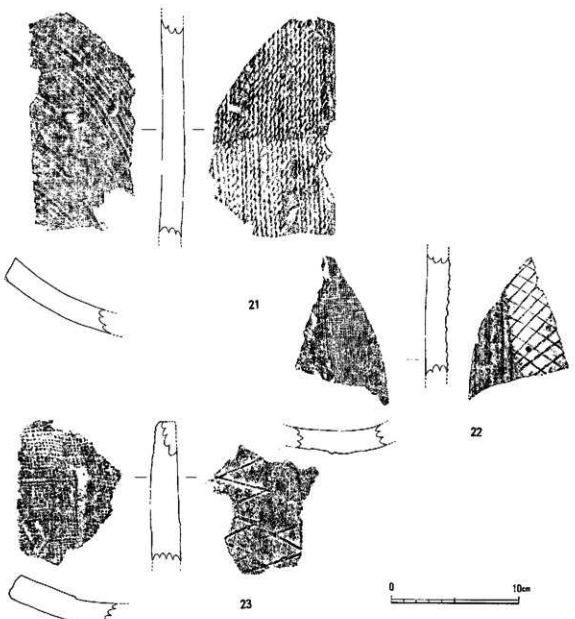


Fig.17　1628号遺構出土遺物実測図２（1/3）

1697号遺構

G区第5面で検出した井戸である。東側を1666号遺構に切られる。

径約230センチほどの掘り方を持つ井戸で、検出面から120センチほど下げたところで井戸側を検出した。井戸側は、板材を方形に組んだ物で、上下二段が確認できた。上段は一辺約100センチ、下段は約90センチをはかる。井戸側の中央で、円形の木質の痕跡を確認した。遺存状態はきわめて悪いが、木目や木質の継ぎ目の有無などからみて、曲げ物と考えるのが打倒であろう。

Fig.19に出土遺物を示す。1・4・5は、**土師器**である。1は、碗である。時期的に遡る遺物で、混入品と思われる。4・5は、坏である。器壁は、摩滅気味で調整痕は残っていない。2・3は、**須恵器**である。2は、高台付き坏である。横撫で調整される。3は、鉢である。口縁は直行して、端部を丸くおさめる。内外面とも、横撫で調整である。

6は、**越州窯系青磁**の碗である。平底で、糸切り痕が見られる。内面と体部上半に、施釉する。見込みには重ね焼きの目痕が残る。7〜9は、**白磁**の碗である。7の見込みには、三重の沈線で、

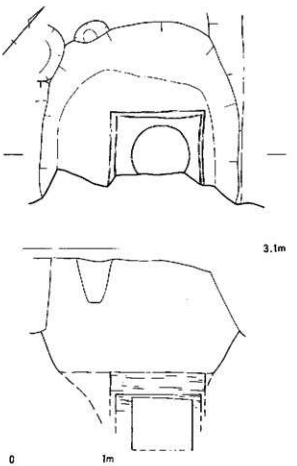


Fig.18　1697号遺構実測図（1/40）

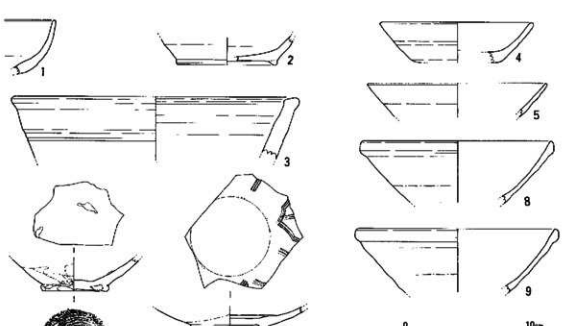
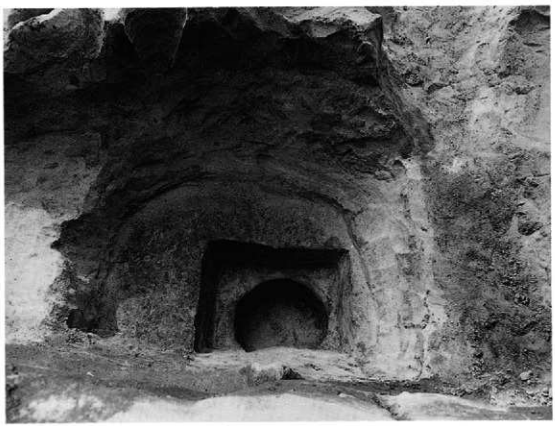


Fig.19　1697号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.17　1697号遺構（南東より）

Ph.18　1697号遺構井戸側（北東より）

蕨集文を描く。高台は、露貼である。8・9は、口縁を玉縁につくる。

これらの出土遺物から考えて、1697号遺構は11世紀中ごろに比定するのが妥当と思われる。

1932号遺構

E区第5面で検出した井戸である。12世紀中ごろの1916号遺構、12世紀前半の1927号遺構に切られ、次に述べる2004号遺構を切る。

径290センチ前後の略円形を呈する。検出面から120センチほど掘り下げたところで、湧水のため掘削が困難になり、以下の調査を断念した。井戸側等の有無は明かではない。

須恵器・土師器・焼き塩壺などが出土している。須恵器の坏蓋は、口縁端部を下方に折り曲げるタイプである。

8世紀後半と考えられる。

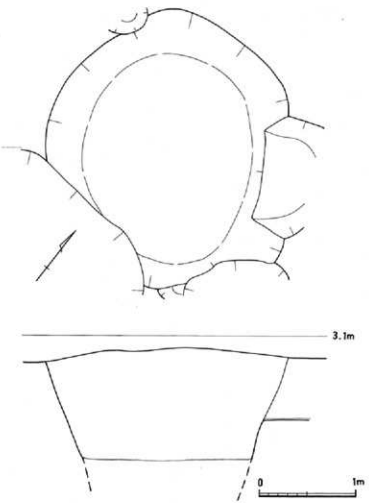


Fig.20　1932号遺構実測図（1/40）

Ph.19　1932号遺構（南東より）

2004号遺構

E区第5面より検出した遺構である。前項で報告した1932号遺構、第4面の1361号遺構に切られる。

遺構の重複のため全体の形状は明かではないが、おおむね直径375センチ前後の円形を呈している。検出面からは120センチほど掘り下げたが、湧水のため以下の掘削を断念した。したがって、井戸側の形状・有無等は不明である。

出土遺物の一部を、Fig.22に示す。1は、須恵器である。低平な高台が、体部と底部との屈曲点付近に張り付けられている。2・3は、土師器である。2は、焼き塩壺で、内面には、目の細かい布目が認められた。3は、甕の口縁部である。内外面ともに、横撫で調整する。

これらの遺物・他の遺構との切り合い関係などからみて、8世紀後半の井戸と思われる。

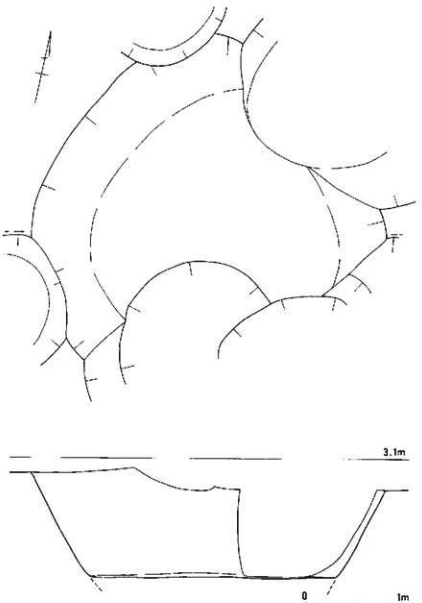


Fig.21　2004号遺構実測図（1/40）

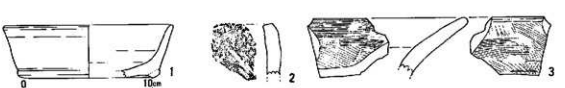


Fig.22　2004号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph.20　2004号遺構（東より）

(3)　土坑

1856号遺構

C区第5面において検出した土坑である。

長軸190センチ、短軸180センチの卵型を呈し、検出面からの深さ160センチ前後をはかる。円筒形に近い形状の土坑であり、井戸の可能性も考えられたが、湧水もなく完掘できたので、一応土坑と考えた。

紙数の関係から実測図を紹介できなかったが、若干の遺物が出土している。土師器・須恵器・焼き塩壺などのほか、越州窯系青磁・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。このうち、緑釉陶器の一つを、131ページFig.109-37に図示している。京都系緑釉陶器の碗で、9世紀後半に編年される遺物である。このほかの遺物にもこれより下る要素はなく、1856号遺構の年代として9世紀後半を当てて支障ないと考える。

1871号遺構

B区第5面より検出した土坑である。長辺の一部を他の遺構に切られて失うが、全形を知る上で妨げとなるほどではない。

平面的には、長辺170センチ、短辺150センチの略長方

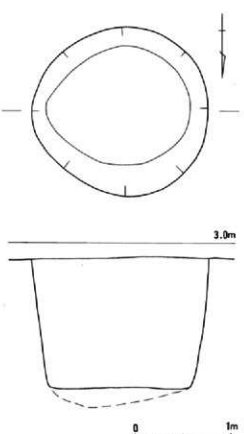


Fig.23　1871号遺構実測図（1/40）

形を呈する。床面は平坦で、長辺120センチ、短辺90～110センチの西に開いた台形となる。床面の四隅には、径15センチほどの杭穴が見られた。検出面からの深さは、80センチ前後をはかる。地下貯蔵庫のような機能を考えれば良かろうか。

出土した須恵器をFig.25に示した。1は、坏蓋である。口縁部は、下に折り曲げる。2は、高台坏である。

このほか、土師器・竈・焼き塩壺・鉄滓などが出土している。

これらの遺物から、8世紀後半の時期が与えられる。

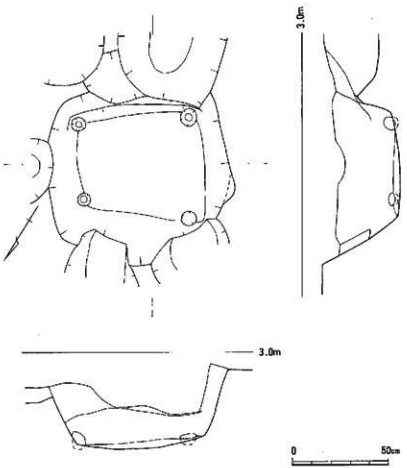


Fig.24　1871号遺構実測図（1/20）

1895号遺構

C・E区第5面から検出した遺構である。浅い皿状のくぼみに、鉄分が沈着し硬化したものと見られる。

出土遺物の一部をFig.26に示す。1は、須恵器の坏蓋である。2～4は、土師器である。2は、坏である。横撫で調整する。3・4は、甕である。口縁部は横撫で調整、

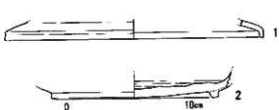


Fig.25　1871号遺構出土遺物実測図（1/3）

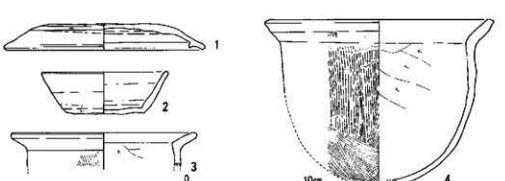
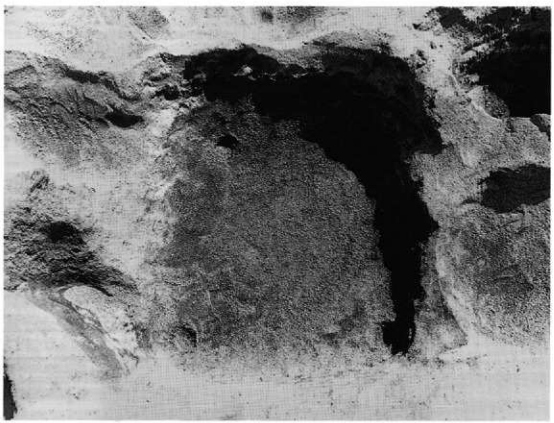
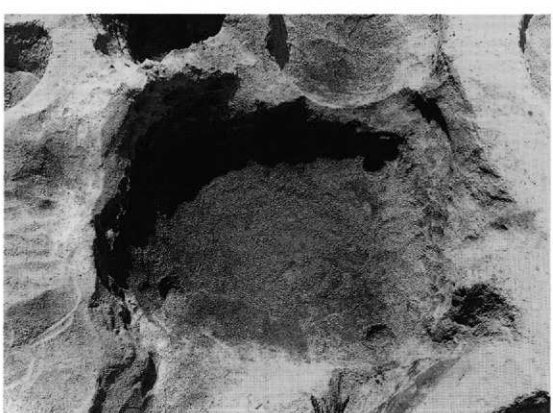


Fig.26　1985号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.21　1871号遺構（南西より）



Ph.22　1871号遺構（北西より）

体部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は斜め削りを施す。

これらの出土遺物から7世紀後半の時期が与えられよう。

(4) 溝状遺構

1614号遺構・1666号遺構

1614号遺構はD・E区第5面、1666号遺構はE区第5面で検出した溝である。本来一連の溝であるが、調査の進行上、異なる遺構番号が付いている。

溝の幅は、115～180センチ、深さは46～65センチをはかる。溝底の標高をとると、北西から南東に向かって深くなっている。溝の断面は、U字形である。

1666号遺構の溝底からは、馬の下顎が出土している。

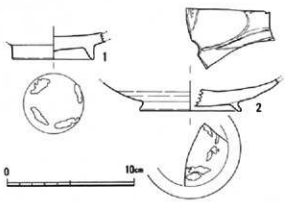


Fig.27 1614号遺構出土遺物実測図 (1/3)

Ph.23 1614号遺構土層断面（南東より）

Fig.27に示したのは、1614号遺構から出土した**越州窯系青磁**である。全面施釉で、高台の内側に目痕が付く。2の見込みには、沈線で花文を描く。

Fig.28は、1666号遺構の出土遺物である。1～4・20・21は、**土師器**である。1～4は皿で、底部はすべて篦切りである。口径10.0～10.4センチをはかる。20は、椀である。21は、甕である。5～7は、**黒色土器A類**の碗である。5・6は内面を篦磨き、外面を横撫で調整する。7は、内外面とも密に篦磨きする。8・9は、**黒色土器B類**の碗である。内外面ともに密に篦磨きする。10は、**緑釉陶器**の小片である。

11～14は、**越州窯系青磁**である。14の蛇の目高台の畳付きには、重ね焼きの目痕が残る。15～19は、**白磁**である。15は、蛇の目高台につくる。18は、皿である。体部に篦を当てて、輪花につくる。

これらの出土遺物からみて、1614号遺構・1666号遺構の時期は、11世紀前半に当てるのが妥当であろう。

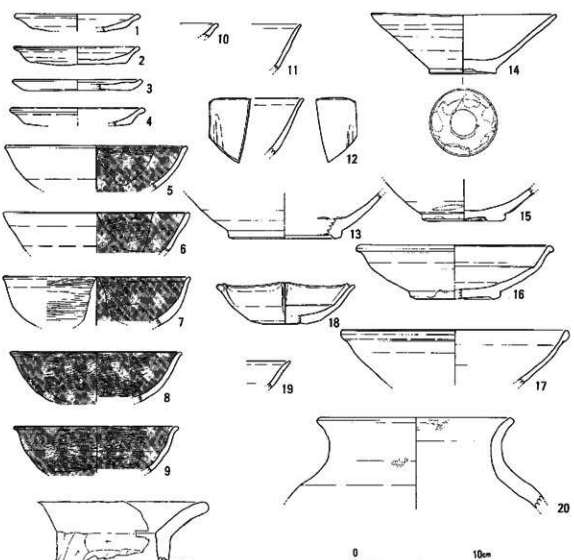


Fig.28　1666号遺構出土遺物実測図（1/3）

1690号遺構

G区第5面において検出した溝である。この部分においては、すべての遺構に切られている。

溝の幅は150～170センチ、検出面からの深さ32.5～56センチをはかる。砂地であるため、掘りすぎた部分もあると思われ、正確を期すことは困難だが、一応標高をとると、南東から北西に傾斜しているようである。溝の断面は、緩い「U」字形を呈する。

須恵器・土師器の小片が小量出土したのみだが、実測に耐えた遺物をFig.29に図示した。1・2は、滑石製品の未製品である。1は、小玉の未製品で、穿孔した箇所から半割している。表面そのものも剝離しているようで、本来穿孔前になされているはずの表面の研磨の痕跡が残っていない。2は、滑石のチップである。未製品というよりも、むしろ削り屑というべきであろうか。3・4は、土師器である。3は、甕である。口縁部と体部外面は刷毛目調整、体部内面は削りを行う。4は、脚の裾である。外面は横位の篦磨き、内面は刷毛目に粗く篦磨きがかかっている。

出土遺物と切り合い関係から、8世紀代の遺構として良かろう。

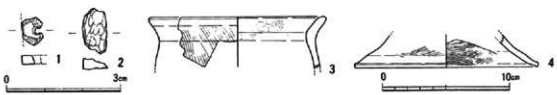


Fig.29　1690号遺構出土遺物実測図（1・2-1/1，3・4-1/3）

Ph.24　1690号遺構断面（北西より）

6．中世の遺構と遺物

本調査で検出した遺構と遺物の大部分が、この時期に属する。おおむね、中世の全般にわたって遺構・遺物が見られるが、11世紀後半から13世紀までのものがもっとも多く、ついで16世紀代のものがみられ、14世紀後半及び15世紀のものは少ない。以下、遺構の種類別に概略を報告する。

(1) 井戸

古代の井戸に関する説明でも述べたことだが、本調査地点は博多遺跡群の他の調査地点と比べても湧水の水位が高く、井戸遺構の最下部近くまで調査できた例は希であった。したがって、ほとんどの井戸で、井戸側などの構造が不明なままとならざるをえなかった。

727号遺構

E区第2面において検出した井戸である。湧水のため途中で調査を断念している。井戸側などの構造は不明。第2面の検出面からとれば、227センチまで掘り下げている。

第2面・第3面においては、南東側を近代以後の撹乱に切られているため、取り上げた遺物にはかなりの近代の陶磁器が混入している。Fig.30には、特殊な遺物をあげた。1は、須恵器の蓋である。短頸の小壺あるいは瓶の蓋であろう。天井部の縁には、沈線がめぐる。2は、越州窯系青磁の碗である。3は、白磁の碗である。筐を縦に当てて押しつけ、輪花につくっている。

これらの遺物は、遺構の時期を示さない。井戸としては、おそらく15～16世紀の遺構であろう。

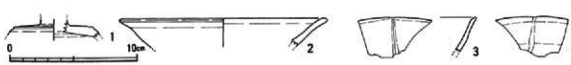


Fig.30　727号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph.25　727号遺構（南より）

915号遺構

C区第3面において検出した井戸である。次に述べる916号遺構に切られる。第3面・第4面調査時には、大型の掘り方を持つ単一の井戸として扱ったが、最終的に掘りあげたところ、2基の井戸に分かれた。結局、915A,915Bとせざるをえなかったが、本来は切り合い関係にあるまったく別の井戸である。ちなみに、915Aを915Bが切っていた。915Aは、井戸側に桶を用いる。

Fig.31の1～4に示したのは、915号遺構と次に述べる916号遺構との重複部分から出土したものである。切り合い関係からみれば、916号井戸にいれるべき遺物かもしれないが、大事をとって、915～916として報告する。

1は、**緑釉陶器**である。長門産か。2は、**天目茶碗**の底部である。青州窯であろう。3は、**常滑焼き**の甕である。ラッパ状に大きく開いた口縁端部を、「く」字形におりかえす。そのため、口縁部の上面には、沈線状のくぼみがめぐる。常滑2期に編年される資料である。4は、**白磁**の浅碗である。見込みには、3本単位の沈線で蕉葉文を描く。

5～7が915号遺構出土資料である。5は、**緑釉陶器**である。京都産で、円盤高台を貼りつけている。915Bからの出土。6は、**高麗青磁**の碗である。肌理の細かい胎土を用いた精品である。全面施釉だが畳付きが露胎となり、ここと見込みに目痕が付いている。915Aから出土した。7は、同安窯系の**青磁皿**である。底部の露胎部分に墨書があるが、大部分を欠くため判読できない。

このほか、915Aからは、土師器（底部糸切り）、白磁、越州窯系青磁、瓦磚などが、915Bからは、土師器（糸切り）、龍泉窯系青磁、白磁、瓦器、陶器、緑釉陶器、瓦などが出土した。

915Aは11世紀後半、915Bは12世紀後半に位置づけられよう。

916号遺構

C区第3面で検出した井戸である。上述した915号井戸を切る。第3面上で、直径約330センチの円形の掘り方を持ち、井戸側に径約60センチの結い桶を用いている。第3面から桶を検出した深さまでで201センチをはかる。

出土遺物をFig.31-8～30に示す。8は、**緑釉陶器**の碗である。9は、**焼き塩壺**の破片である。外面には指圧痕が、内面には布目が残る。

10～13は、**越州窯系青磁**の口縁部破片である。14は、**白釉陶器**の小皿である。内面に褐彩をくわえる。15～19は**白磁**である。15・16は碗、17・18は皿である。19は、小壺の蓋である。上面には波濤模様の印花文をあしらう。20～22は、**青白磁**の合子である。20は蓋で上面に印花を持つ。21・22は、身である。

23は、柚葉型の**黒色土器B類**の碗である。内外面とも密に篦磨きする。口縁直下の内面には、沈線がめぐる。24・25は、**柚葉型瓦器碗**である。黒色土器と同様に内外面とも密に篦磨きし、口縁直下に沈線を巡らせる。

26は、**無釉陶器**の擂鉢である。胎土は粗いが、堅く焼き締まる。

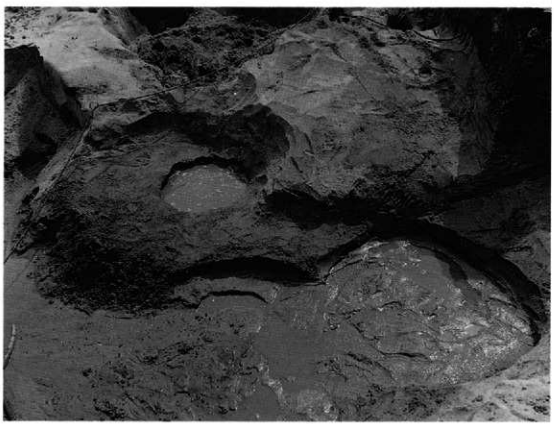
27・28は、**瓦**である。27は丸瓦、28は平瓦である。ともに内面に布目痕、外面に縄目の叩きを持つ。

29は、管状**土錘**である。土師質に焼成される。

30は、**石硯**である。方形硯の海の部分にあたる。いわゆる赤間石をもちいている。

このほか、土師器(糸切り)、白磁(口禿)、青磁(鎬蓮弁文)などが出土している。

これらの出土遺物から、916号遺構の時期として13世紀後半から14世紀初め頃を考えたい。



Ph.26　915号遺構（東より）

Ph.27　916号遺構（北西より）

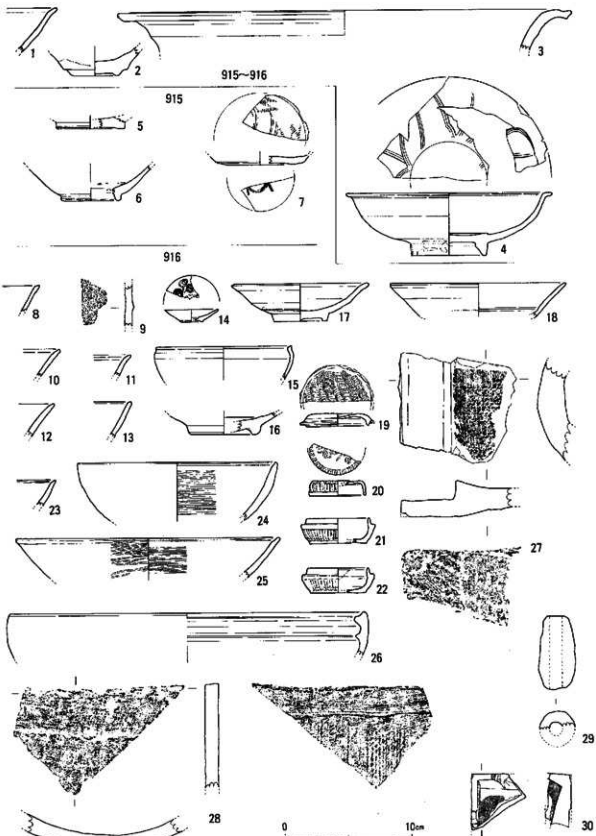


Fig.31　915号遺構・916号遺構出土遺物実測図（1/3）

935号遺構

C区第3面で検出した井戸である。第3面上においては、他の遺構との切り合いのため、明瞭な平面形態を把握しきっていないが、第4面において掘り方の形状をほぼ検出した。第5面においては、調査区を囲う鋼矢板の縁に安全のため1メートルの引きをとったため、935号遺構の掘り方の大部分はこの中に入ってしまい、ほとんど調査できなかった。

もっとも平面形を良好に検出した第4面ではかると、掘り方の直径は約3.2メートルで、ほぼ円形を呈する。第5面で最も深く掘り下げえた部分で、最初に検出した第3面からの深さは183センチをはかる。

出土遺物のうち、図化に耐えたものをFig.32に示す。1・2は、**土師器**の皿である。ともに底部は回転糸切りで、内底部に指で調整を加える。法量は、それぞれ口径8.2，9.0センチ、底径7.0，7.4センチ、器高0.95，1.7センチをはかる。

3は、**越州窯系青磁**の碗である。全面に施釉した後、畳付きの釉を削り取る。畳付きと見込みには、狭い間隔で目痕が並ぶ。4は、**高麗青磁**の碗である。全面施釉で、畳付きが露胎となる。

5～9は、**白磁**である。5は皿で、外底部の露胎部分に墨書が認められる。「綱」と読めそうだが、はっきりとはしない。6～9は、碗である。6の高台内には、墨書がみられる。漢字一文字と花押のようであるが、ちょうど半分で割れており、判読できない。10・11は、**青磁**である。10は、連江窯系の小碗である。体部外面の下半部は、露胎となる。小さい高台を削りだしている。11は、同安窯系の碗である。高台脇の体部外面と、高台内に墨書されている。ともに判読できない。12は、**天目茶碗**である。黒釉が施される。13・14は、**褐釉陶器**の瓶である。13には暗褐色～茶オリーブ色の釉が、14には淡褐色の釉がかかっている。

Ph.28　935号遺構（北より）

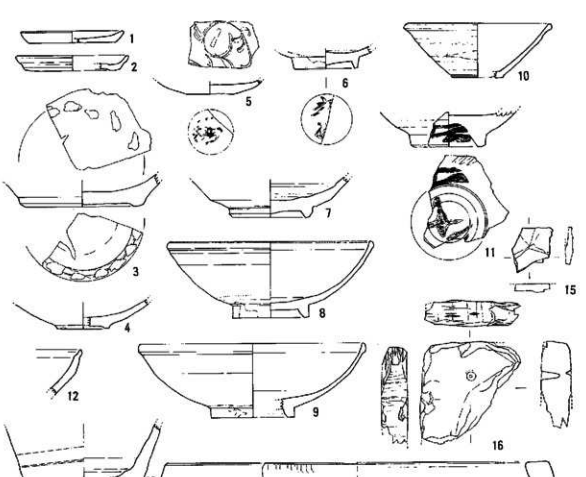


Fig.32　935号遺構出土遺物実測図（1/3）

15は、砥石の断片である。肌理細かく、仕上げ砥と見られる。16は、滑石製の石板である。未製品のようで、孔が貫通していない。いわゆる温石であろう。17は、滑石製の石鍋である。外面には、煤が付着する。

このほかに口禿の白磁皿、鏑蓮弁文の青磁碗なども出土している。これらの点からみて、935号遺構は、13世紀前半頃の井戸とするのが妥当であろう。

1017号遺構

D区第3面で検出した井戸である。

径80～90センチの略円形を呈する。湧水のため、下部を検出できなかった。最初に検出した第3面からはかって、170センチほど掘り下げている。

Fig.33に出土遺物を示す。1～6は、土師器である。1は皿で、口径6.7センチ、器高1.4センチをはかる。2～6は、坏である。2は、底径が小さく、体部が大きく開くタイプだが、器肉が厚く、いわゆる大

Ph.29　1017号遺構（西より）

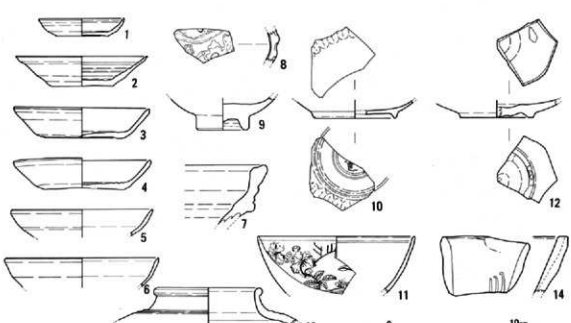


Fig.33　1017号遺構出土遺物実測図（1/3）

内タイプの土師器とは異なる。3〜6は、わずかに内湾しつつ立ち上がる体部を持ち、口縁部は円みを持って肥厚する。口径は、10.5〜12.2センチとばらつきがある。これらの皿・坏の底部は、すべて糸切りである。7は、**備前焼**の擂鉢である。

8・9は、**青磁**である。8は壺の体部であろう。深い印花文が施される。9は、碗である。高台の内側まで釉が回る。10・11は、**染付**である。10は菊皿、11は碗である。12は、**朝鮮王朝**の粉青沙器の皿である。内面に白色の土が刷毛塗りされる。13は、**中国陶器**の壺である。褐色で不透明な釉が薄くかかる。14は、陶器の擂鉢である。

これらの遺物からみて、15世紀末から16世紀前半を考えて良かろう。

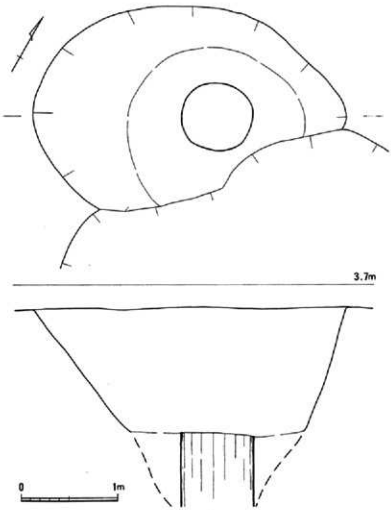


Fig.34　1243号遺構実測図（1/40）

1243号遺構

C区第4面で検出した井戸である。915号遺構に切られる。

掘り方は、長径3.4メートル、短径2.5メートルの楕円形を呈する。第3面から140センチほど掘り下げたところで、井戸側を検出した。井戸側は、直径約75センチの結い桶である。

Fig.35-1〜5は、前代の遺物の混入である。1〜3は**焼き塩壺**、4は**高麗青磁**皿、5は**越州窯系青磁**碗である。

6〜9は、**土師器**である。6〜8は皿で、口径8.8〜10.0センチ、器高1.4〜1.5センチをはかる。

Ph.30　1243号遺構（東より）

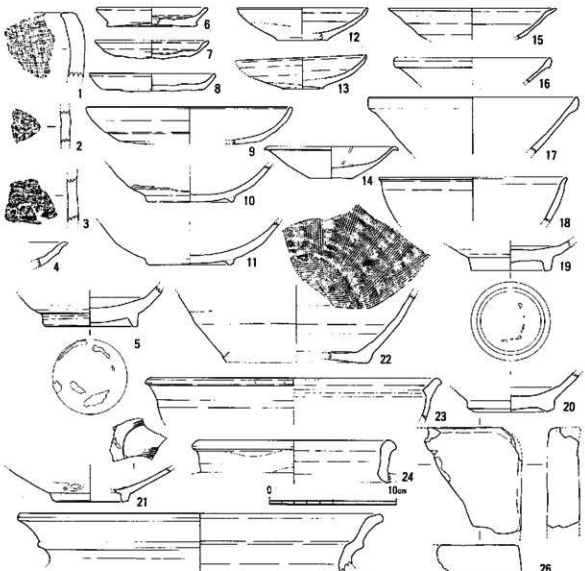


Fig.35　1243号遺構出土遺物実測図（1/3）

9は坏である。やや丸底気味につくる。内面はきわめて平滑に調整されている。口径16.4センチ。これらの皿・坏の底部は、回転糸切りで切り放されている。

10・11は、**筑前型瓦器碗**である。内外面は篦磨きされるが、磨きの単位は、幅が広くて浅く、とらえがたい。

12～20は、**白磁**である。21は、同安窯系**青磁**の碗である。22～25は、**陶器**である。22は擂鉢で、薄い茶緑色の釉がかけられている。23は、黄釉の鉢である。体部内面に、灰オリーブ色の釉を施す。口唇部には、目痕が認められる。24は、壺である。茶褐色の釉をかけるが、頸部は露胎になっている。25は、甕の口縁である。焼き締め陶器で赤褐色を呈する。

26は、瓦質の**磚**である。文様はない。

12世紀後半代の井戸と考える。

Ph.31　1259号遺構検出状況（南東より）

Ph.32　1259号井戸（北より）

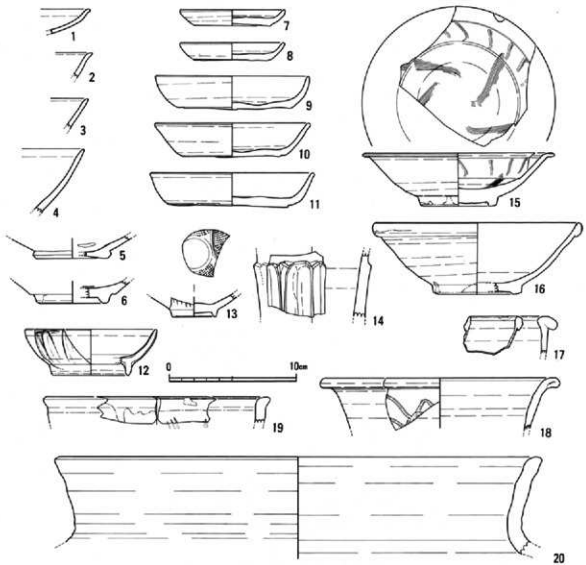


Fig.36　1259号遺構出土遺物実測図（1/3）

1259号遺構

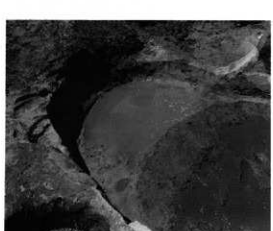
B区第4面で検出した井戸である。第5面では、湧水のためじゅうぶんな調査ができなかった。

第4面上で、径280～300センチをはかる。

Fig.36-1～6は、**越州窯系青磁**であり、前代の遺物の混入である。7～11は、**土師器**である。7・8は皿、9～11は坏である。すべて底部は回転糸切りで、内底の撫で調整と板目圧痕を伴う。

12・13は**青磁**である。14～16は、**白磁**である。14は袋物の体部である。17・18は**中国陶器**である。17は褐釉陶器の鉢である。

Fig.37　1345号遺構遺物実測図（1/3）



Ph.33　1345号遺構（東より）

18は暗茶色の釉をかけた擂鉢である。体部内面は露胎で、擂り目が刻まれる。19は、高麗の無釉陶器である。黒灰色のテリがつく。壺の口縁で、頸部に沈線で波状文を描く。

20は、備前焼の甕である。焼き締め陶器にならず、銀化した灰色を呈する。

これらの遺物から、13世紀後半の年代を考えたい。

1345号遺構

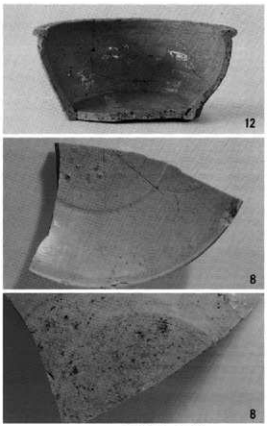
E区第4面で検出した井戸であるが、撹乱の縁にわずかに残ったに留まる。また、湧水のため完掘できていない。

土師器・青磁碗の特徴などから13世紀後半から14世紀初めに位置づけられるが、Fig.37には楠葉型瓦器碗を図示している。

1361号遺構

E区第4面で検出した井戸である。ただし、これに伴なう井戸側は確認できていない。

長軸2.8メートル、短軸2.4メートルの卵型を呈する。



Ph.34　1361号遺構出土遺物

Ph.35　1361号遺構（東より）

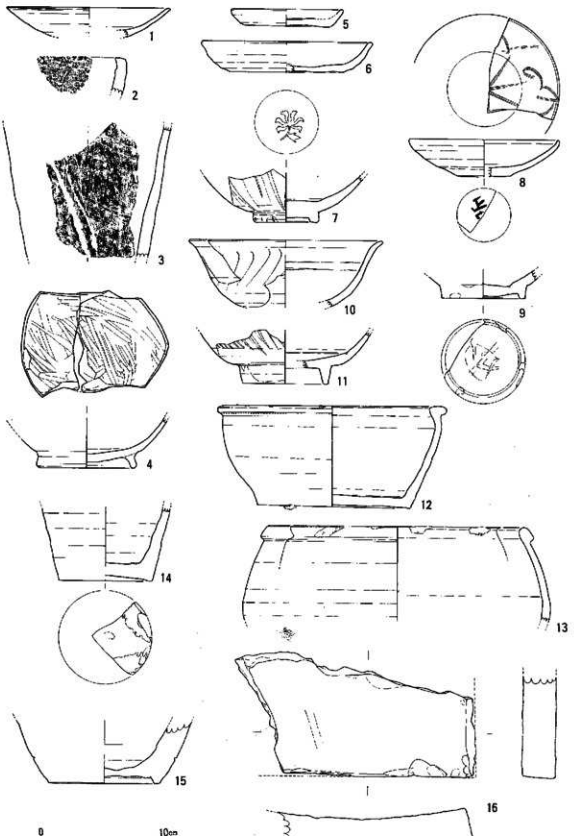


Fig.38　1361号遺構出土遺物実測図（1/3）

出土遺物を、Fig.38に示す。1〜4は、前代の遺物の混入である。1は、**緑釉陶器**の皿である。9世紀代の長門型と考えられる。2・3は、**焼き塩壺**である。4は、**土師器**の碗である。内面は丁寧に筐磨きする。外面は横撫で調整である。5・6は、**土師器**である。底部は回転糸切りで、内底部に撫で調整、外底部に板目圧痕を持つ。

7は、**青磁**の碗である。鏑蓮弁文を持つ。8〜11は、**白磁**である。8の皿と9の碗の底部には、墨書がみられる。8は、「正」または「王」と花押と思われるが、9は判読できない。12〜15は、**陶器**である。12は、黄釉の鉢である。13は、褐釉陶器の鉢である。口縁部には、目痕が並ぶ。14は、瓶の底部である。暗灰緑色の釉が薄くかかる。外底部には、砂が薄くついている。15は、壺の底部である。暗赤褐色の釉が薄くかかる。

16は、**平瓦**である。焼けて剝離したようで、表面は荒れている。

13世紀代に当てるのが妥当であろう。

1443号遺構

G区第2面で検出した井戸である。

第2面上で長径3.8メートル、短径3.4メートルの楕円形を呈する。第3面から2.6メートルほど掘り下げたところで井戸側を検出したが、井戸側は2基出土した。井戸側は、ともに結い桶を用いた物で、やや歪んでいるが直径50センチ前後をはかる。また、東側の井戸側の中には、これより一回り小さな曲げ物が据えてあった。曲げ物は、直径40〜48センチをはかる。掘り下げ中の土質の変化や掘り方の形状を見る限りこのふたつの井戸側のあいだには、前後関係はなく、同時に据えられたものと考えざるをえない。

比較的多くの遺物が出土している。それらの内には、第5面で1443号遺構に切られて検出した1624

Ph.36　1443号遺構（北より）

号遺構と接合できるものが多く含まれている。1624号遺構は、明らかに1443号遺構に先行するもので、これらの遺物は本来1624号遺構にともなったものが、1443号遺構の掘削によってその埋土中に混入し

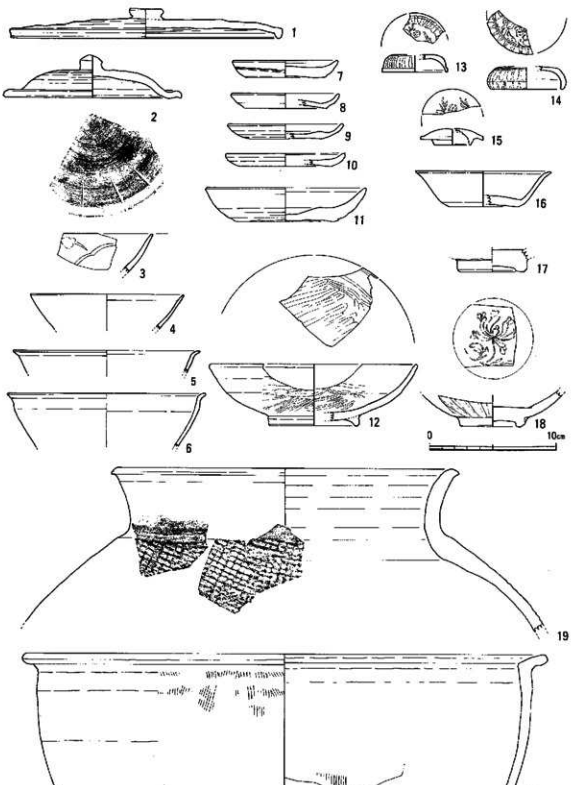


Fig.39　1443号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

たものと考えることができる。

Fig.39-1～6は、前代の遺構からの混入遺物である。1は須恵器、2は土師器で、坏蓋である。1の内面には、きわめて細い十文字の箆記号がある。3～5は、越州窯系青磁である。3の内面には、沈線で花文を描く。6は、高麗青磁の碗である。

7～11は、土師器である。すべて底部を回転糸切りする。7～10は皿で、口径8.4～9.5センチをはかる。11は坏で、口径12.8センチである。12は、筑前型瓦器碗である。内外面とも、密に箆磨きする。

13～15は、青白磁である。13・14は合子の蓋、15は小壺の蓋である。いずれも天井部に印花文をつ

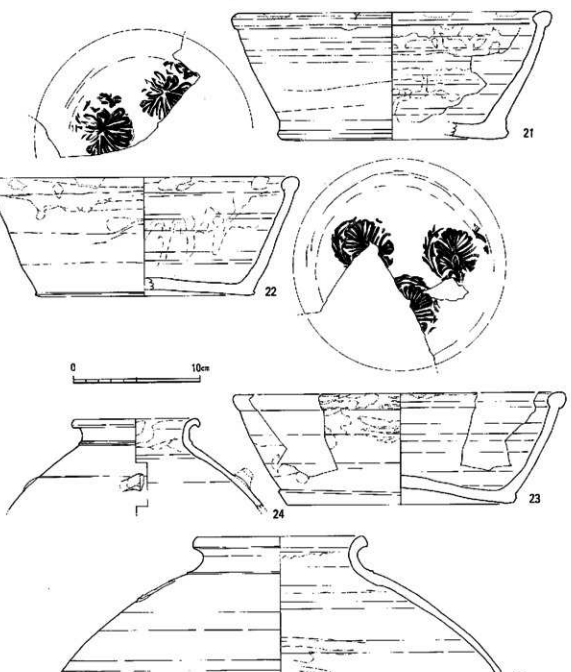
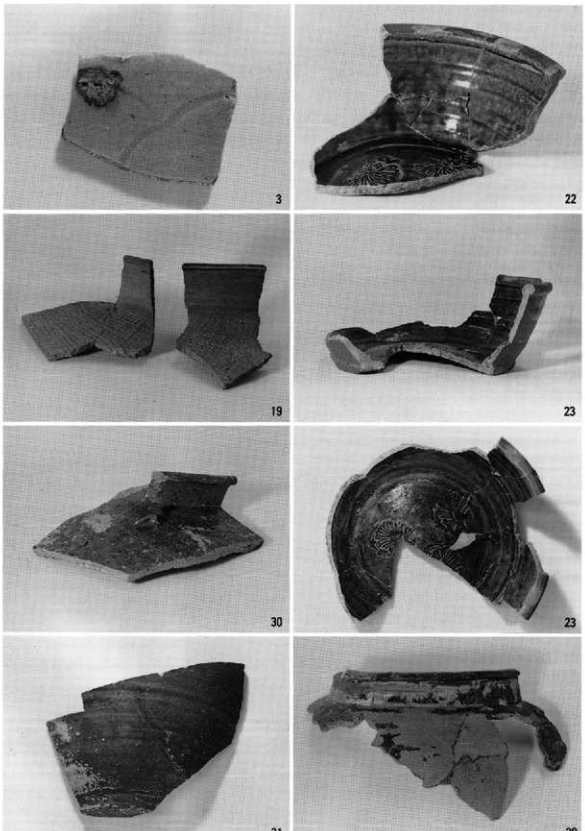


Fig.40　1443号遺構出土遺物実測図２（1/3）



Ph.37　1443号遺構出土遺物１（縮尺不同）

ける。16は、**白磁**の皿である。口縁の釉を掻き取り、いわゆる口禿にする。17・18は、**青磁**の碗である。18には、蓮弁文をあしらう。

19は、**備前焼**の甕である。焼き締めにはならず、須恵質の焼成で、銀化した灰色を呈する。20は、**土鍋**である。口縁部から体部内面は横撫で調整、体部外面は縦の刷毛目調整を施す。

21～37は**陶器**である。21～23は緑褐釉の盤で、22・23の見込みには、印花文が施される。24～35は、褐釉の四耳壺である。26と27は、同一個体であろう。黄味の強い褐緑色釉をかける。30と31も同一個体の可能性がある。32の肩部、34の同部上端には、印花文がみられる。また、33・34には波状の沈線がめぐる。36・37は、無釉陶器の捏鉢である。36の外底部と体部の一部には、日土が付着している。

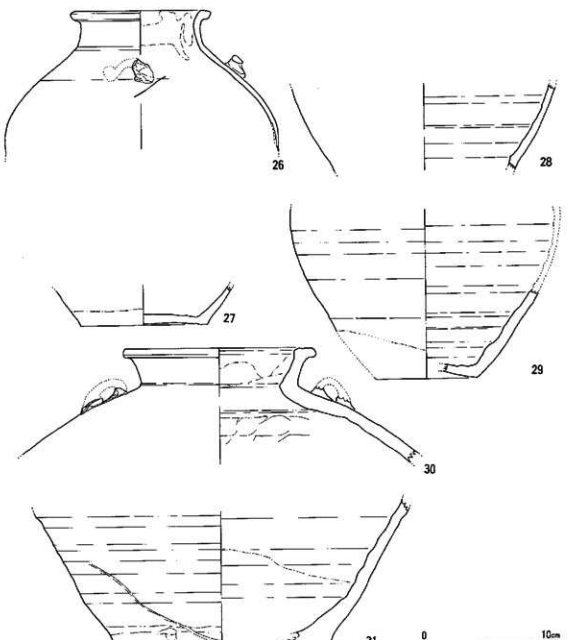


Fig.41　1443号遺構出土遺物実測図３（1/3）

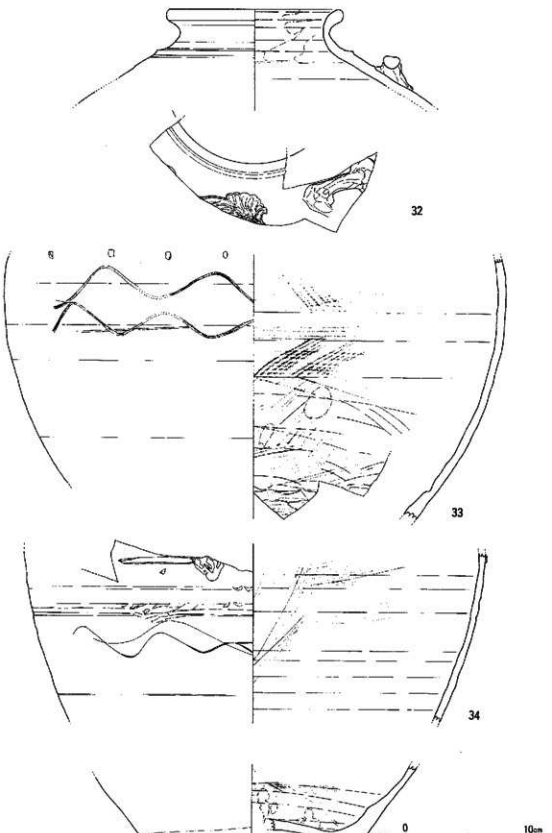


Fig.42　1443号遺構出土遺物実測図 4 （1/3）

Ph.38　1443号遺構出土遺物２（縮尺不同）

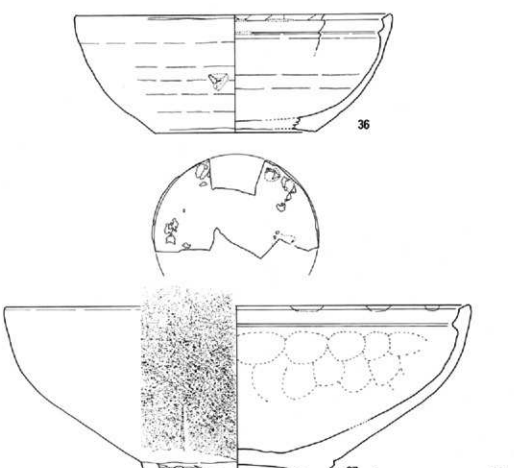


Fig.43　1443号遺構出土遺物実測図５（1/3）

これらの遺物のうち、19・21～23・25・29～33・36・37が1624号遺構と接合できている。

上記のほかに、連江窯系青磁碗片、ガラス坩堝片などが出土している。これらの遺物からみて、1443号遺構は13世紀前半頃に比定することができるだろう。

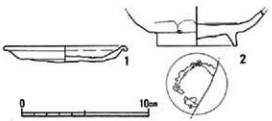


Fig.44　1609号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph.39　1609号遺構（北西より）

1609号遺構

E区第4面より検出した井戸である。第4面ではその一部を確認したにすぎないが、第5面において全体を検出することができた。

第5面での成果によると、掘り方の直径は約2.7メートルで、そのほぼ中央に径約65センチの結い桶を据えて井戸側としている。

土師器(研磨土器、篦切り)・白磁・陶器・天目・越州窯系青磁・瓦・滑石勾玉・砥石・鉄釘などが出土した。Fig.44-1は、**土師器**の皿である。白色系の胎土で、口縁部をひねりだして丸く外反させる。底部は、篦切りである。2は、**越州窯系青磁**の碗である。全面施釉で、高台の内側に目痕が残る。

これらの遺物からみて、1609号遺構は12世紀前半の井戸と見て、大過ないだろう。

Ph.40　1698号遺構（南より）

Ph.41　1698号遺構遺物

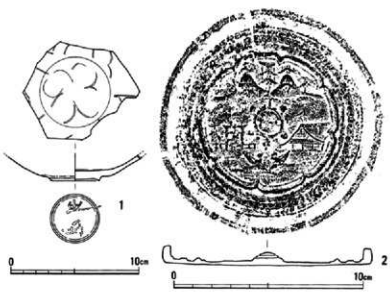


Fig.45　1698号遺構出土遺物実測図（1/3，1/2）

1698号遺構

A区第５面で検出した井戸である。A区の北角に当たり、掘り方の一部を調査したにすぎない。

土師器(糸切り)、青磁、白磁、陶器などが出土している。Fig.45-1に図示したのは、白磁の皿である。外底部の露胎部に墨書を持つ。漢字二文字であることはわかるが、判読できない。2は、和鏡である。頭を下に向けた亀鉦で、亀の下に雀が二羽向かい合わせに飛ぶ。雀の嘴は接していない。背景に鳥居と社殿、その背後に海と山（蓬莱山？）・松が描かれる。龍宮鏡の一種であろう。

鏡の編年観によれば室町時代を遡ることはないようで、一応15世紀代の井戸と考えておく。

1739号遺構

A区第5面で検出した井戸である。大部分が、第1面の51号井戸と重なっている。ただし、第5面上ではその掘り方は51号遺構より大きく、直径4.2メートルをはかる。

土師器(筒切り・糸切り)、瓦器、白磁、青白磁、青磁、陶器などが出土している。Fig.46-1・2は、**緑釉陶器**である。1は東海系で10世紀以後、2は京都系で10世紀前半のものである。3・4は**灰釉陶器**で、10世紀以後に編年される。5~9は**白磁**である。7と9の底部には、墨書がある。7は、墨痕が見えるだけで判読できない。9は花押である。

これらの遺物から、1739号遺構は12世紀後半に比定するのが妥当であろう。

Ph.42　1739号遺構（南より）

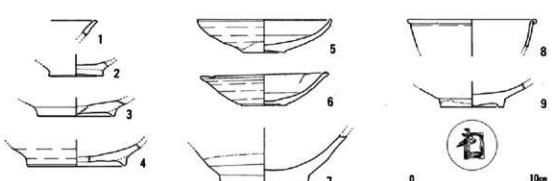


Fig.46　1739号遺構出土遺物実測図（1/3）

1774号遺構

A区第5面検出の井戸である。

井戸側の桶を二段分確認することができた。

土師器(篦切り)、黒色土器、白磁、陶器、越州窯系青磁などが出土した。図示したのは、井戸側の中から出土した**短刀**である。呑口式の柄を備えたもので、鞘は欠いていた。刀身は片側のみに刃をつけた切刃造りで、柄元付近には刃

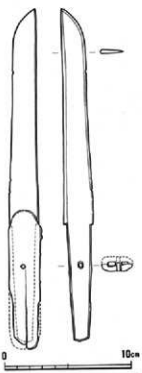


Fig.47　短刀実測図 (1/3)

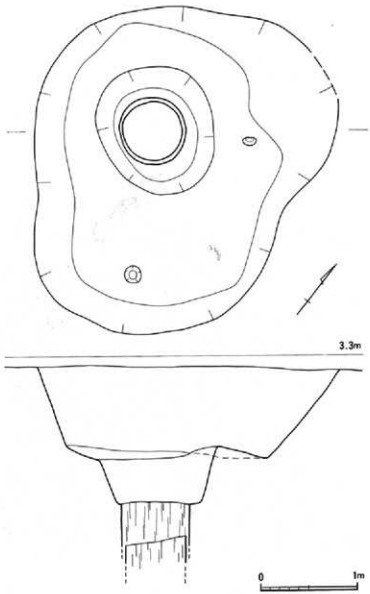
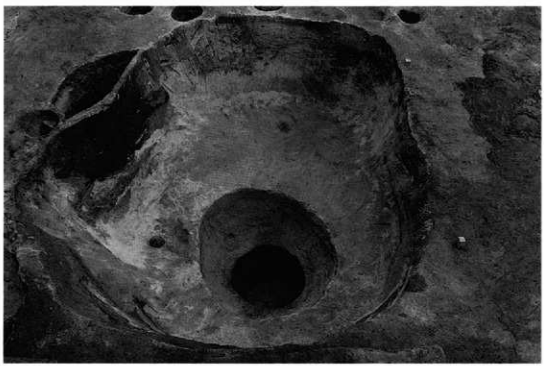


Fig.48　1774号遺構実測図 (1/40)

Ph.43　1774号遺構出土短刀



Ph.44　1774号遺構（北西より）

を付けていない。全長26.5センチ、身部長17.2センチをはかる。

これらの出土遺物からみて、11世紀後半の井戸であろう。

1853号遺構

C区第5面で検出した井戸である。第1面の286号遺構(井戸)、第3面の916号遺構に切られる。

掘り方は、長径2.5メートル、短径2.1メートル(推定)の楕円形を呈する。検出面から約1.1メートルで井戸側の木質を確認した。井戸側は、直径90センチの結い桶とみられる。桶の内側を50センチほど掘り下げたが、湧水のため断念せざるをえなかった。

土師器(糸切り)、白磁(口禿)、青磁(鎬蓮弁文)、東播系須恵器捏鉢、瓦などが出土している。

おおむね、13世紀代の井戸である。

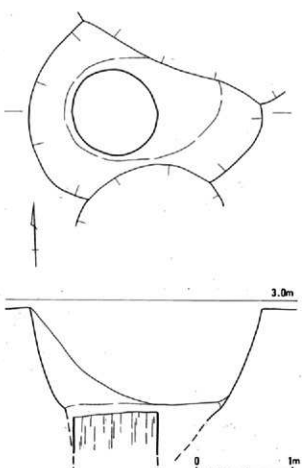


Fig.49　1853号遺構実測図（1/40）

Ph.45　1853号遺構（東より）

Ph.46　1987号遺構（東より）

1987号遺構

C区第5面で検出した井戸である。1243号遺構に切られ、掘り方の一部と井戸側を検出したにすぎない。井戸側は、結い桶を用いたものである。

土師器(筵切り、糸切り)、白磁、陶器、越州窯系青磁、押圧文系瓦、砥石、骸骨などが出土した。12世紀前半の井戸と考えられる。

1988号遺構

B区第5面で検出した井戸である。径110～130センチの略円形を呈する。井戸側などは確認していない。湧水以下まで続いていたので井戸としたが、掘り方小さく、疑問も残る。

土師器(筵切り、糸切り)、白磁、陶器、瓦などが出土した。Fig.49に示したのは、最下層近くから出土した遺物である。1は、磁州窯系の**白釉陶器碗**である。釉下に白化粧がみられる。2は、**柿釉天目碗**である。高台を露胎とする。3は、**黒釉天目碗**である。やはり高台のみを露胎とする。形態的に非常に類似した資料である。

12世紀前半の井戸であろう。

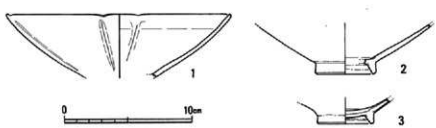


Fig.50　1988号遺構出土遺物実測図 (1/3)

Ph.47　1989～1992号遺構、井戸群（南より）

(2) 土坑

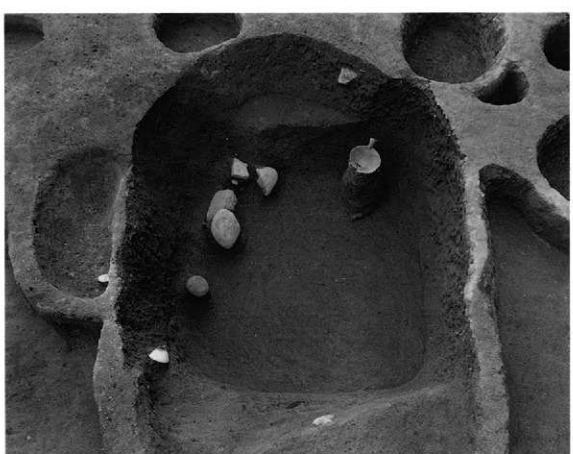
中世の土坑には、さまざまな機能・形態のものがある。本調査においても、塵の廃棄土坑、地下室状の施設などがある。以下の記述に当たっては、遺構番号順にこれを述べ、機能・性格による種別は文中でふれるだけで、特に行わない。なお、本調査においては、土壙墓・木棺墓などの土葬墓にあたる土坑が検出されなかったことを特記しておく。

124号遺構

B区第1面で検出した土坑である。第1面で検出した段階では、ややいびつな楕円形を呈していたが、第2面においては、ほぼ方形のプランを示した。これは、第1面調査時での遺構検出の甘さによるものと考える。

第2面における遺構の形状をはかると、一辺130センチの隅丸方形を呈する。土坑床面も平坦で、箱型の土坑となる。第1面から床面までの深さは、約95センチをはかる。

出土遺物をFig.51に図示する。1〜11は、**土師器**である。すべて底部は回転糸切りで、内底部には撫で調整を加える。1〜6は皿で口径6.4〜7.2センチ、器高1.05〜1.4センチをはかる。7〜11は坏で法量的にはかなりのばらつきがある。10・11などは、あるいは古い時期の遺物が混入したものかも知れない。12・13は、**備前焼**の擂鉢である。備前焼では5期に編年される。14・15は、**瓦質土器**である。14は火舎である。口縁下の二条の凸帯の間には、薄くスタンプ文が残る。15は擂鉢である。内面は撫で調整をした上で、4本を単位とした擂り目をいれる。口縁の内面は横方向の刷毛目調整、体部外面は



Ph.48 124号遺構（北東より）

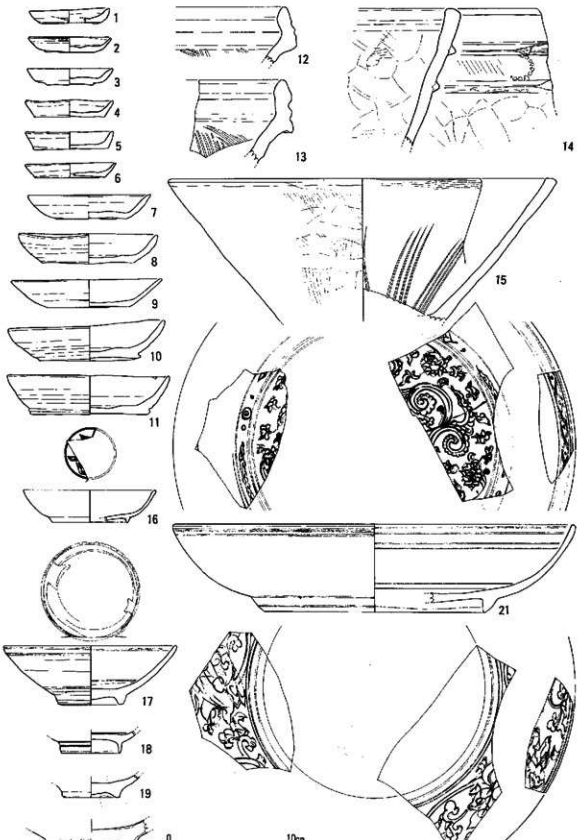


Fig.51　124号遺構出土遺物実測図1（1/3）

縦の刷毛目調整である。

16～19・21は、染付である。16は、皿である。17の碗の見込みは、円形に釉が掻き取られ露胎となる。18は、いわゆる饅頭心につくる。21は、大皿である。全面に施釉したのち、畳付きの釉を削り取る。19は、朝鮮王朝陶器の皿である。20は、青磁の碗である。

Fig.52-22に示したのは、埋土の中程から出土した銅の柄杓である。完形品だが、土圧による破損が著しい。口縁内面には、二条の凹線がめぐる。柄はソケット状に差し込み、目釘で固定する。目釘穴には、横方向に擦り切って付けた痕跡があるが、これがどういう機能を持つのか不明である。碗部分の口径は約16センチ、深さは4.6センチをはかる。

124号遺構は、その整った箱型の形状からみると、本来は地下貯蔵庫的な機能を負った可能性も考えられる。しかし、結局は廃絶されるに当たって、廃棄土坑に転じたものであろう。

遺物の年代観から、16世紀の遺構であろう。

158号遺構・159号遺構

D区第1面において検出した集石列である。157号遺構に切られる。周辺に一連の集石遺構があるが、方向性からみて直接関わらないようで、それらに先行するものと思われる。建物の基礎か区画の一部であろう集石から出土した備前焼

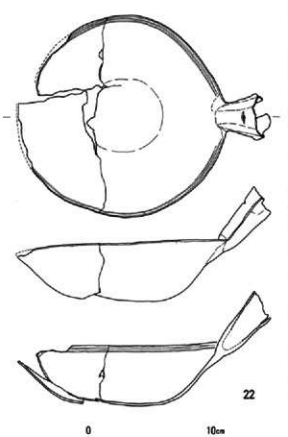
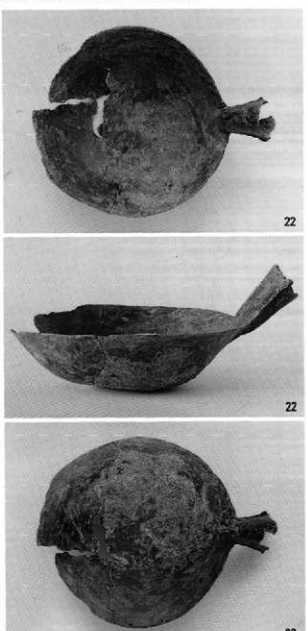


Fig.52　124号遺構出土遺物実測図2（1/3）



Ph.49　124号遺構出土銅製柄杓

Ph.50　158号遺構・159号遺構（西より）

の瓷や明代の染付からみて、16世紀末と考えられる。

204号遺構

D区第1面で検出した土坑である。調査区の西辺にかかっており、全体を知りえない。200号遺構・207号遺構に切られる。

出土遺物をFig.53に図示する。1は、**土師器**の皿である。口径6.8センチ、底径4.9センチ、器高1.45センチをはかる。底部は、回転糸切りされる。

2は、**白磁**の皿である。全面に施釉したのち、高台畳付きの釉を削り取る。3・4は、**染付**である。3は皿で、底部は碁笥底になる。底部の畳付き部分のみ露胎となる。4は、碗の底部である。いわゆる饅頭心につくる。5は、**青磁**の碗である。高台の畳付きまで釉がかかり、高台の内側の立ち上がり部分のみ露胎のまま残されている。体部外面には、沈線による菊弁文が、見込みには「福」のスタンプ文が押される。

6は、**備前焼**きの擂鉢である。7は、中国の**褐釉陶器**の瓷である。黒褐色釉を施す。8は、**瓦質土器**の擂鉢である。内面は、横方向の刷毛目調整の上に4本単位の擂り目を刻む。外面は、縦方向の刷毛目調整である。内底付近は、使用により摩耗している。

これらの出土遺物からみて、16世紀後半の時期が与えられよう。

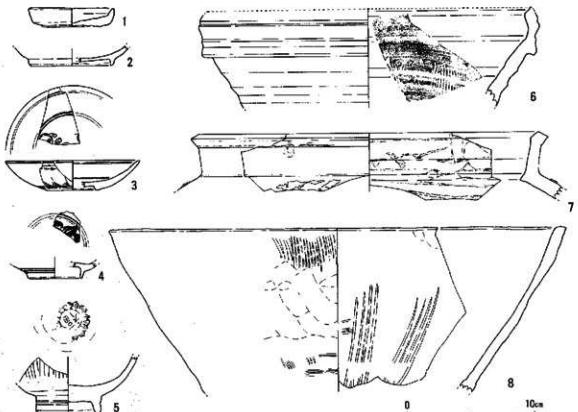


Fig.53　204号遺構出土遺物実測図（1/3）

243号遺構

D区第1面から検出した土坑である。径約1.1メートルの円形を呈し、深さは約20センチをはかる。

Fig.54に出土遺物を示す。1～6は土師器である。底部は、すべて回転糸切りである。1～3は皿で、口径6.4～7.1センチ、器高1.7～1.9センチをはかる。3の口縁には、油煙が付着しており、灯明皿に使われたことを示している。4～6は、坏である。口径10.9～11.4センチ、器高2.5～2.8センチをはかる。7は、**取り瓶**である。土師質の焼成だが使用の際に強い火熱を受け、焼き締まっている。内面から口縁にかけて、べったりと銅が付着している。8は、**瓦質土器**の摺鉢である。内面に7本単位の摺り目をいれる。

これらの遺物からみて、16世紀代の土坑と考えられる。廃棄土坑であろう。

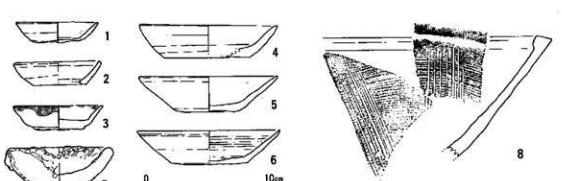


Fig.54　243号遺構出土遺物実測図（1/3）

297号遺構

C区第1面で検出した大型の土坑である。調査区の東壁にかかっており、全体を知りえない。調査しえた範囲で、長軸1.7メートル程度の不整形の土坑である。

Fig.55に出土遺物を示す。1・2は**土師器**である。底部は回転糸切りする。3は、**瓦質土器**の鉢である。

4は、**青磁**である。香炉であろう。内面は露胎となる。5・6は**白磁**である。5は、碁笥底の皿である。6は、高台畳付きを露胎とする。7・8は、**染付**の皿である。全面に施釉した後、高台畳付きを削って露胎とする。9は、**褐釉陶器**の壺である。

10は、管状**土錘**である。土師質に焼成される。

これらの遺物からみて、16世紀後半の廃棄土坑であろう。

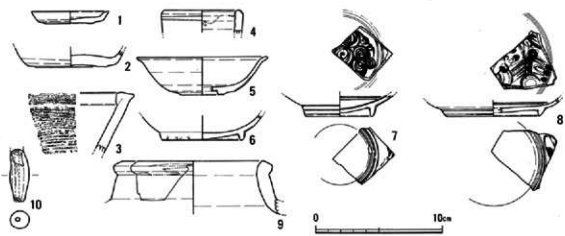


Fig.55　297号遺構出土遺物実測図（1/3）

464号遺構

A区第2面で検出した土坑である。埋土上位に土師器の皿・坏がまとまって廃棄されていた。

土坑は、長軸62センチ、短軸45センチの不整楕円形を呈している。検出面からの深さは、12センチである。

出土遺物をFig.57に示す。1〜4は、**土師器**である。いずれも底部は回転糸切りで、内底部の静止撫で調整は行わない。1・2は皿、3・4は坏である。それぞれの法量を口径-底径-器高の順に列記する。1は8.4-5.9-1.75、2は9.0-6.4-1.7、3は13.6-9.5-2.95、4は13.5-9.7-3.0センチである。

5は、**瓦質土器**の摺鉢であ

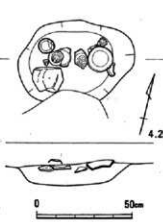


Fig.56　464号遺構実測図（1/20）

Ph.51　464号遺構（北東より）

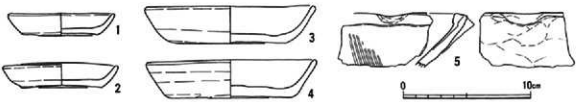


Fig.57　464号遺構出土遺物実測図（1/3）

る。内面には、7本を単位とした擂り目を刻む。口縁は、片口につくる。

このほか、白磁・陶器・鉄釘などが出土した。

おおむね、16世紀頃の遺構と考えられる。

539号遺構・540号遺構・541号遺構

B区第2面において検出した小規模な土器溜まりである。近接した3カ所に分散して土師器がかたまって出土したもので、明瞭な掘り方は確認できなかった。

以下、それぞれの土師器を紹介する。

Fig.58の1～4は、539号遺構から出土した土師器である。底部はすべて回転糸切りする。1には内底部に静止撫で調整がみられるが、2～4には見られない。以下、それぞれの法量を口径-底径-器高の順に列記する。1は11.6-7.8-2.2、2は12.0-7.0-3.0、3は12.1-8.3-2.5、4は12.6-8.2-3.0センチである。

5～7は、540号遺構から出土した土師器である。すべて、底部は回転糸切りで、内底部に静止撫で調整を加える。5は皿であり、6・7は坏である。それぞれの法量を上と同様に口径-底径-器高の順に列記する。5は8.2～8.4-6.1-1.55、6は12.5-8.2-2.9、7は13.6～13.8-9.6～9.8-2.85センチである。

Ph.52　539・540・541号遺構（南より）

Ph.53　540号遺構遺物出土状況（南より）

8～11は、541号遺構出土の土師器である。底部はすべて回転糸切りで、いずれも内底部の静止撫で調整は行わない。8は皿、9～11は坏である。以下、それぞれの法量を口径-底径-器高の順に列記する。8は8.0-5.0-1.5、9は12.2～12.4-8.1-2.4、10は12.3-8.0～8.1-2.5、11は12.4-7.7-2.7センチをはかる。

これらの遺構出土遺物の間に、法量的にはほとんど差がなく、したがって同時に埋納された可能性があるのは言うまでもないだろう。しかし、だからといってその用途を特定できるわけではなく、とりあえず、大ざっぱな言い方ではあるが、地鎮のような呪術的な用途を想定して起きたい。

時期的には16世紀であろう。

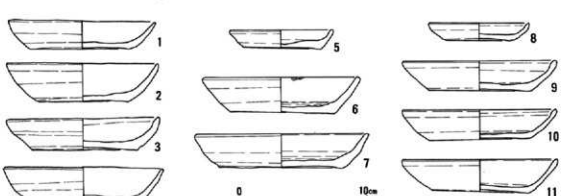
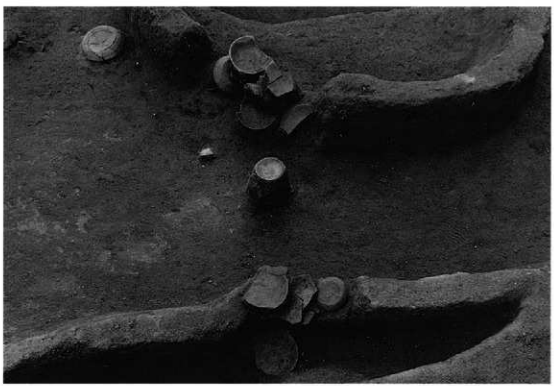


Fig.58　539・540・541号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph.54　541号遺構遺物出土状況（南東より）

549号遺構

D区第２面で検出した土坑である。

長辺100センチ、短辺70～90センチの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは約30センチをはかる。床面はほぼ平坦で、箱型を呈する。床面に２基ほど小ピットがみられるが、本遺構との関連はないものと思われる。

出土遺物のうち、図化できたものをFig.60に示す。

1は、**土師器**の皿である。底部は回転糸切りする。口径6.0センチ、底径4.6センチ、器高1.5センチをはかる。2は、**備前焼**の摺鉢である。

3・4は、**白磁**の皿である。高台の畳付きは露胎となる。**5・6**は**染付**である。**7**は、**青磁**の皿である。全面施釉で、高台畳付きのみが露胎となる。高台の内側は、白磁となる。景徳鎮窯の製品であろう。

8は、**土師器**の蓋であろう。指先で押さえて、つまみをつくる。これらの出土遺物から16世紀後半に比定することができよう。

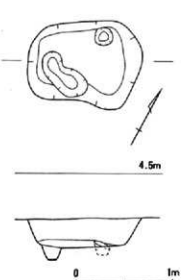


Fig.59　549号遺構実測図（1/40）

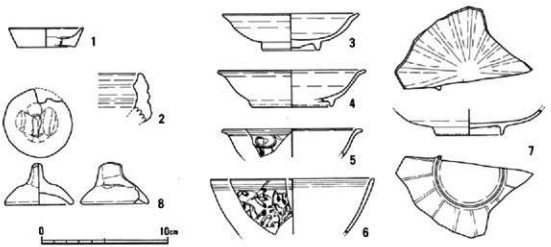


Fig.60　549号遺構出土遺物実測図（1/3）

583号遺構

D区第2面より検出した土坑である。半ば近くが調査区外にでるようで、全体を知りえない。調査できた範囲でみる限り、方形石積み土坑である。

16世紀後半におかれよう。

590号遺構

F区第2面で検出した土坑である。大部分が調査区外にでており、全体は知りえない。

出土遺物をFig.61に示す。1・2は、**土師器**の坏である。2は、いわゆる大内タイプである。3・4は、**白磁**である。3は皿で、4は碗である。5～7は、**染付**である。8は**朝鮮王朝**の粉青沙器の皿である。白土

Ph.55　583号遺構（北より）

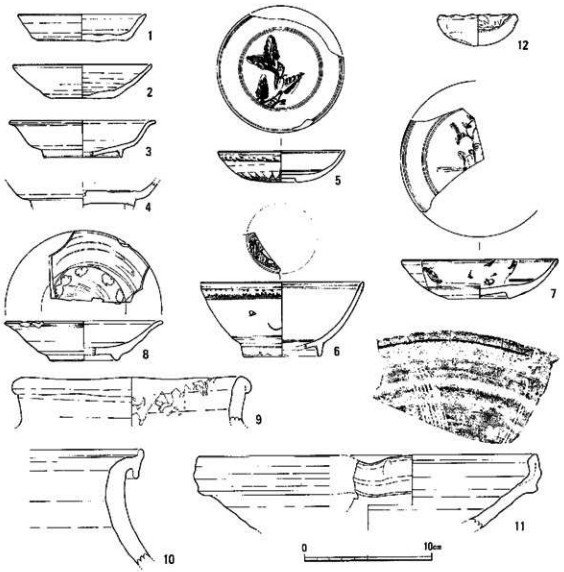


Fig.61　590号遺構出土遺物実測図（1/3）

を刷毛で塗る。見込みには目痕が並ぶ。9は、陶器の壺である。10は、常滑焼の甕である。11は、備前焼の擂鉢である。12は、小型の取り瓶である。内面には、銅が付着している。

16世紀代の遺構である。

601号遺構

C区第2面において検出した土坑である。長径90センチ、短径70センチの楕円形を呈し、深さは40センチ前後をはかる。

出土遺物をFig.63に図示する。1～9は、土師器の坏である。すべて、底部は回転糸切りである。口径11.9～13.0センチ、器高2.5～3.1センチをはかる。10は、瓦質土器の擂鉢である。内面は、使用のために剥離して凸凹となる。11・12は、石玉である。砂岩製。

このほかに、青磁(鏑蓮弁文)、陶器、瓦などが出土した。

これらの遺物からみて、13世紀代と考えられる。

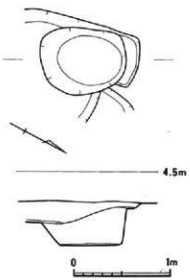


Fig.62　601号遺構実測図（1/40）

Ph.56　601号遺構（南東より）

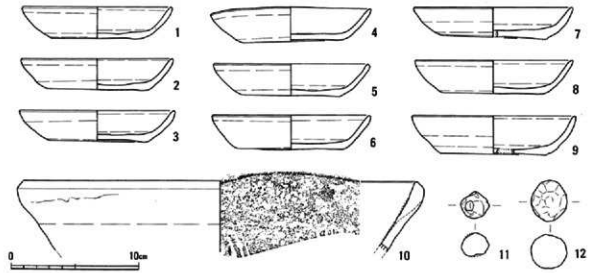


Fig.63　601号遺構出土遺物実測図（1/3）

637号遺構

C区第2面で検出した土坑である。長軸65センチ、短軸50センチの卵型を呈する。深さは、10センチ前後である。

出土遺物を、Fig.64に図示する。

1・2は**土師器**の坏である。底部は回転糸切りで、内底部に静止撫で調整を加える。1は口径11.4～11.6センチ、底径6.7～6.9センチ、器高2.45センチをはかる。2は同様に口径13.0センチ、底径8.0セン

チ、器高2.5センチをはかる。

3は、同安窯系青磁の碗である。高台の内側に墨書がある。「士」あるいは「十一」と読めるが、破片のため他の文字の有無がわからず、判断は保留したい。

12世紀後半の遺構である。

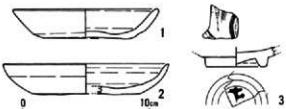


Fig.64　637号遺構出土遺物実測図（1/3）

Ph.57　637号遺構（南東より）

693号遺構

C区第2面で検出した土坑である。調査区東壁から、北西方向に延びてくる溝状の土坑で、検出した長さ230センチ、幅120センチ、検出面からの深さ24センチ前後をはかる。

埋土中から多量の遺物が出土した。土師器の坏・皿が主であるが、数が多すぎて十分に接合できなかった。したがって、完形品か、それに近い形で取り上げることができたものを中心に図化した。

Fig.65-1～26は、**土師器**である。底部は、すべて回転糸切りである。1～17は皿である。形態的には、口径が小さく、その割に器高が高い1と、その他とに分かれる。1は、口径6.9センチ、器高1.9センチをはかる。2～17は、口径8.1～8.8センチ、器高1.4～1.9センチをはかる。

18～26は、坏である。ひときわ大型で器高がある26と、その他とにわかれる。18～25は、口径13.4～14.4センチ、器高2.6～3.3センチ、26は口径15.6センチ、器高4.0センチである。

27・29は、**瓦質土器**である。27は鍋、29は摺鉢である。

28は、**白磁**の碗である。

このほか、青磁、陶器、瓦が出土している。

これらの遺物から、14世紀頃の一括廃棄土坑と考えられる。

Ph.58　693号遺構断面（北西より）

Ph.59　693号遺構（西より）

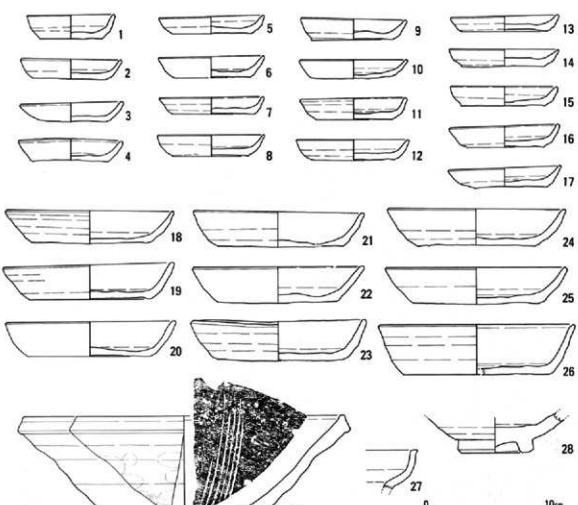


Fig.65　693号遺構出土遺物実測図（1/3）

726号遺構

E区第2面から検出した土坑である。長辺190センチ、短辺140センチの長方形を呈する。検出面から床面までの深さは、約110センチをはかる。断面形は、逆台形で、ほぼ箱型の土坑である。

埋土の中位には、赤茶色の肌理細かく、適度な粘りけを持つ土が堆積しており、この層を中心として多数の鋳型が出土した。この赤茶色土は、鋳物に使う鋳物土と思われる。鋳物土には、鋳型の外形をつくる荒土、鋳型の生地になる中土、鋳型の表面を整える肌土がある。中層の赤茶色土は、肌土にあたるものとおもわれる。

鋳物土は、土坑の底からは出土していないから、土坑がある程度埋まった段階で廃棄されたことは間違いない。一方、鋳型片は下層からも出土しており、この土坑が初めから鋳物生産と関わっていたことは明かである。この土坑自身が、鋳物生産の場でどの様な役割を持っていたのか、不明だが、少なくともその役割を終えた段階で廃棄土坑に転用され、破損した鋳型片や羽口、取り瓶、鋳物土などを投棄したものと思われる。

鋳型の報告の前に、土坑から出土したその他の遺物について紹介しておく。

Fig.67-1～4は、**土師器**である。底部は、回転糸切りする。1～3は皿、4は坏で、2・3の皿の内底部には油煙がついており、灯明皿

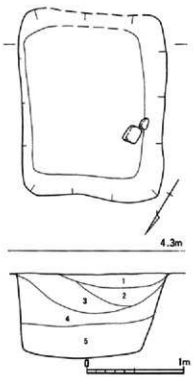


Fig.66　726号遺構実測図（1/40）

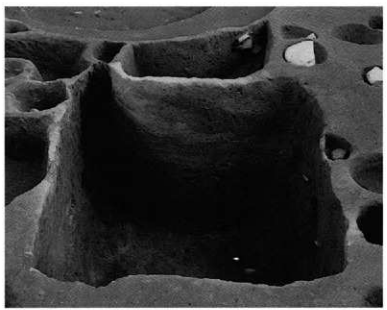
Ph.60　726号遺構（南より）

に使われたことを示している。

5は、**越州窯系青磁**である。外底部は露胎となる。6は、**高麗青磁**の碗である。7・8は、**青磁**である。7は碗で、体部外面に片切り彫りの菊弁を配する。8は、盤である。9・10は、**白磁**である。9は八角盃、10は皿の底部で、ともに高台に抉りをいれる。9の底部には、丸印を書いた墨書が残る。

11・12は、**平瓦**である。

Fig.68以降に**鋳型**を示す。ここに図示した鋳型は、以下の説明に沿った分類を行った後に比較的遺存状態の良い破片について実測したもので、言うまでもなく出土した鋳型片のすべてではない。また、分類できない鋳型小片もかなり残ったことを明記しておく。



Ph.61　726号遺構土層断面（北西より）

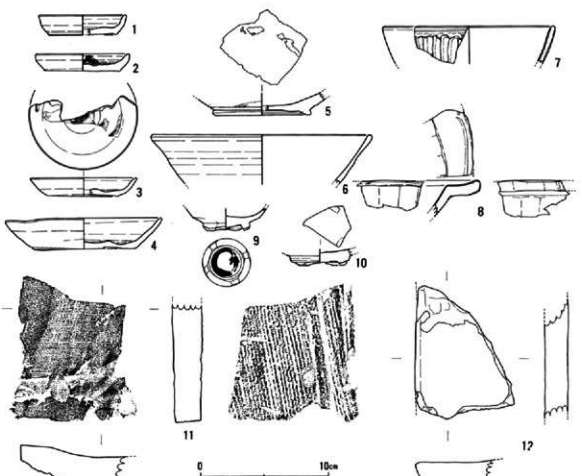


Fig.67　726号遺構出土遺物実測図1（1/3）

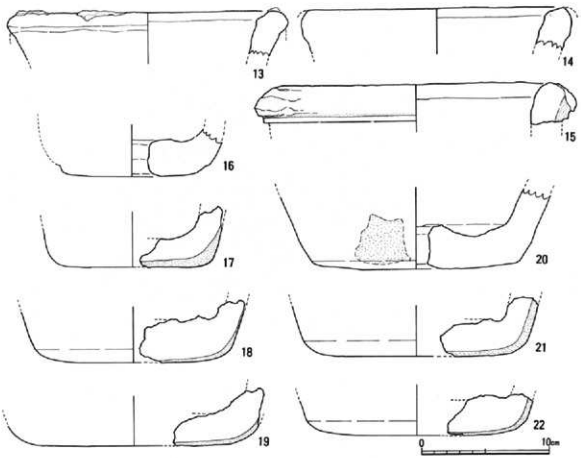
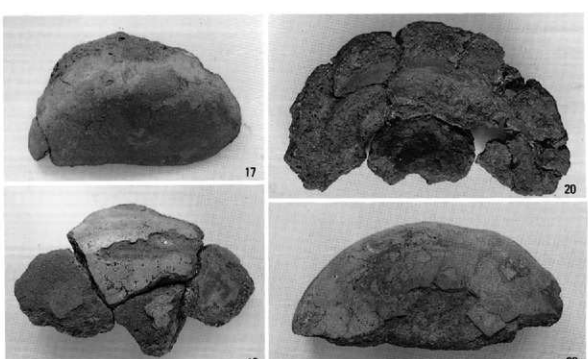


Fig.68　726号遺構出土遺物実測図２（1/3）



Ph.62　726号遺構出土鋳型１（縮尺不同）

13～22は、鋤の鋳型の中子である。13～15は、中子の上端部と思われる。13・14は荒土部分のみ、15は肌土部分まで残っている。16～22は、鍋の底部の中子である。16・20は荒土のみの破片だが、軸受けの孔がみられる。

23～26は、製品が不明の鋳型である。23が外型、24～26が中子になる。23の荒土は、笠形につくられる。24の中子は、ドーナツ状につくられている。中心の軸孔はかなり大きい。26の中子には、中土を塗り重ねた層と中土と肌土との境目の面が認められる。

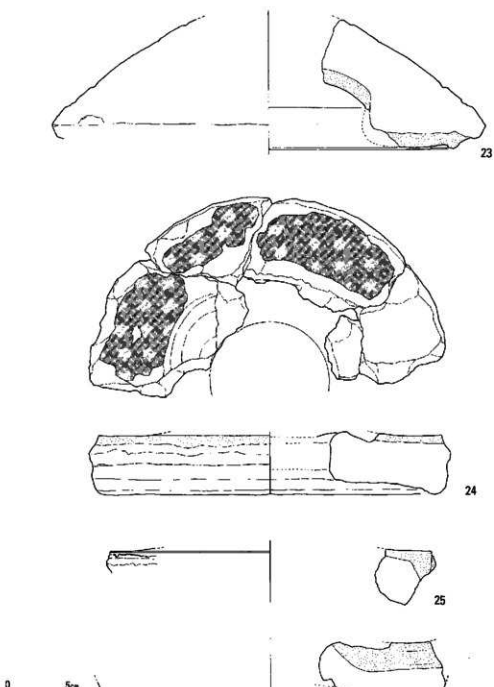


Fig.69　726号遺構出土遺物実測図3 (1/3)

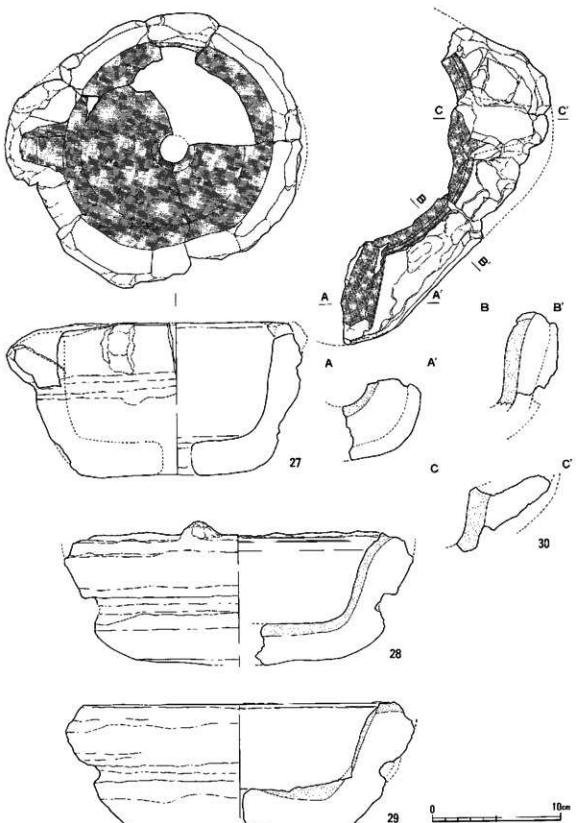
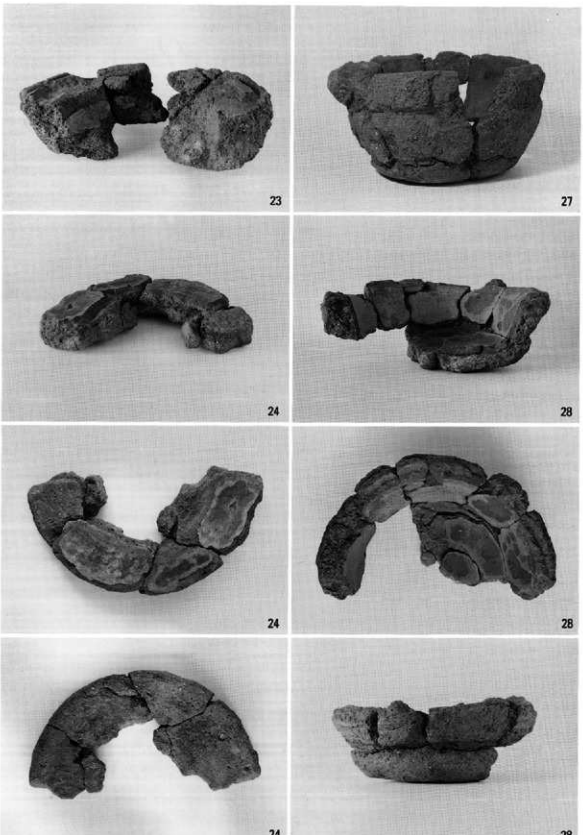


Fig.70　726号遺構出土遺物実測図4（1/3）



Ph.63　726号遺構出土鋳型２（縮尺不同）

27～30は、片口鍋の外型である。27は、ほぼ完形品に接合できた。ただし、中土と肌土はほとんど剝離している。28は、片口部分こそ残らないが、よく肌土をとどめた破片である。29では、肌土は禿げてしまい、中土が若干残る程度である。これらの外型の外面の中程には、縄をかけた痕跡が明瞭に残っている。30は、柄付き片口鍋の外型である。注口部と、これとほぼ直交する部分に取っ手を鋳出した面が残る。

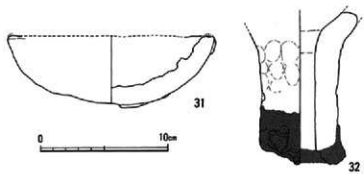
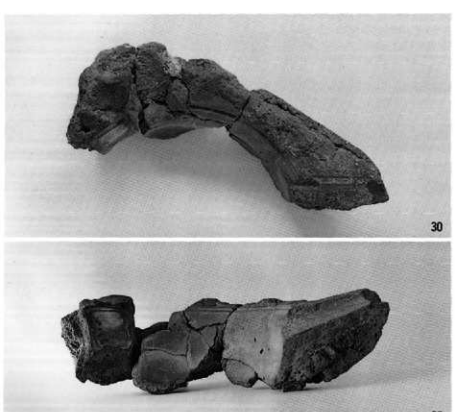


Fig.71　726号遺構出土遺物実測図５（1/3）

31は、取り瓶である。本来土師質に焼成されたものだが、二次的に火熱を受けて、焼きしまっている。外面は撫で調整だが、内面はほとんど全面にわたって剝離し、本来の面をとどめていない。口径は、おおむね16.5センチである。32は、ふいごの羽口である。細くすぼまった先端を溶解炉に差し込んでいたもので、先端部は溶けてガラス化している。

ちなみに、鋳型の荒土と、取り瓶の胎土、羽口の胎土には、藁や籾殻が多く含まれていた。これらは、同じ土を使ってつくられた可能性がある。

726号遺構は、出土遺物からみて、15世紀代の遺構と考えられる。



Ph.64　726号遺構出土鋳型３（縮尺不同）

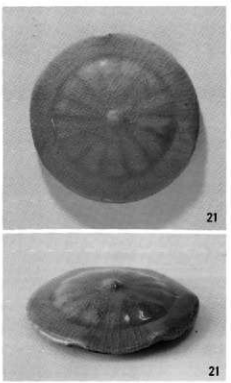
729号遺構

E区第2面検出の土坑である。調査区の端にかかっているので、全形を知りえないが、大型の廃棄土坑であろう。

出土遺物をFig.72に示す。1～18は、**土師器**である。すべて底部は回転糸切りである。1～14は、皿である。法量と形態から、1～5、6～13、14の3グループに分けることができる。1～5は、口径6.5～7.2センチ、器高1.6～1.9センチ、6～13は口径7.9～9.0センチ、器高1.3～1.75センチ、14は口径9.0センチ、器高2.3センチをはかる。なお、9・10には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたことを示している。15～18は、坏である。口径13.6～14.2センチ、器高3.0～3.15センチをはかる。

19は、朝鮮王朝初期の**象嵌青磁**である。碗の内面に4本の白線を象嵌する。20は、**天目茶碗**である。茶褐色の釉をかける。口縁は、黄緑色の釉で覆輪する。21は、**青磁**の蓋である。鈎部から上面に緑色の釉をたっぷりとかける。完形品である。

土師器の皿に小型のものがあることからみて、15世紀前半以前に遡ることはなかろう。15世紀後半から16世紀にかかる時期の土坑と考えられる。



Ph.65　729号遺構出土青磁蓋

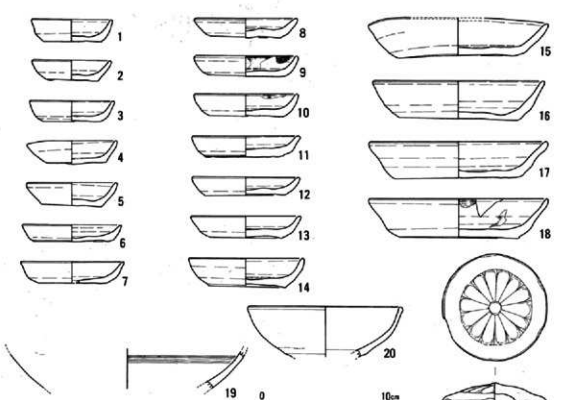


Fig.72　729号遺構出土遺物実測図（1/3）

866号遺構

B区第3面において検出した土坑である。次に述べる867号遺構を切る。

鋼矢板縁の土の崩落を防ぐため、矢板際に犬走りをもうけた。そのため、866号遺構は、半分程度しか掘れなかった。さらに867号遺構との切り合いを確認するために、「T」字形に畦を残しており、ますます、掘削部分が限定されてしまった。しかし、この畦の観察から、866号遺構が井戸ではなく、大型の箱型の土坑であること、867号遺構を切ることが判明した。

866号遺構は、北側が調査区外にでるため調査できなかったが、長辺3.5メートル以上、短辺3メートル前後深さ1メートル前後の箱型の土坑である。方形竪穴状の施設と見て良かろう。

Ph.66　866号遺構（北西より）

Ph.67　866号遺構土層断面（北西より）

Fig.72に出土遺物を示す。1・2は、866号遺構と867号遺構との間付近から出土したものである。1は、**緑釉陶器**である。京都系かと思われるものである。2は、**越州窯系青磁碗**である。

3～7は、866号遺構の出土遺物である。3は、**緑釉陶器**である。洛北産で、9世紀前半から中頃に編年される。4は、**白磁**の皿である。畳付きを削って、露胎とする。5は、**青磁**の皿である。6は、**備前焼**の擂鉢である。7は、巴文の**軒丸瓦**である。

白磁の皿や軒丸瓦の特徴からみて、16世紀代の遺構として大過なかろう。

867号遺構

B区第3面から検出した土坑である。前述した866号遺構に切られる。整った方形の平面形を取り、北西と南東の短辺側は、二段掘り状を呈する。

長辺3.5メートル、短辺2.8～3.0メートルをはかり、検出面からの深さは約190センチをはかる。床面は平坦で、逆台形の断面を持つ、箱型の土坑である。おそらく方形竪穴状の機能を担ったものであろう。

Fig.73-8～17は、867号遺構の出土遺物である。8・9は、**緑釉陶器**である。8は、皺捉かと思われる。9は、京都産で10世紀前半に編年される。10は、**越州窯系青磁**、11は、**白磁**である。8～11は、古代の遺物が混入したものである。

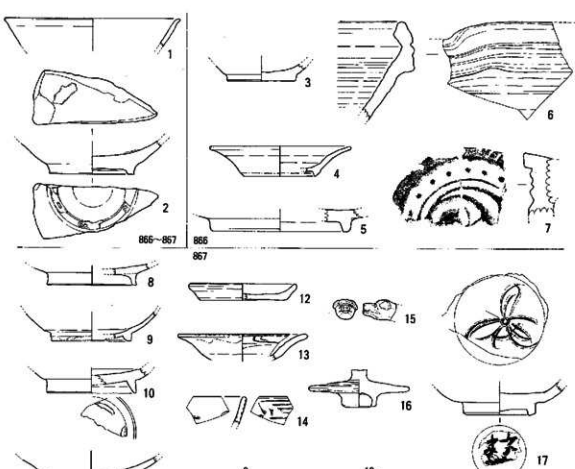


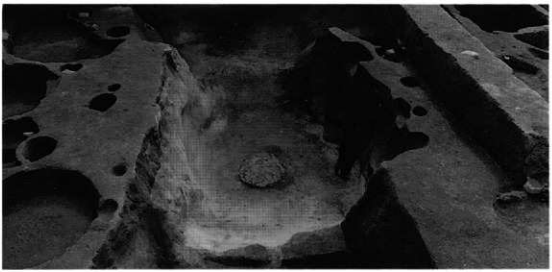
Fig.73　866号遺構・867号遺構出土遺物実測図（1/3）

12は、**土師器**の皿である。底部は、回転糸切りする。口径8.6センチ、底径6.8センチ、器高1.3センチをはかる。

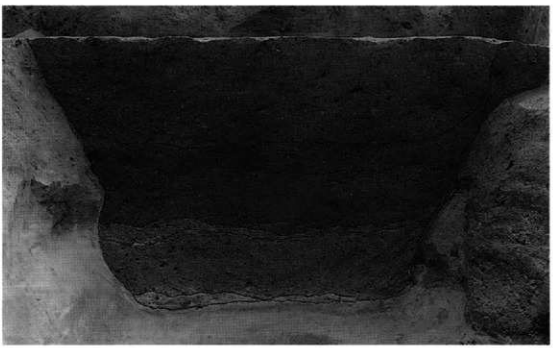
13・14・17は、**青磁**である。13は鍔花皿である。14は、口縁に雷文帯を巡らす碗である。17の碗の外底部には、墨書がみられる。漢字一文字かあるいは「林」+文字か、判別しがたい。

15は、**白磁**の犬の頭部である。犬の人形の頭であろう。16は、**褐釉陶器**の壺である。鍔から下面は露胎で、上面に緑褐色の釉が施される。

これらの出土遺物から、15世紀から16世紀に属する遺構と考えられる。



Ph.68　867号遺構（北西より）



Ph.69　867号遺構土層断面（北西より）

1163号遺構

A区第4面検出の土坑である。一端が調査区外にでるため全体を調査することはできなかった。

検出しえた範囲で、長辺150センチ以上、短辺80センチ前後をはかり、検出面からの深さは、28センチ前後をはかる。

埋土中から、銭の鋳型が出土した(Fig.75-1)。シルト岩を用いた石製の鋳型で、湯道と銭面がふたつ残っている。石の表面は、研磨して、平坦に整えているが、熱を受けた痕跡はなく、実際に使用したものとは思われない。これについては、第三章に下関市立大学の櫻木晋一氏より解説を頂戴しているので、参照されたい。

Fig.76-2～4は、土師器である。底部は回転糸切りする。5～7は青磁である。8は高麗青磁の碗である。このほか、多量の魚骨が出土している。

これらの点から、15世紀後半頃の廃棄土坑と思われる。

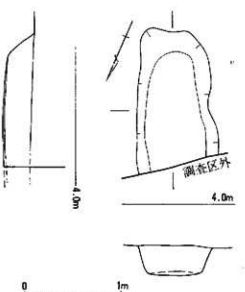


Fig.74　1163号遺構実測図 (1/40)

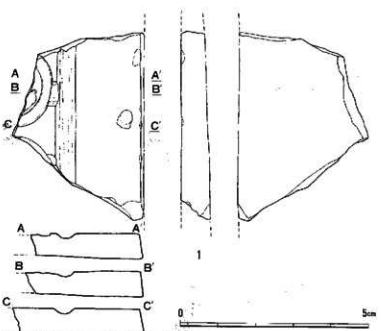


Fig.75　1163号遺構出土遺物実測図1 (1/1)

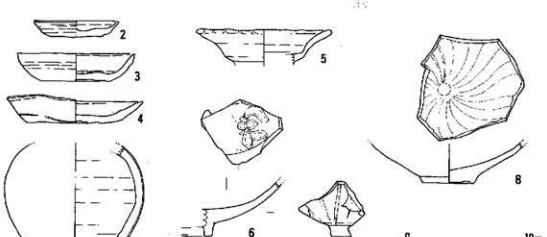


Fig.76　1163号遺構出土遺物実測図2 (1/3)

1171号遺構

A区第4面検出の土坑である。長軸145センチ、短軸100センチの小判型を呈する。

出土遺物をFig.78に図示する。1・2は、同安窯系の青磁である。1は皿、2は碗である。3～11は、白磁である。3は皿、4～11は碗である。碗には、口縁を外方に小さく引き出すものと、玉縁につくるものとがある。いずれも、釉は高台を持って漬けがけするが、7はさらに見込みの釉を輪状に掻き取っている。8は、完形品で出土した。12～16は、陶器である。12は、短頸の四耳壺である。灰オリーブ色の釉をかける。13も四耳壺で、淡茶褐色の釉をかける。16は、大型の甕の口縁である。外面には、茶緑色の釉をかけ、口縁部は拭き取る。内面は、口縁の下から緑褐色の釉がかかる。

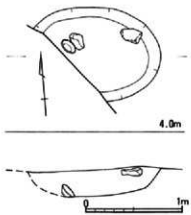
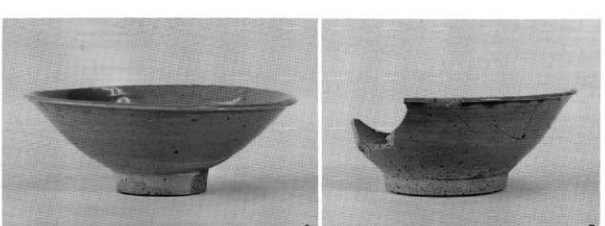


Fig.77　1171号遺構実測図（1/40）

Ph.70　1171号遺構（北東より）



Ph.71　1171号遺構出土遺物（縮尺不同）

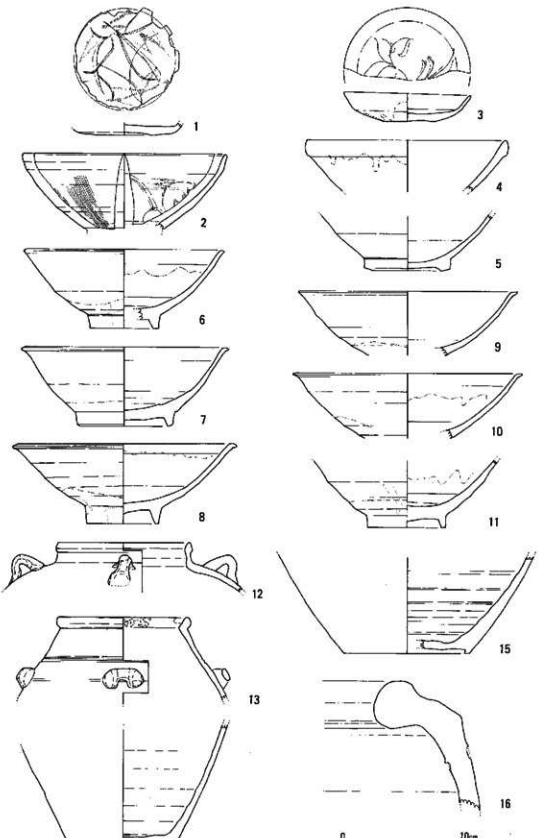


Fig.78　1171号遺構出土遺物実測図（1/3）

1171号遺構では、土師器はほとんど出土しておらず、白磁碗を捨てた土坑といっても過言ではない。

出土した陶磁器からみて、12世紀後半に位置づけられる。

1236号遺構

C区第4面より検出した土坑である。長軸145センチ、短軸110センチの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは、45～50センチをはかる。

埋土中から、獣骨が出土した。種類の特定はしていない。ただ、一部関節がつながった状況も見られるものの、全体的には折り重なって出土しており、解体された後の状況で入れ込まれたものと推定できる。食用に供したものと理解している。

出土遺物を、Fig.80に図示する。1～3は、**土師器**の皿である。底部は、篦切りである。1は平底、2・3は若干丸底気味に押し出す。口径は、9.4～10.4センチをはかる。4は、**焼き塩壺**である。内面には、目の細かい布目が残る。5～7は、**越州窯系青磁**の碗である。7の見込みには、小さい間隔で目痕が並ぶ。8は、**白磁**の碗である。口縁は、玉縁につくる。底部は、比較的薄く、見込みに圏線は入らない。

このほか、瓦器片、瓦片が出土している。

これらの出土遺物からみて、11世紀後半の廃棄土坑と考えて良かろう。

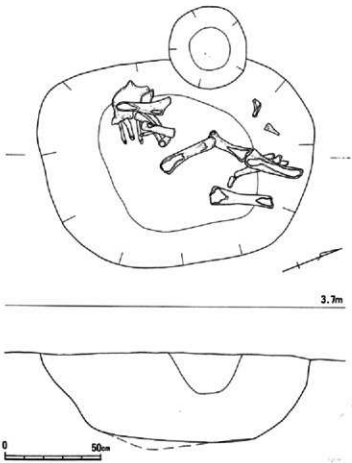


Fig.79　1236号遺構実測図（1/20）

Ph.72　1236号遺構（北より）

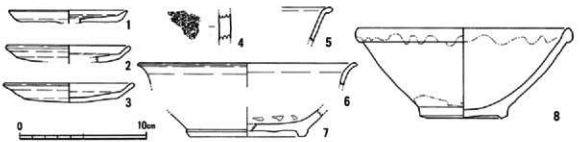


Fig.80　1236号遺構出土遺物実測図（1/3）

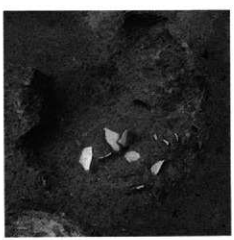
1255号遺構

B区第4面で検出した土坑である。土坑の上縁を焼土が巻いており、家屋の火処に関わる遺構の可能性がある。

直径約80センチの略円形を呈し、深さは約65センチをはかる。

Fig.81-1は、**須恵器**の碗である。2は、**白磁黒花**の托である。鈎の一部分が出土したにすぎない。3・4は**白磁**の碗である。同一個体の可能性がある。5は、**高麗**の**須恵質陶器**である。内外面とも非常に強い回転撫でで、叩きなどの成形痕跡を消している。

このほか、巻頭にあげた**耀州窯系青磁**が出土した。



Ph.73　1255号遺構（北東より）

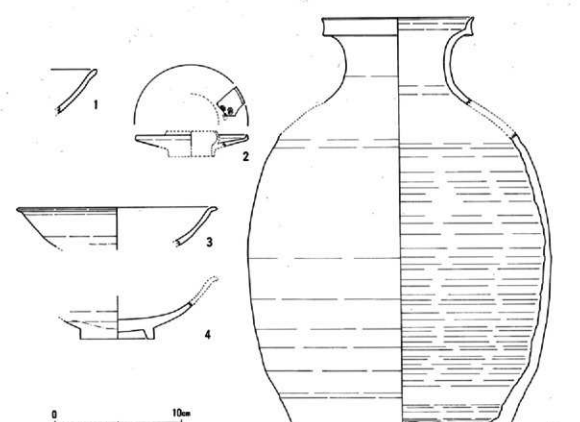


Fig.81　1255号遺構出土遺物実測図（1/3）

これらの出土遺物から1255号遺構の時期は、11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

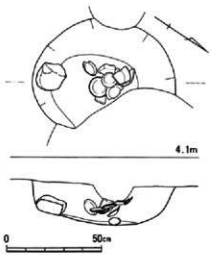


Fig.82　1276号遺構実測図（1/20）

1276号遺構

C区第4面から検出した土坑である。前述した1236号遺構に切られる。推定で、長径78センチ、短径68センチの楕円形を呈し、検出面からの深さは、25センチをはかる。

埋土の中程から、土師器の皿などがひとかたまりになって出土した。一括廃棄されたものであろう。

Fig.83に出土遺物を示す。1～7は、**土師器**である。1～6は皿で、法量的に3グループに分かれる。1はひときわ小さく、口径8.3センチをはかる。2・3は、口径9.7～9.8センチ、4～6は口径10.2～10.5センチをはかる。4と6は、底部を押し出して丸底気味につくる。7は丸底坏である。内面には、コテをあてて、平滑に整える。口径15.8センチ、器高3.5センチをはかる。8は、**白磁**の碗である。口縁を玉縁につくる。

このほか、越州窯系青磁、格子目叩き瓦、磨り石などが出土した。

出土遺物からみて、11世紀後半に比定できよう。

Ph.74　1276号遺構（北西より）

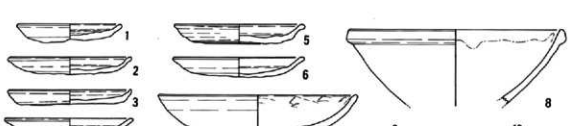


Fig.83　1276号遺構出土遺物実測図（1/3）

1336号遺構

E区第4面から検出した土坑である。長径140センチ、短径125センチの楕円形を呈し、検出面からの深さは、136センチをはかる。ほぼ円筒形の土坑である。

Fig.84-1は、**瓦器**の皿である。回転台成形でつくられ、底部は回転糸切りする。筑前型にも、畿内系の瓦器にも見られない、坏型の形態をしている。2・3は、**白磁**の碗である。

このほか、土師器(篦切り)、陶器、瓦器、鉄釘、銅滓などが出土している。

これらの出土遺物からみれば、11世紀後半とするのが妥当であろう。ただし、1の瓦器皿については類例の増加を待ちたい。

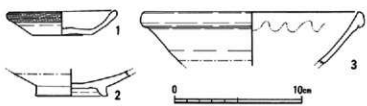


Fig.84　1336号遺構出土遺物実測図 (1/3)

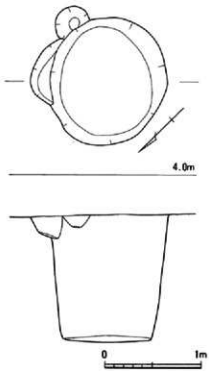


Fig.85　1336号遺構実測図 (1/40)

Ph.75　1336号遺構 (北西より)

1362号遺構

E区第4面において検出した土坑である。第2面の727号遺構(井戸)に切られ、その半ばを失う。長軸140センチ、短軸120センチ(推定)の楕円形を呈し、第4面から床面までの深さは、約130センチをはかる。

出土遺物の一部を、Fig.86に図示する。1は、**土師器**の坏である。底部は、回転糸切りする。口径14.6センチ、器高2.85センチをはかる。2は**青磁**の碗である。3～6は、**白磁**である。4～6は鉢である。口径22.6～25.5センチをはかる。体部下位から外底部は、露胎である。7は、**砥石**である。各面に使用痕が残るが、かなり荒っぽく研いだ感がある。

12世紀後半代の廃棄土坑であろう。

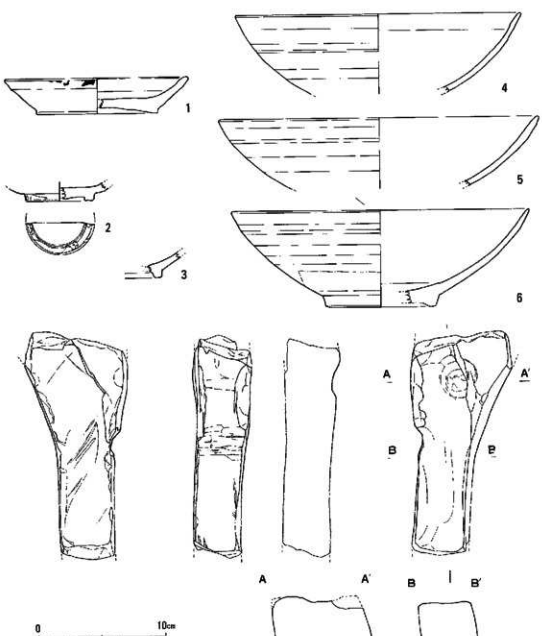


Fig.86　1367号遺構出土遺物実測図 (1/3)

Ph.76　1362号遺構（東より）

1366号遺構

E区第２面において検出した土坑である。試掘坑に切られて、一辺をうしなう。この部分を推定復元した上で、長辺160センチ、短辺110センチの隅丸長方形を呈する。深さは、98センチをはかる。

Fig.87に出土遺物を示す。1～12は、**土師器**である。底部は、すべて回転糸切りである。1～11は皿で口径6.6～6.9センチ、器高1.6～2.0センチをはかる。12は坏で、口径11.0から11.4センチ、器高1.4から1.7センチをはかる。13は、**瓦質土器**である。方形の容器の一部であるが、全形はわからない。洗のようなものであろうか。表面は、研磨されている。14は、**褐釉陶器**の鉢である。全面に茶褐色の釉を施す。15は、**青磁**の皿である。16は、朝鮮王朝の**象嵌青磁**の小碗である。17は、黒色の**碁石**である。18は、ふいごの**羽口**である。

これらの遺物から、16世紀代の廃棄土坑と考えられる。

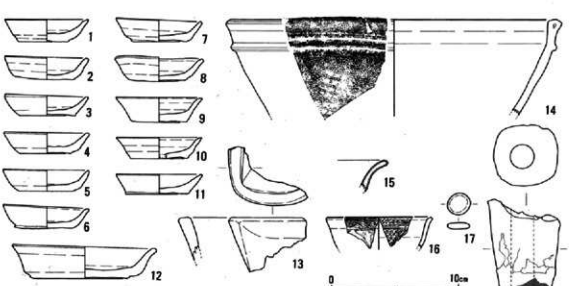


Fig.87　1366号遺構出土遺物実測図（1/3）

1493号遺構

G区第3面より検出した土坑である。一部は、調査区外にでる。径約140センチの略円形で深さ90センチをはかる。

Fig.88に出土遺物の一部を図示する。1・2は、**越州窯系青磁**の碗である。見込みには、重ね焼きの目痕が並ぶ。3～10は、**白磁**である。3～5の器壁は、薄く引き出されている。4の口縁は、わずかに肥厚

Ph.77　1493号遺構（南西より）

Ph.78　1493号遺構土層断面（北東より）

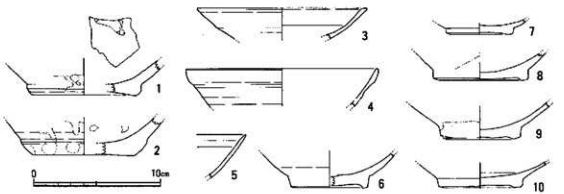


Fig.88　1493号遺構出土遺物実測図（1/3）

させて、幅広の玉縁につくる。6～10は、底部である。7・10は、薄手の体部を引き出しており、3～5の口縁部に対応するものであろう。

このほか、土師器（糸切り）、瓦器、瓦などが出土している。これらの出土遺物からみて、1493号遺構は、11世紀後半の廃棄土坑と考えられる。

1552号遺構

G区第4面から検出した土坑である。三分の一ほどが調査区の壁にかかるが、全形を知る上で妨げとなるほどではない。また、東壁の一部を1559号遺構に切られる。

直径180センチの円形を呈し、検出面から床面までの深さは、100センチ弱をはかる。きれいな逆裁頭円錐形断面を持つ土坑である。

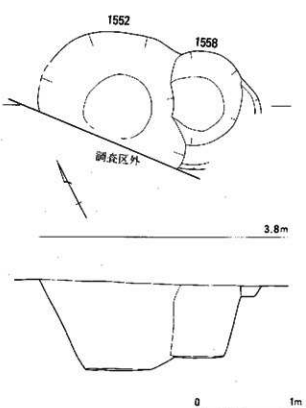


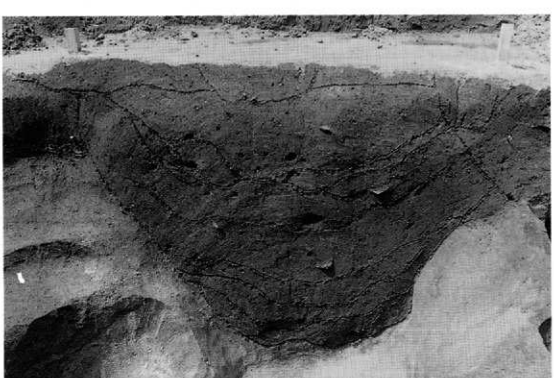
Fig.89　1552号遺構実測図（1/40）

調査区の壁面で観察できた土層断面を、Ph.80に示す。これを見る限りでは、長い時間をかけて埋まったとは考えられず、また逆に一気に埋め立てた風でもない。ごみ穴として掘られ、短時間に埋まってしまったというところであろう。

出土遺物をFig.90に示す。1は、**平瓦**である。上面には布目、下面には斜め格子の叩き痕跡が残る。小口は、篦で面取りされる。2は、**越州窯系青磁碗**である。体部下位から外底部は、露胎となる。見込みには、重ね焼きの目痕が並ぶ。

このほかに、和泉型瓦器碗が出土している。時期を判断する根拠にかけるが、12世紀あたりを考えたい。

Ph.79　1552号遺構（南西より）



Ph.80　1552号遺構土層断面（北東より）

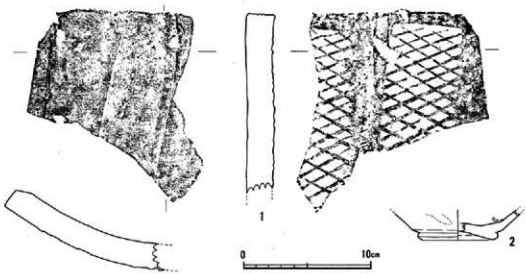


Fig.90　1552号遺構出土遺物実測図（1/3）

1579号遺構

G区第4面から検出した土坑である。第4面での検出時には、円形のプランに見えたが、第5面の検出時点で方形のプランになることを確認した。

第5面での実測図を、Fig.91に示す。半分近くが調査範囲外になるため、全体は知りえないが、230センチ×140センチ以上の隅丸方形もしくは長方形のプランをとる。最初に検出した第4面からの深さをとれば、床面までは、85～90センチをはかる。

床面の角には柱穴が掘られており、四隅に柱が立てられていたものと推測できる。

これらの点から、方形竪穴遺構として、地下室、地下倉を想定して良かろう。

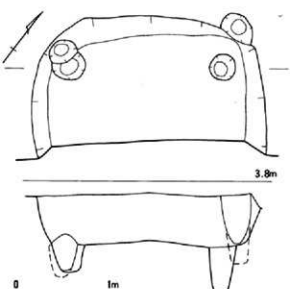
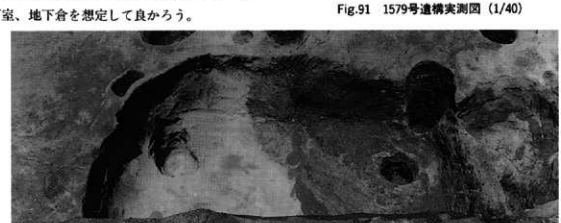


Fig.91　1579号遺構実測図（1/40）



Ph.81　1579号遺構（南東より）

Fig.92に出土遺物を図示する。1は、**瓦質土器**の壺である。横撫で調整の上に暗文風に、横位の箆磨きを粗く加える。胎土・成形などはよく整っており、粗雑な感じはない。2は、**東播系須恵器**の鉢である。底部は、回転糸切りする。横撫で調整される。

3～8は、**白磁**である。3・6～8は碗、4・5は皿である。4の底部には墨書があるが、判読できない。9は、**褐釉陶器**の壺である。茶緑色の釉を全面に施す。底部のやや上には、点々と目土が付着する。

10は、**平瓦**である。下面に草花文と思われるスタンプ文を持つ。

このほか、底部糸切りの土師器も出土しており、12世紀前半におくのが妥当と思われる。

Ph.82　1579号遺構（北西より）

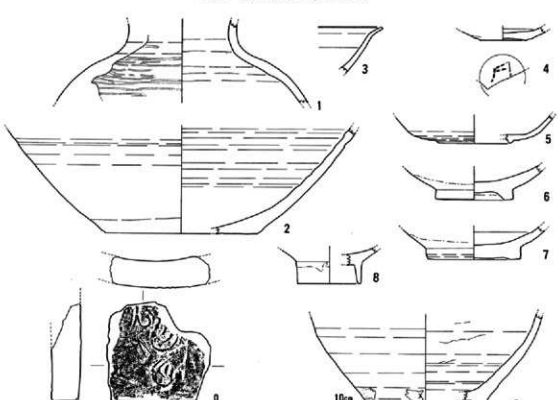


Fig.92　1579号遺構出土遺物実測図（1/3）

1624号遺構

G区第5面より検出した土坑である。前述した第2面の1443号遺構に切られており、掘り形の一部を確認したにすぎない。井戸の可能性も残る。

出土遺物の一部をFig.93に示す。1～3は、**土師器**である。1は皿で、底部を篦切りする。2・3は坏で、2は底部糸切り、3は篦切りである。3は、内面にコテをあて平滑に整える。4は、**筑前型瓦器**碗である。高台は、**刹離**している。5は、**越州窯系青磁**の壺の胴部である。6～15は、**白磁**である。16は、**無釉陶器**の壺底部である。

このほか、楠葉型瓦器碗片、石鍋片、大型の陶器片が出土した。1443号遺構の項でもふれたが、1443号遺構から出土した陶器の壺・甕類は、かなりの部分が本来1624号遺構に伴うものと思われる。

12世紀前半の遺構である。

Ph.83　1624号遺構（南東より）

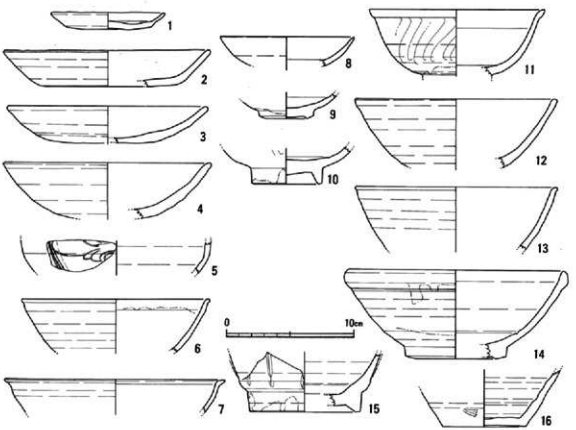


Fig.93　1624号遺構出土遺物実測図（1/3）

1715号遺構

A区第5面検出の土坑である。1739号遺構(井戸)に切られる。長軸120センチ、短軸100センチの卵型を呈した土坑で、検出面からの深さは約135センチをはかる。

ほぼ円筒形の土坑だが、廃棄土坑と考える。

出土遺物の一部をFig.95に示す。1・2は、白磁の碗である。ともに外底部に墨書を持つ。1は、二文字あるようで、一文字目は「丁」と読める。2の墨書は今一つはっきり見えないが、「何」と書かれているようである。3は、青白磁の壺の底部である。外底部を露胎とする以外は、内面も含めて施釉されている。4は、高麗青磁の鉢であろうか。口唇部から口縁内側にかけて露胎となり、砂目が並ぶ。

このほか、土師器(筒切り)、楠葉型瓦器片、白磁水注注口などが出土しており、11世紀後半に位置づけることができよう。

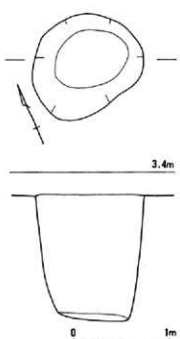


Fig.94　1715号遺構実測図 (1/40)

Ph.84　1715号遺構 (南より)

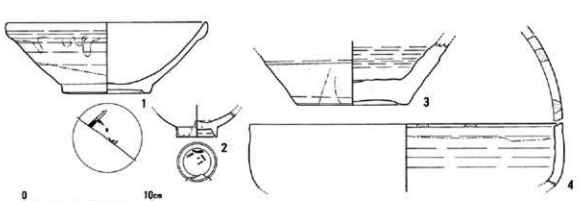


Fig.95　1715号遺構出土遺物実測図 (1/3)

1755号遺構

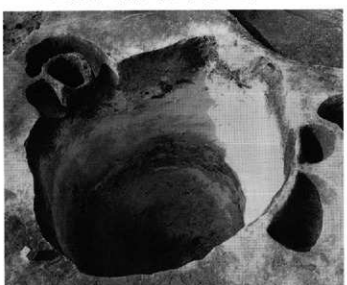
A区第5面より検出した土坑である。長径205センチ、短径170センチの楕円形を呈し、検出面からの深さは150センチ前後をはかる。

出土遺物の一部をFig.97に示す。1〜4は、**楠葉型瓦器**碗である。内外面とも密に篦磨きし、内底部はジグザグの暗文をつける。5は、**備前焼**の甕である。口縁部は横撫で、頸部内面には横位の刷毛目調整を施す。須恵質の焼成で、銀化した灰色を呈する。

6は、**越州窯系青磁**の碗である。口縁部は輪花につくる。7・8は、**白磁**の碗で、墨書を持つ。7は花押、8は「綱司」と読める。9・10は、**陶器**の灯火器である。やや茶色がかった灰釉を薄く施す。鍔部から下面は、露胎となる。同一個体の可能性もある。

このほか、土師器(篦切り、糸切り)、瓦器、初期青磁、石鍋などが出土した。

12世紀前半の廃棄土坑と考えられる。



Ph.85　1755号遺構（南より）

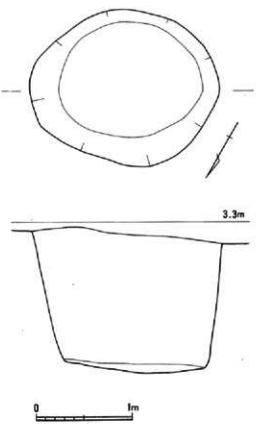


Fig.96　1755号遺構実測図（1/40）

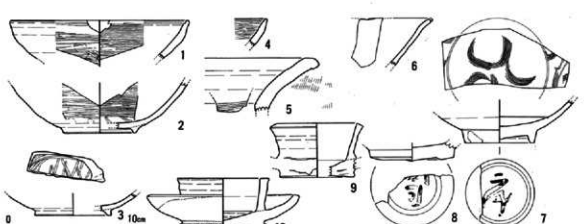


Fig.97　1755号遺構出土遺物実測図（1/3）

1800号遺構

A区第5B面より検出した土坑である。第5面の1773号遺構の端に、わずかに引っかかって検出した土坑である。遺物は、割合とまとまって出土したが、土坑の形状に関しては、丸い掘り込みであろうという以外、確認できなかった。

出土遺物の一部をFig.98に図示する。1は、白磁の碗である。外底部に墨書を持つが、墨痕がうすく、判読できなかった。2は、**天目茶碗**である。体部は、丸みを持って内湾する。黒釉をかけるが、内面には、灰色の薄い釆目がつく。このほか、土師器(篦切り)、楠葉型瓦器、筑前型瓦器、白磁、陶器などが出土した。

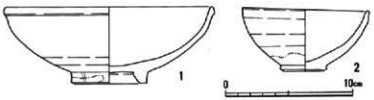


Fig.98　1800号遺構出土遺物実測図 (1/3)

11世紀後半の遺構と考えられる。

1927号遺構

E区第5面から検出した土坑である。長径255センチ、短径190センチのややいびつな楕円形を呈する。深さは、120センチをはかる。

埋土中に大量の炭・灰が層をなして堆積していた(Ph.86)。この層中にはほとんど土を含んでいない。大量の灰が生成するような、あるいはそれを必要とするような、何らかの生産活動を考えなくてはならない。

Fig.100に出土遺物を示す。1〜7は、**土師器**である。1〜4は皿で、1・4が糸切り、2・3は篦切りである。5〜7は、坏である。5・6は篦切り、7は糸切りする。8〜10は**筑前型瓦器碗**である。丁寧に篦磨きする

Ph.86　1927号遺構炭・灰層

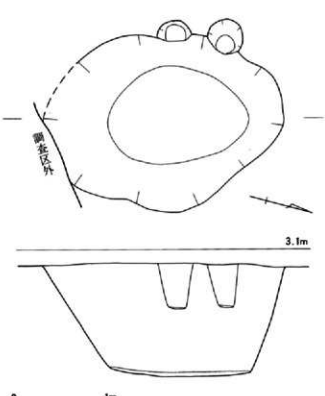


Fig.99　1927号遺構実測図 (1/40)

が、幅広で浅く、単位はとらえられない。11は、土師器の脚である。土鍋の脚であろう。12は、**越州窯系青磁**の碗である。13・14は、**高麗青磁**の碗である。15・16は、**龍江窯系青磁**の小碗である。16の外底部には墨書がみられるが、判読できない。17・18は、**青白磁**の合子の蓋である。19～32は、**白磁**

Ph.87　1927号遺構（南東より）

Ph.88　1927号遺構土層堆積状況（西より）

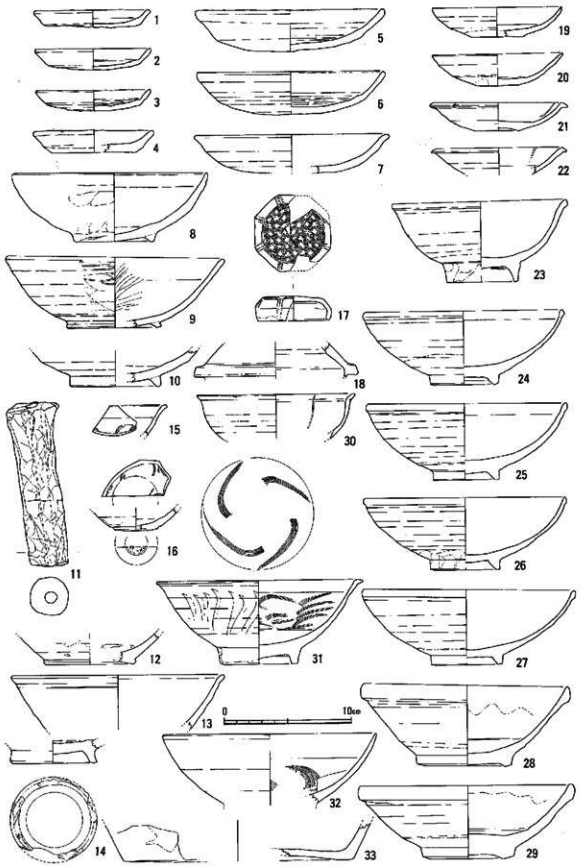
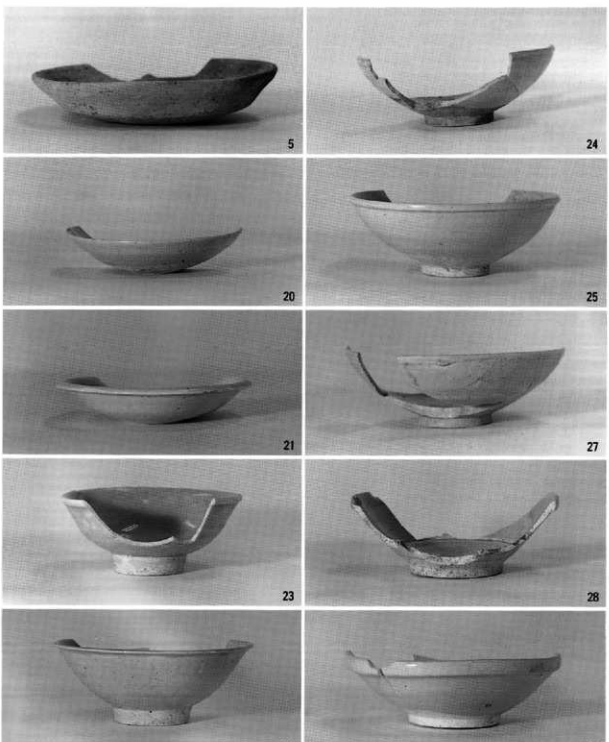


Fig.100　1927号遺構出土遺物実測図（1/3）

である。33は、**褐釉陶器**の壺の底部である。体部下位から外底部、内面は露胎である。

出土した土師器は、篦切りのものが多く、これに小量の糸切りが混じる程度であった。また、このほかに砥石・石鍋・獣骨などが出土している。

12世紀前半の廃棄土坑と考えられる。



Ph.89　1927号遺構出土遺物（縮尺不同）

7．近世以降の遺構と遺物

次に、近世以降の主要な遺構について記す。ただし、これについては、ほとんど整理が及んでいないので、遺構の写真・実測図を紹介するにとどめる。

近世以降の遺構としては、井戸・土坑などがある。第1面を中心に、一部第2面にまで及んで検出している。井戸は、ほとんどが、井戸側として瓦を用いたものである。これは、ごく最近まで続いたようで、瓦の井戸側を途中で中断してコンクリートの蓋をかぶせ、ポンプを通した例がみられる。

土坑では、四方に石を積み重ねて壁をつくった石積み土坑がみられる。そのほか、鍛冶炉状のもの、集石土坑など多様である。

052号遺構

A区第1面で検出した大型の石積み土坑である。一見して石垣を思わせる石積みであるが、南西側の壁は検出できなかった。北西側は調査範囲からはずれるが、この部分の鋼矢板を打ち込んだときには石積みに当たっていないということなので、掘削部分と、鋼矢板との間で収まってしまうものと思われる。そうすると、長辺4.5メートル、短辺2.5メートル前後の長方形を呈することになる。

Ph.90　052号遺構（北より）

150号遺構

B～C区第1面で検出した石積み土坑である。検出面から50センチ程掘り下げたところから、石積みを検出した。石積みの状面は不揃いで、本来の状態とは考えがたく、上部の石を抜かれた結果と思われる。

石積み部分は、内法で長辺100センチ、短辺55センチをはかる。石積みの基礎には、板材を寝かして置いている。なお、床面の半ば以上が締まって硬化していた。

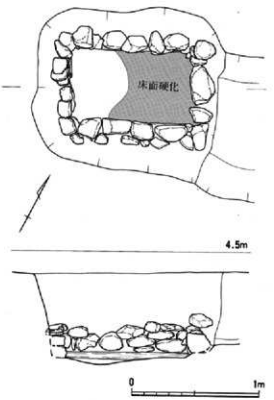


Fig.101　150号遺構実測図（1/30）

Ph.91　150号遺構（北東より）

152号遺構

B区第1面より検出した石積み土坑である。大型の石を、平坦面を内に向けて、立て並べたものである。石積みの内法で、80センチ四方の正方形を呈する。

北の角で石を欠くが、ここには丁度集石列が取り付いており、両者が同時期のものであるとすれば、当初より石を立てていなかった可能性が高い。その場合、暗渠と溜桝といった関係を考えても良いのかも知れない。

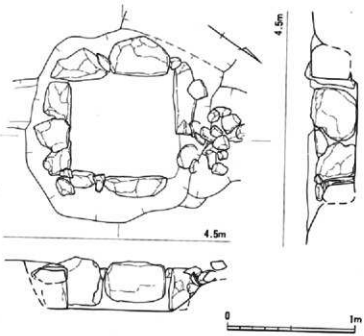


Fig.102　152号遺構実測図（1/30）

Ph.92　152号遺構（北より）

153号遺構

B区第1面より検出した石積み土坑である。東の角を前述した152号遺構に切られて、失っている。また、南東辺にも石は見あたらず、本来全周していなかった可能性もある。石の残り具合の良い北西辺と南西辺ではかって、長辺95センチ、短辺45センチをはかる。

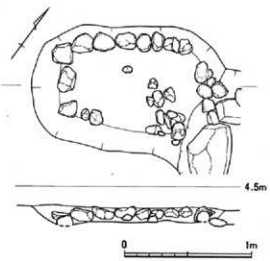


Fig.103　153号遺構実測図（1/30）

Ph.93　153号遺構（南西より）

157号遺構

B区第1面から検出した土坑である。内径82センチの円形に瓦を立てて並べ、その上縁に石を配する。石は、部分的には、整然と二段に重なっているので、本来さらに上まで積まれていた可能性がある。

水溜などの用途を想定していたのだが、壁に立てられた瓦は、井戸に用いられたときのように隙間なく並べてある訳ではなく、疑問が残る。用途不明とせざるを得ないが、いずれにせよ、解放された状態でものを容れたものであることは間違いなかろう。

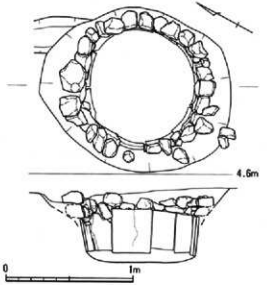


Fig.104　157号遺構実測図（1/30）

Ph.94　157号遺構（北より）

192号遺構

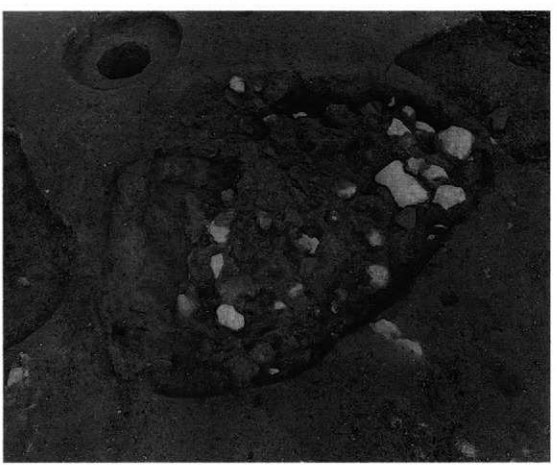
D区第1面より検出した鍛冶炉状遺構である。遺構の検出状況はやや雑然としており、わかりにくいが、一部にふいごの羽口が挿入されており、炉と判断した。

土坑は、全体としては、長軸140センチ、短軸100センチのいびつな三角形を呈する。その南側半分は、径70～80センチの不整円形で浅い皿状にくぼんでいる。この皿状部分には、金気が沈着して堅く硬化している。さらに、その南端の上縁にふいごの羽口が装着されていた。硬化した金気部分は、この羽口まで取り込んでおり、羽口が原位置を保っているのは、明かである。さらに土坑の北側半分には、碗形鉄滓が多量に堆積しており、その間に破損した羽口も捨てられていた。

したがって、南側の鍛冶炉とそこから掻き出しただけの鉄滓置き場と考えることができよう。

Fig.105-1は、鉄滓置き場から出土した**陶器**の瓶である。赤褐色を呈する焼締陶器で、胴部に櫛描き沈線が垂下する。2は、炉に装着されていた**羽口**である。断面は8センチ四方の隅丸方形を呈し、炉に装着されていた側の端部は、融けてガラス化している。送風口は、直径2.5センチ前後をはかる。3は、廃滓場から出土した**羽口**である。半裁しているが、断面は直径9.5センチの円形を呈する。4は、砂岩製の**砥石**である。多角形に砥面を持つ。肌理が粗く、荒砥と思われる。鍛造した製品に、粗く研ぎをかける際に用いられたものであろう。

出土遺物から遺構の時期を判断するのは、困難である。しかし、炉に装着された羽口の位置からは、ふいごが第1面からさほど遠くないことが考えられる。したがって、第1面の年代観に近いものと見れば、16世紀末から17世紀前半頃の遺構と考えられる。



Ph.95　192号遺構（南より）

Ph.96　192号遺構完掘状況（西より）

Ph.97　192号遺構羽口装着状況（南西より）

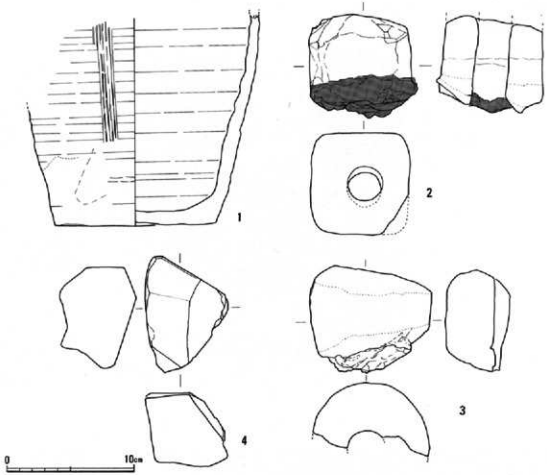


Fig.105　192号遺構出土遺物実測図（1/3）

252号遺構

E・F区第1面より検出した土坑である。長径180センチ、短径120センチのいびつな楕円形を呈する土坑に、びっしりと礫が詰め込まれていた。機能・用途は不明である。

Ph.98　252号遺構（南より）

319号遺構

C区第1面より検出した石積み土坑である。大型の石を方形に立て並べる。内法で100センチ四方をはかる。北西に隣接する敷石遺構(318号遺構)とは切り合わないようで、一連の遺構と考えられる。

Ph.99　319号遺構（南東より）

Ph.100　319号遺構（南より）

403号遺構

A区第2面から検出した土坑である。第1面の052号遺構に切られ、およそ半分程度を失っており、円形の掘り込みであることがわかる程度しか残っていない。

埋土中から多くの遺物が出土しており、Fig.106とFig.107に示す。Fig.106-1・3・4は、**肥前磁器**である。1は白磁の碗、3・4は染付である。2は、中国の**青磁碗**であり、渥入品である。

Fig.107-1～24は、**土師器**である。すべて底部は、回転糸切りである。1～5は、皿である。法量的にはばらつきがあり、口径7.0～8.8センチ、器高1.45～1.95センチをはかる。6～24は坏である。皿以上に法量のばらつきは激しい。形態的には、内湾する体部を持つものと、体部が直線的に開き、底部から体部にかけて「く」字形に屈折するものの二種がある。

25は、**瓦質土器**の火鉢である。方形の火鉢で、角部に山形の足がつく。口縁直下に、スタンプ文を巡らす。

肥前染付の編年観からみて、18世紀代の遺構と考えられる。

Ph.101　403号遺構（西より）

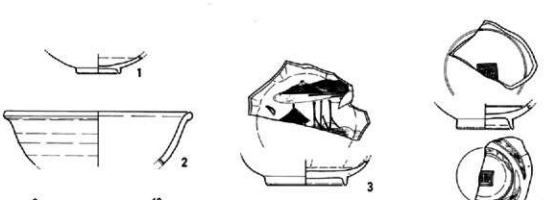


Fig.106　403号遺構出土遺物実測図1（1/3）

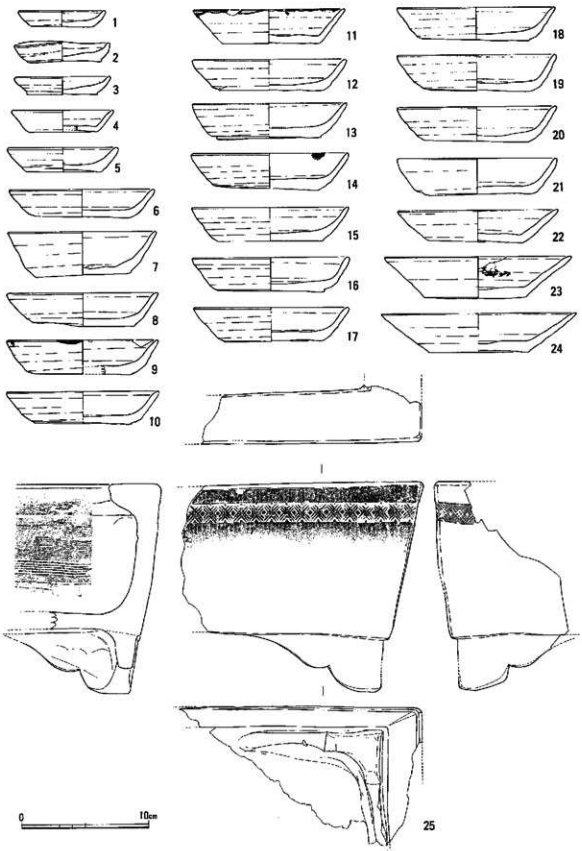


Fig.107　403号遺構出土遺物実測図２（1/3）

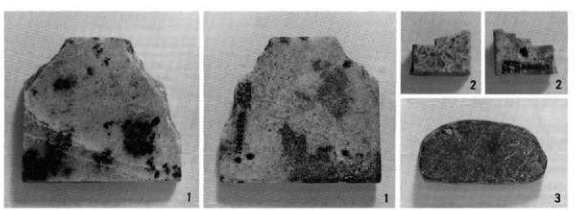
8．その他の出土遺物

次に、ここまでの報告から漏れた遺物の中で、看過できないものについて簡単な紹介を行う。

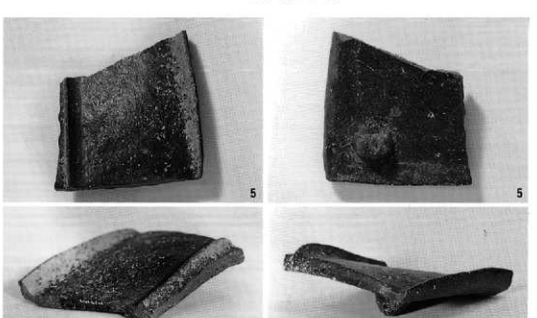
(1) 律令時代の遺物

1・2は、石製**巡方**である。3・4は、石製**丸鞆**未製品と思われる。5は須恵器の**風字二面硯**である。粘土紐を円盤状に巻いてつくった痕跡がみられる。6は、須恵器の**円面硯**の陸部分である。円面部に墨が付着している。7・8は、須恵器の蓋と坏である。7の裏側と8の外底部には赤色顔料が付着している。9～20は、**古代の墨書**である。9～13は土師器、14～20は須恵器である。21～24は、**須恵器**である。

25～38は、**緑釉陶器**である。生産地と編年観を列記する。25・26-長門9c、27-長門9c、28-京都10c前半、29-京都、30-長門9c後半、31・32-長門9c、33-東海9c末、34-長門9c、35-猿投9c後半、36-京都9c末～10c前半、37-京都9c後半、38-長門？。緑釉陶器は、京都系35点、長門系16点、東海・猿投系22点、京都or長門23点の96点が出土した。



Ph.102　石帯（縮尺不同）



Ph.103　須恵器風字二面硯

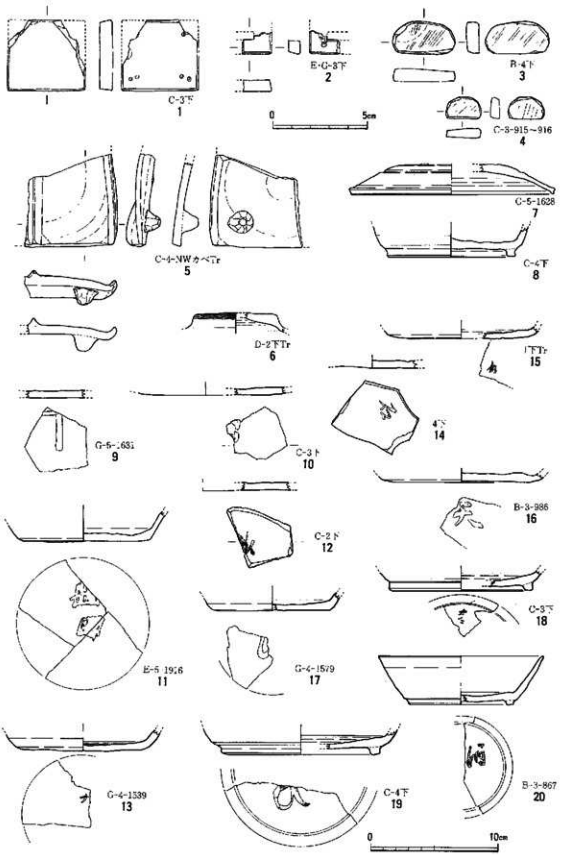


Fig.108　その他の出土遺物実測図1（1～4-1/2，その他-1/3）

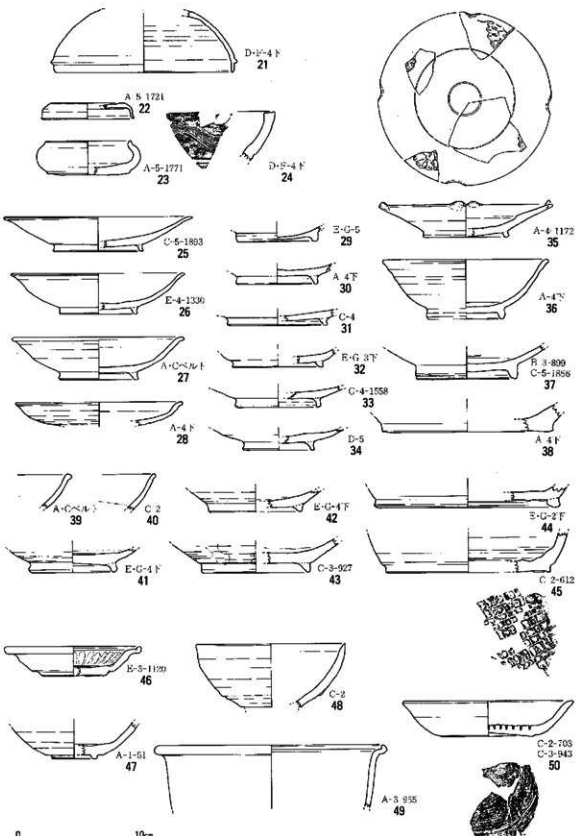


Fig.109　その他の出土遺物実測図２（1/3）

39～45は、東海で焼かれた**灰釉陶器**である。43は、灰釉陶器最末期の百大寺窯式のもので、11世紀代に編年される。

(2) 中世の国産陶器・土器

中世の国産陶器としては、備前焼、常滑焼き、瀬戸焼き、東播系須恵器などが出土した。量的には、少ない。46～49は、**瀬戸焼**きである。46 折り縁皿/大窯3後半、47-付け高台碗/中期1or2、48 天目茶碗/後期1、49-柄付き片口鉢/中期2と分類される。

50は、古瀬戸を模倣したと思われる**土師器**の卸皿である。内底部には、古瀬戸の卸皿と同じように卸目を刻む。

ここでは図示しないが、瓦器では楠葉型が59個体、和泉型が8個体出土している。

(3) 輸入陶磁器

今回の発掘調査では、越州窯系青磁に代表される初期輸入陶磁器から明代の染付まで、各時代のものが出土した。ただし、出土量を問題にすれば、14世紀後半から15世紀代の遺物は際だって少ないといえる。

51～84は、**越州窯系青磁**である。Fig.110には、輪状高台のものを図示した。51～59は、高台畳付きに目痕が付くもの、60～67は高台の内側に目痕が入るものである。Fig.111には、平高台のものと壺類を集めた。82は香炉、83は瓶、84は水注である。

今回の調査では、越州窯系青磁は割合と多く、328個体が出土している。

Fig.112-85～95は、**高麗青磁**である。89の皿は、基部底で内面全体に印花文を施す。92の内面には、ねじ花文が刻まれている。高麗青磁は、全部で105点が出土した。

96～104は、**青磁**である。97は、**龍泉窯系**の皿である。内面には印花文をあしらう。器肉は薄く、釉下に化粧土がかかっている。101・102は**連江窯系青磁**である。103は、系譜のわからない青磁である。小碗で、全面施釉の後畳付きを強く削り取る。釉は、やや渇った深緑色を呈する。

105～110は、**磁州窯系**の**白釉陶器**である。釉の下には、白化粧を施す。110は、白釉掻き落としの瓶である。

111～123は**白磁**、124～129は**青白磁**である。121と124は、同タイプの香炉の蓋である。天井部に、穿孔がみられる。128は、水注の取っ手である。外面に「李四子削□」のスタンプが押されている。

130～133は、明代の**染付**である。比較的遺存状態の良いものを選んで、図化したものである。

134～136,Ph-104-142・143は、**天目茶碗**である。134・135は、黒釉をかける。136は、柿釉天目である。白色で緻密な胎を薄く直線的に引き出し、茶色の釉をかけている。142・143は、青州窯系の天目茶碗である。なお、143については、Fig.31-2に実測図を示している。

137は、**黄釉鉄絵陶器**の壺である。丸みを持った胴部の上半に鉄絵で花文を描く。138は、**陶器B群**の水注である。オリーブ味を帯びた灰色の釉に、肩部から褐釉を流しかけている。139は、**褐釉陶器**の瓶である。褐色を帯びた黄オリーブ色の釉を、内外全面に施している。

本調査地点からは、1点だけであるが、東南アジアからの輸入陶器が出土した。140は、**タイ**の白釉鉄絵皿である。青みを帯びた灰色の胎土に、白濁した釉をかけ、鉄絵で魚を描く。見込みには、遺存した部分で三箇所目痕が残されている。

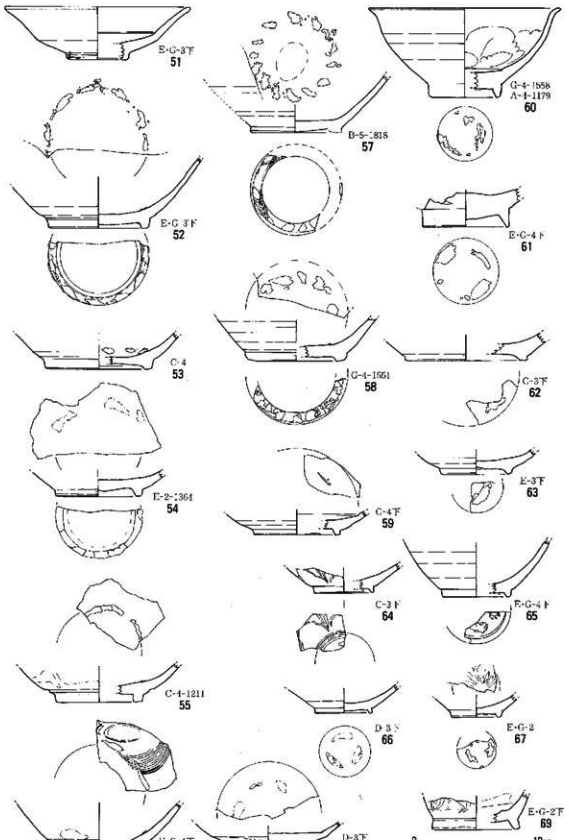


Fig.110　その他の出土遺物実測図3（1/3）

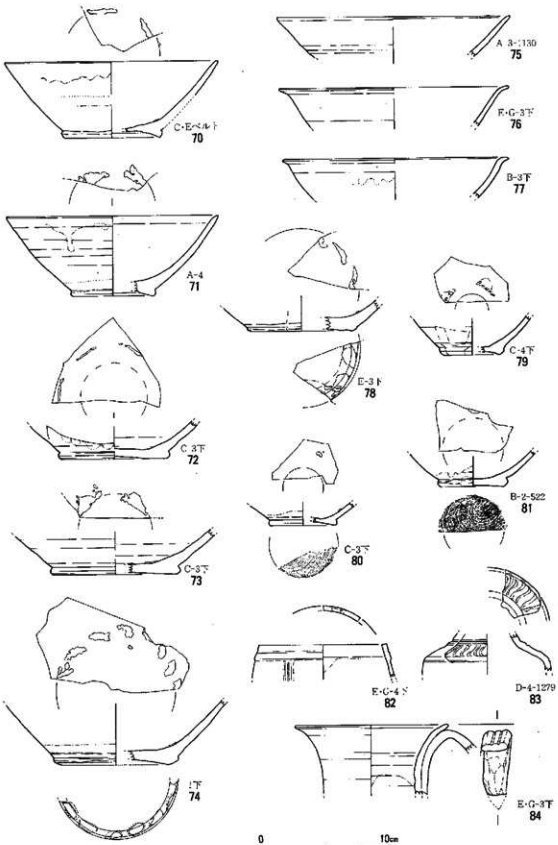


Fig.111　その他の出土遺物実測図 4 (1/3)

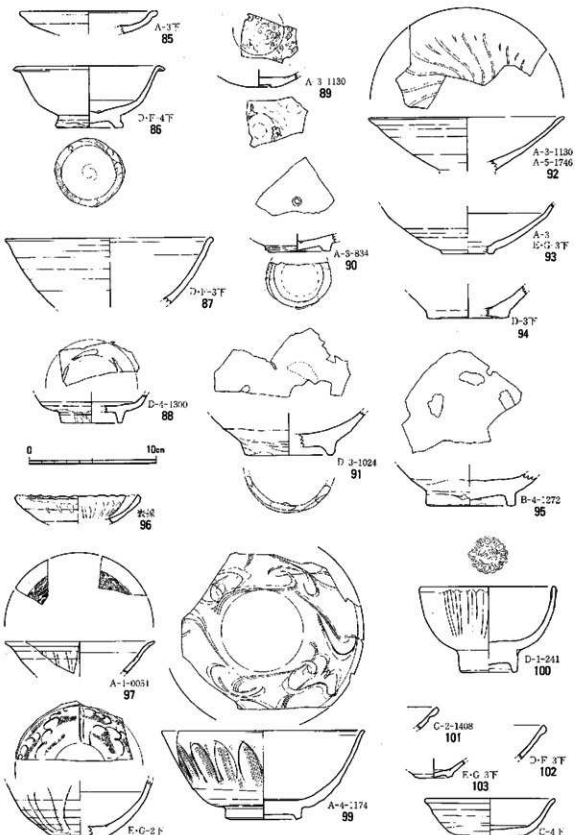


Fig.112　その他の出土遺物実測図5（1/3）

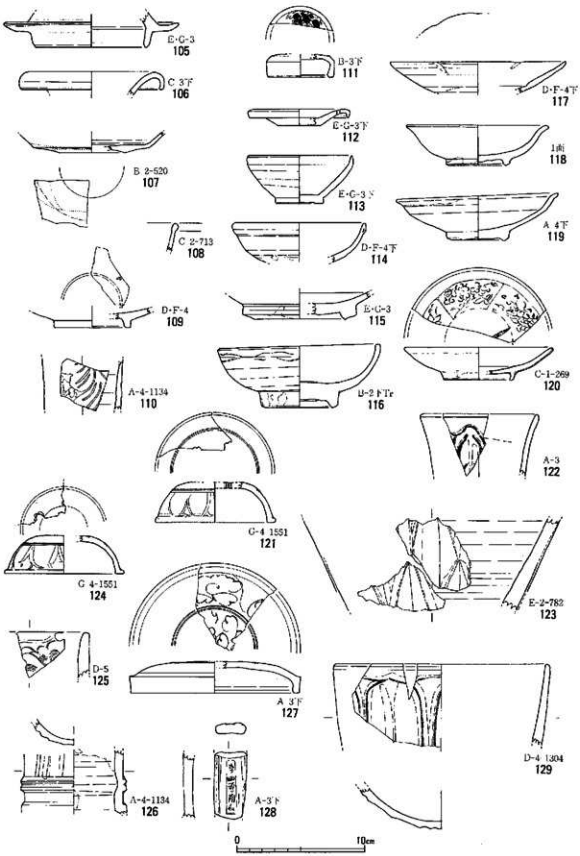


Fig.113　その他の出土遺物実測図6（1/3）

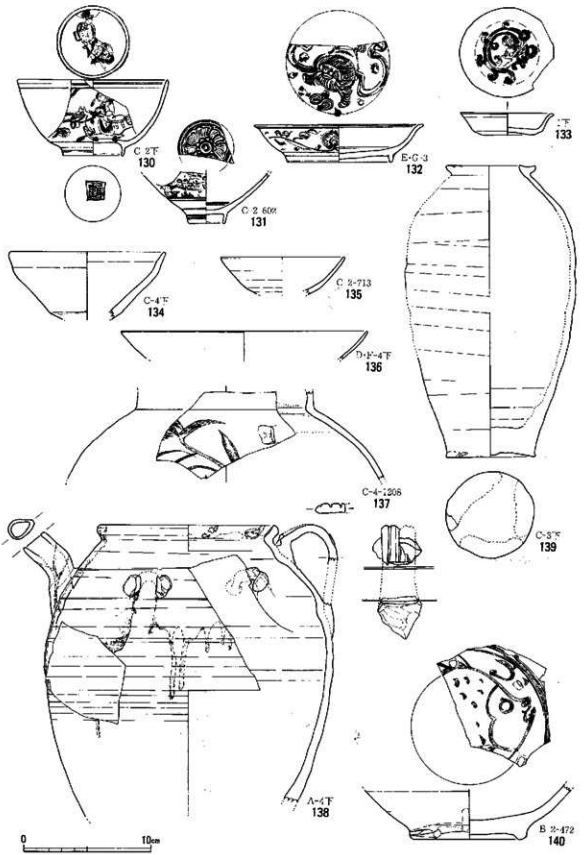
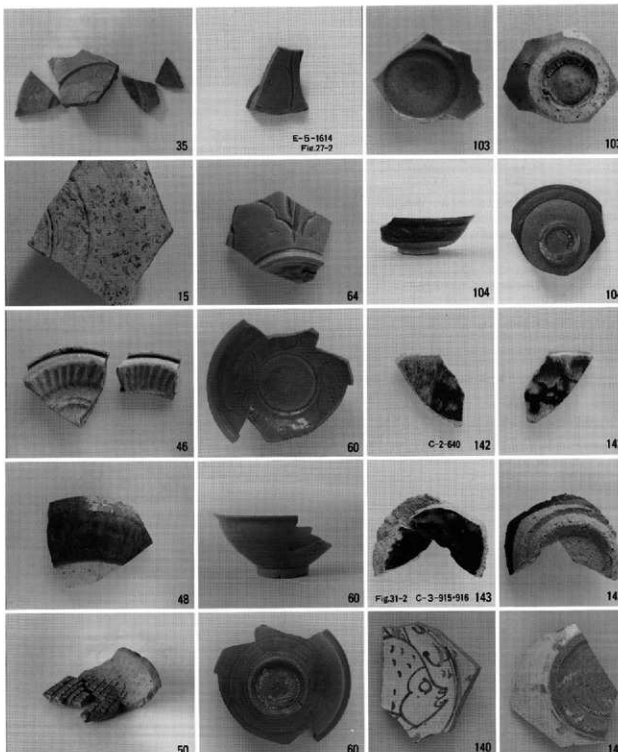


Fig.114　その他の出土遺物実測図7（1/3）



Ph.104　輸入陶磁器（縮尺不同）

(4) 墨書陶磁器

今回の発掘調査では、104点の墨書陶磁器が出土した。

墨書には、人名に関わるもの、称号に関するもの、機能に関するもの、花押、数字、記号などがある。人名に関すると思われるものでは、「丁」1例、「程」1例、「鄭」3例、「何」1例、「林」1例、「昌」1例、「荘」2例、「李」1例、「王」1例、「毛」1例、「得人」1例などである。一つの姓に集中していないことがみて取れる。「綱首」に関わるものとしては、「綱司」2例、「綱」1例、「永綱」1例がある。機能関連としては、「僧器」が1例あるにすぎない。一方、花押を墨書したものは、人名と組み合わされたものをのぞいて、11例を数えることができた。

Fig.115について、墨書の読みを記す。1-「六十口／荘」花押、2-「鄭」花押、3-花押、4-「荘」花押、5-花押、6-「僧器」、7 「十」、8-「綱司」、9-「程」、10-「林」、11 「荘」花押、12-「丁」花押、13-不明、14-「毛」花押、15-「下」、16-花押、17 記号、18-記号、19-読めず、20-「一」、21 「いた」不明、22-「昌」、23-「永綱」、24-「久」読めず、25-「上」である。

(5) 土製品

さまざまな土製品が出土しているが、ここではFig.116-1に銅製品の鋳型を示した。類似の鋳型は、726号遺構から出土している。Fig.69-23に図示したものがそれだが、製品の形状は不明である。

(6) 石製品

本調査で出土した石製品は、奈良時代の滑石製の玉に始まり、砥石、硯、権、碁石、石鏡など多岐にわたっている。Fig.116-2には、硯を示した。長方形の硯で、長辺15センチ、短辺8センチ、厚さ2.2センチをはかる。表面は大分と剝落して痛んでいるが、本来木蠟が塗られていたようで、光沢を持っている。左右の側面と裏面に引っかいたような文字で、銘文が刻まれている。実測図向かって左側からそれを読むと、(左側面)「享保七年　　上領」、(右側面)「上領吉次郎　石」、(裏面)「本高島青石」とある。この裏面の銘文から、この硯が滋賀県の高島石でつくられたことがわかる。「上領吉次郎」は石工であろうか、あるいは裏面の銘文とは手が違うようなので、所有者の名前かもしれない。

3・4は、滑石製品である。3は勾玉である。4は、小玉の未製品である。ともに8世紀代の遺物と解されるが、博多遺跡群内に未製品段階の石材を持ち込んで加工していたことを示す資料である。
Ph.106-11～13は権である。11は砂岩、12・13は滑石製。

(7) ガラス製品

ガラス製品の出土は少なかった。ガラス容器破片数点と、小玉類、および5に図示した蓋が出土した程度である。ガラス蓋は、ほぼ完形品で出土した。表面は若干風化しているが、透明感のある深緑色をとどめている。球形の小壺の蓋になる。

(8) 金属製品

金属製品も多数出土したが、保存状態がよく、図化できたものは少ない。6は飾り鋲である。銅製で、金メッキしている。7は、刀のはばきである。鉄製。8・9は、一対のもので、刀装具の目貫である。胴地に渡金する。10は、管状の金具である。表面に毛彫りで花文をあしらう。文様は、二面が対でこのパターンを繰り返して全周する。

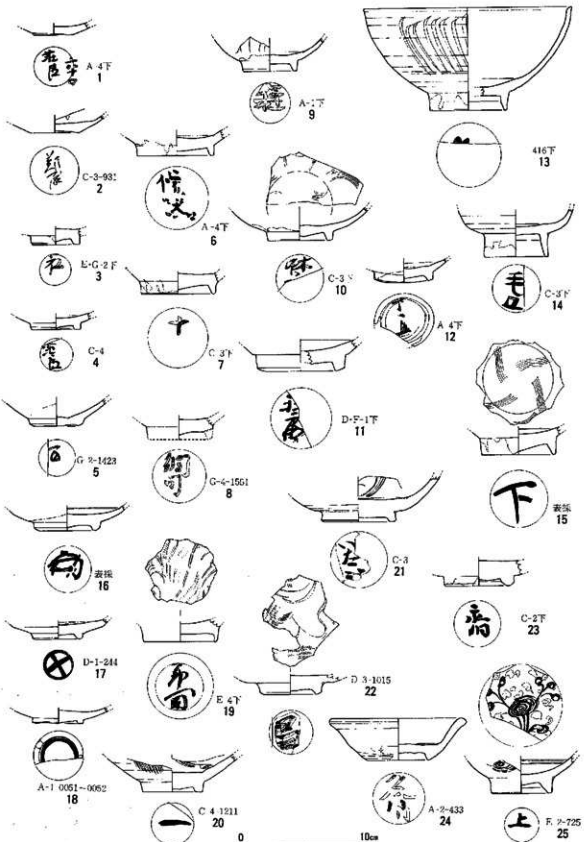
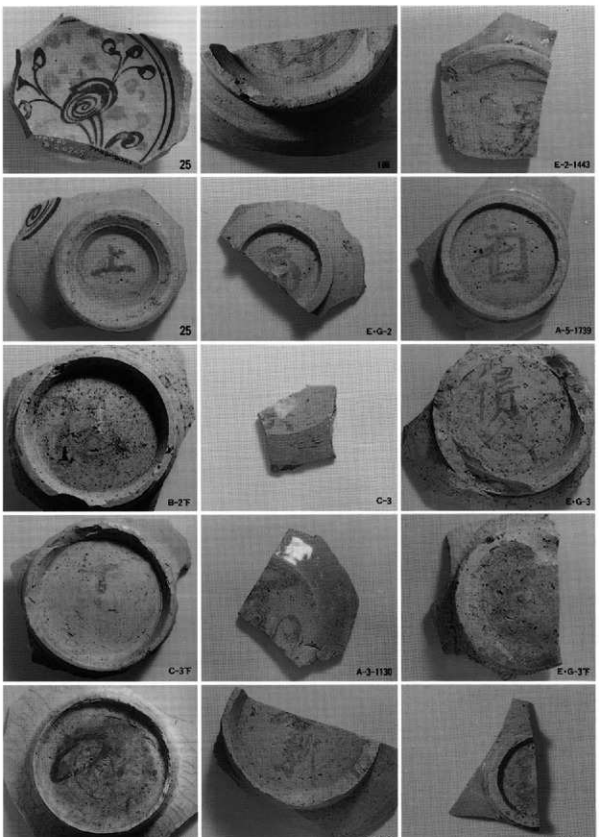
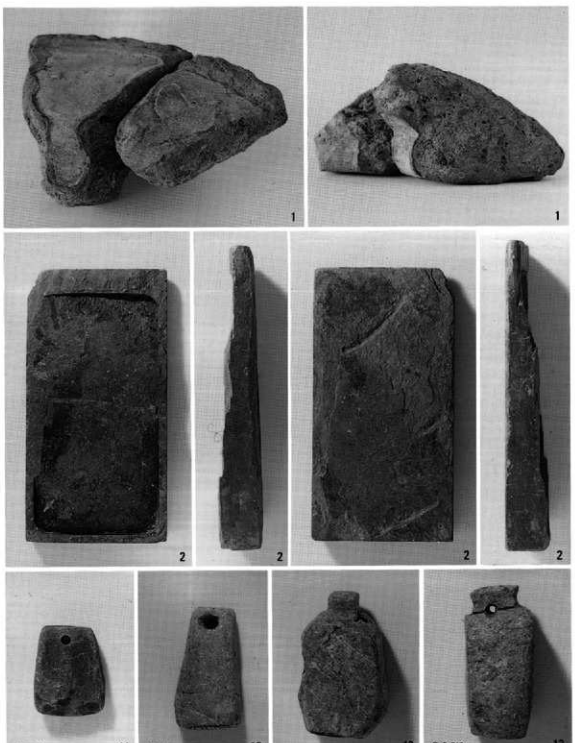


Fig.115　墨書陶磁器実測図（1/3）



Ph.105　墨書陶磁器（縮尺不同）



Ph.106　石製品・金属製品（縮尺不同）

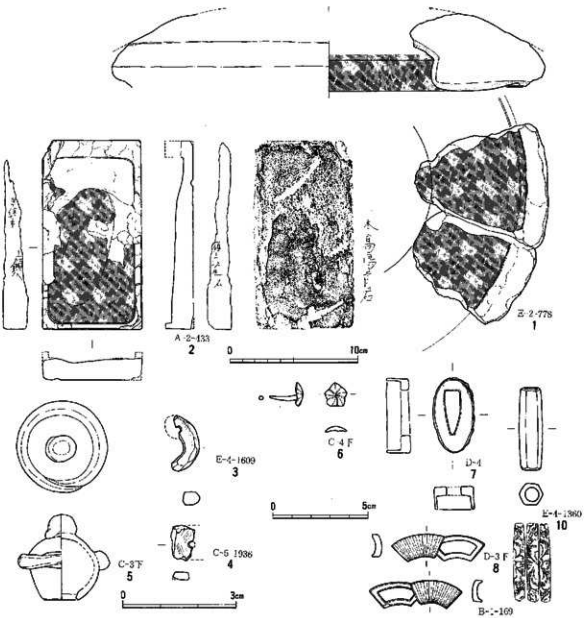


Fig.116　土製品・石製品・ガラス製品・金属製品実測図（1・2-1/3，3～5-1/1，6～10-1/2）

(9) 銅銭

本調査地点からは、170枚の銅銭が出土した。以下、その銭銘別の内訳、検出遺構別の内訳、主要なものの拓影を示す。

第1表 出土銭貨一覧

銭貨名	王朝名	初鋳年	西暦	枚数	銭貨名	王朝名	初鋳年	西暦	枚数
開元通寶	唐	武徳4年	621	10	治平元寶	〃	治平元年	1064	3
乾元重寶	〃	乾元元年	758	1	熙寧元寶	〃	熙寧元年	1068	8
太平通寶	北宋	太平興国3年	976	1	元豊通寶	〃	元豊元年	1078	12
淳化元寶	〃	淳化元年	990	1	元祐通寶	〃	元祐元年	1086	8
至道元寶	〃	至道元年	995	1	紹聖元寶	〃	紹聖元年	1094	2
景徳元寶	〃	景徳元年	1004	1	聖宋元寶	〃	建中靖国元年	1101	2
祥符元寶	〃	大中祥符元年	1008	6	崇寧通寶	〃	崇寧3年	1102	1
祥符通寶	〃	〃	〃	1	大観通寶	〃	大観元年	1107	1
天禧通寶	〃	天禧元年	1017	4	政和通寶	〃	政和元年	1111	3
天聖元寶	〃	天聖元年	1023	6	紹熙通寶	〃	紹熙元年	1190	1
明道元寶	〃	明道元年	1032	1	嘉定通寶	南宋	嘉定年間	1208	1
景祐元寶	〃	景祐元年	1034	1	洪武通寶	明	洪武元年	1368	2
皇宋通寶	〃	寶元2年	1037	10	永楽通寶	〃	永楽元年	1408	2
至和元寶	〃	至和元年	1054	2	寛永通寶	江戸	寛永3年～	1636	15
至和通寶	〃	〃	〃	1	近代銭1銭	昭和	昭和17年	1942	1
嘉祐元寶	〃	嘉祐元年	1056	1	解読不能				59
嘉祐通寶	〃	〃	〃	1				総計	170

第2表 遺構別出土銭貨一覧

面	区	遺構番号	分類	枚数	備考	面	区	遺構番号	分類	枚数	備考
1面	A区	0001	解読不能	1		〃		0089	元祐通寶	1	
〃	〃	〃	永楽通寶	1		〃	B区	0115	〃	1	
〃	〃	0002	解読不能	1		〃	〃	〃	寛永通寶	1	
〃	〃	0013	〃	1		〃	C区	〃	〃	1	
〃	〃	〃	寛永通寶	1		〃	B区	0124	皇宋通寶	1	
〃	〃	0051	皇宋通寶	1		〃	〃	0142	至和元寶	1	
〃	〃	〃	天禧通寶	1		〃	〃	0149～0150	解読不能	1	
〃	〃	〃	寛永通寶	1		〃	F区	0212	解読不能	1	
〃	〃	0052	洪武通寶	1	2枚重①	〃	C区	0253	皇宋通寶	1	3枚重①
〃	〃	〃	解読不能	1	〃 ②	〃	〃	〃	嘉祐通寶	1	〃 ②
〃	〃	〃	〃	1		〃	〃	〃	開元通寶	1	〃 ③
〃	〃	〃	熙寧通寶	1		〃	〃	〃	元祐通寶	1	
〃	〃	0055	寛永通寶	2		〃	〃	〃	解読不能	1	

面	区	遺構番号	分類	枚数	備考
1面	C区	0263	皇宋通寶	1	
〃	〃	0277	元豊通寶	1	
〃	〃	0294	解読不能	2	
〃	〃	0296	〃	2	
〃	C−D区	0321	〃	1	
〃	E区	0334	〃	1	
〃	〃	〃	皇宋通寶	1	
〃	〃	0349	開元通寶	1	
〃	〃	0363	元祐通寶	1	
〃	〃	0374	元豊通寶	1	
〃	〃	0381	紹聖通寶	1	
〃	〃	〃	治平元寶	1	
〃	〃	0391	解読不能	1	
〃	F区	0384	〃	1	
2面	A区	0426	〃	1	
〃	B区	0534	皇宋元寶	1	
〃	D区	0551	祥符元寶	1	
〃	〃	〃	元祐通寶	1	3枚重①
〃	〃	〃	祥符通寶	1	〃 ②
〃	〃	〃	解読不能	1	〃 ③
〃	C区	0601	至和元寶	1	
〃	〃	0602	大型元寶	1	
〃	〃	〃	皇宋通寶	2	
〃	〃	〃	聖宋元寶	1	
〃	〃	〃	解読不能	1	
〃	〃	0609	解読不能	1	
〃	〃	0693	〃	1	
〃	E区	0720	元豊通寶	1	
〃	〃	〃	解読不能	1	
〃	〃	0726	紹聖元寶	1	
〃	〃	〃	解読不能	1	
〃	〃	0727	〃	2	2枚重②を含む
〃	〃	〃	元寧通寶	2	
〃	〃	〃	熙寧元寶	1	2枚重①
〃	〃	〃	天聖元寶	1	
〃	〃	〃	開元通寶	1	
〃	〃	0733	〃	1	
〃	〃	0735	解読不能	3	
〃	〃	0770	太平通寶	1	

面	区	遺構番号	分類	枚数	備考
〃	〃	1378	政和通寶	1	
2面	E区	1379	開元通寶	1	
〃	〃	〃	洪武通寶	1	
〃	〃	1380	治平通寶	1	
〃	〃	1392	開元通寶	3	
〃	〃	〃	元祐通寶	2	
〃	〃	〃	元豊通寶	1	
〃	〃	〃	政和通寶	1	
〃	〃	〃	景祐元寶	1	
〃	〃	〃	嘉祐元寶	1	
〃	〃	〃	治平元寶	1	
〃	〃	〃	祥符元寶	1	
〃	〃	〃	皇宋通寶	1	
〃	〃	1443	熙寧元寶	1	
3面	A区	0799	解読不能	1	
〃	〃	0804	元祐通寶	1	
〃	C区	0916	天禧通寶	1	
〃	〃	0927	解読不能	1	
〃	D区	1016	至和通寶	1	
〃	F区	1053	永楽通寶	1	
〃	〃	〃	熙寧通寶	1	
〃	E区	1069	元豊通寶	1	
〃	〃	1120～1面カクラン	紹聖元寶	1	
〃	〃	1120	天聖元寶	1	
〃	〃	1121	寛永通寶	1	
〃	A区	1130	祥符元寶	1	
〃	E区	1467	元豊通寶	1	
〃	〃	〃	政和通寶	1	
〃	〃	〃	大観通寶	1	
〃	〃	〃	開元通寶	1	
〃	〃	〃	皇宋通寶	1	
〃	〃	1468	祥符元寶	1	
〃	〃	〃	熙寧元寶	1	
4面	B区	1273	元寧通寶	1	
〃	E区	1322	開元通寶	1	
〃	〃	1344	崇寧通寶	1	
5面	E区	1916	解読不能	1	
〃	D区	1949	祥符元寶	1	

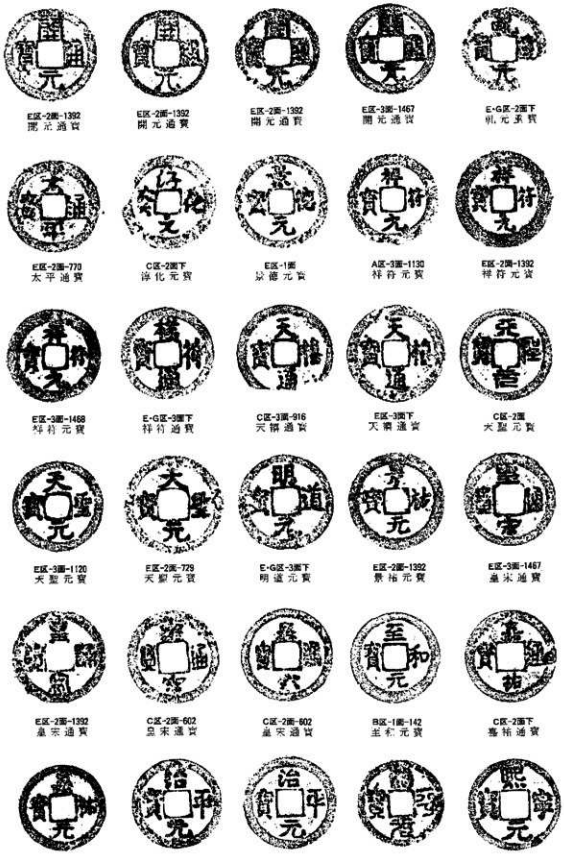


Fig.117　銅銭拓本１（1/1）

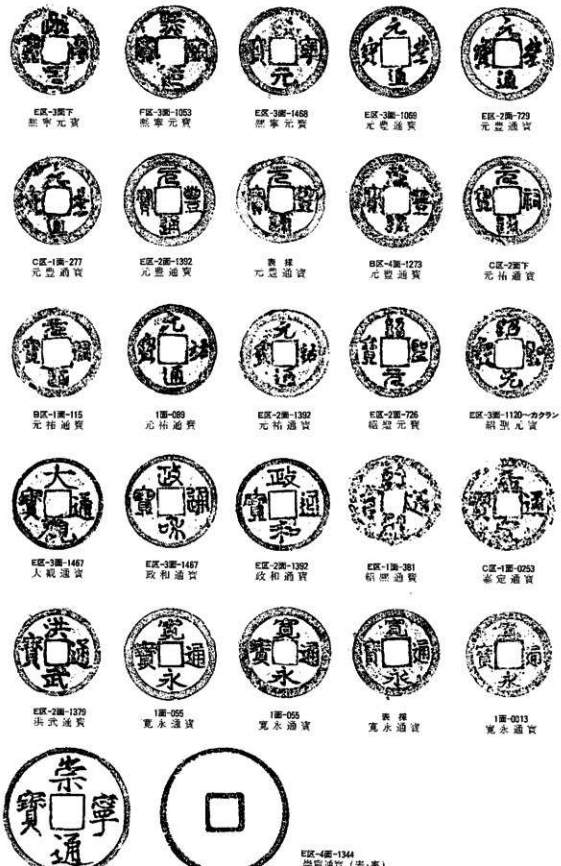


Fig.118　銅銭拓本 2 (1/1)

第三章　まとめ

第85次調査報告書を終えるに当たって、調査成果について簡単なまとめを行いたい。

1．本調査地点では、7世紀後半頃から遺構がみられるようになる。
2．9世紀後半から11世紀前半までに関しては、顕著な遺構はみられないが、緑釉陶器や越州窯系青磁などの出土量を見るとかなり卓越したものがある。
3．11世紀後半から、急激に遺構が増加する。
4．中世後半に至って、鋳物関連の遺構・遺物が目だつ。
5．14世紀後半から15世紀の遺構は少ないものの、おおむね中世を通じて断絶なく生活が継続している。

以下、いくつかの点について説明を付け加えてまとめとしたい。

(1)　緑釉陶器について

本調査では、前述のように96点の緑釉陶器が出土した。この数は、緑釉陶器の出土量が多い博多遺跡群にあっても卓越した数字といえよう。その内訳についてはすでに述べており、繰り返さないが、他の調査地点と比べた時、東海系が多い点、近江系がみられなかった点に特徴がある。この狭い博多遺跡群（とりわけ博多浜）の中で、量の多寡に留まらない差異がある状況は、何に由来するのだろうか。本調査地点での越州窯系青磁の多さ（328個体）、墨書を持つ古代の土師器・須恵器が多い点と相まって、今後の検討課題である。

(2)　銭貨鋳型について

本調査では、二点の銭貨鋳型が出土した。本文中で詳しく触れられなかったので、説明を追加しておく。なお、実測図は97ページと151ページに載せているので、参照いただきたい。

Fig.75-1（＝P.151図Ⅲ）は、A区第4面1163号遺構出土の石製鋳型である。融けた銅が通る湯道とふたつの銭面、湯道と銭面とを繋ぐ堰が見られる。実測図の右側の側面と表裏面は生きており、裏面に鋳型が彫られず、また湯道の反対側にも銭面はみられない。銭面の一部には、銭文に当たると思われる彫り込みがある。はっきりしないが、「寶」かもしれない。被熱した形跡はなく、未使用と考えられる。遺構の時期から、15世紀後半とされる。

151ページ図Ⅳは、D・F区第4面から検出した土製鋳型である。砂礫を含んだ粗い土を外型とし、その上に真土を貼って鋳型面をつくる。鋳型面には、湯道とふたつの銭面・堰が見られる。湯道の右側にも一部に堰が残っており、湯道の両側に銭面が設けられていたことが知れる。銭面には、輪が確認できるので、無文銭ではない。表裏面は生きており、裏側には真土の痕跡もなく、鋳型面は作られていない。遺構に伴わず、また、D・F区は井戸が集中した所なので、時期は決めがたい。

なお、これについては、次節に櫃本晋一氏による詳細な検討を掲載するので、参照されたい。

本書の作成中に、本調査と第87次調査から私共の調査に参加され、本書の表紙を飾った和鏡をきっかけに整理スタッフに転じ、主として金属製品のクリーニング・整理にその才を発揮してくれた山田美樹さんが、急逝された。享年25才。もって、冥福を祈るとともに、謝意に代えたい。

（註）緑釉陶器については、国立歴史民族博物館の高橋照彦氏のご教示をいただいた。

(3) 博多遺跡群出土の銭貨鋳型について

下関市立大学　櫻木　晋一

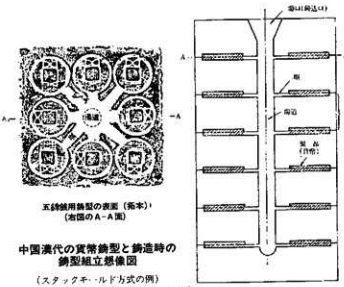
近年、全国各地で中・近世の遺跡に対する調査が実施されるようになり、出土銭貨資料も増加してきた。従来はあまり重視されなかった出土銭貨であるが、経済史の分野では銭貨の流通問題、民俗学の分野では銭貨のもつ呪術性やその埋納行為の意味、自然科学の分野ではその金属組成の解析など、近年ではさまざまな学問分野から注目される遺物となってきている。また、出土銭貨研究会が全国的組織として結成されたことにより[1]、その会誌を通じて情報の入手も比較的容易になり、出土銭貨研究は加速度的に進展してきた。埋蔵文化財担当者にとっては、遺跡からの銭貨の出土頻度が高く、その報告のために出土銭貨そのものの判読には興味がもたれている。しかし、銭貨そのものの研究とは裏腹に、銭貨の生産という点に関しては、その解明のための資料が少ないということもあり、今日までほとんど研究対象となってこなかった。ようやくここ数年、鋳造遺跡の発掘調査例も増加し、堺市において大量の銭貨の鋳型が発掘されるにいたり[2]、にわかに中世期のわが国における銭貨鋳造の問題が、全国的に注目されるようになってきた。

銭貨は、同一形状で均質のものを大量に鋳造する目的をもっているため、一枚の鋳型から複数の銭貨が生産できるように、つまり大量生産が最初から考えられている。近世の寛永通貨生産のように鋳物砂を用いる方法もあるが、中世以前については、耐火性があり反復使用できる鉄笵・銅笵・石笵・土笵[3]など、さまざまな材質の銭型による生産が知られている。このうち粘土板に鋳型を刻んだ土笵が初源的で、かつ最も容易に造れる笵型と考えられており、中世における模鋳銭の生産は、今日までの鋳型の出土例からみても、この土笵で行われていたと考えられている。また、土笵による鋳造方法も、二つの方法に大別できる。ひとつは、中国漢代の五銖や貨泉などを鋳造した時に使われたことが判っているスタック・モールド方式である[4]。これは一個の鋳型に数個の銭貨雌型を中央の穴（湯道）から放射状に配置し、同形の鋳型を数枚から十数枚積み重ね穴が貫通した状態にして、上部の湯口から溶けた金属が流れ込むようにした方法である[5]。（図Ⅰ）もう一つの方法は、鋳型の中央に湯道を設け、その左右に銭貨の雌型を一・二列配置して、金の成る木と俗によばれている「枝銭」が出来あがる方式である。（図Ⅱ）この二つの方法は、湯の流れる湯道の方向に対して銭面が直角であるか、平行であるかの違いが生じる[6]。

本報告の博多遺跡群第85次調査において、銭貨の鋳型が二片検出されたので、その報告と若干の考察を加えることとする。第85次調査では取瓶・フイゴの羽口・鉄滓・銅滓・銑の鋳型などが出土しており、鋳造関連遺跡であることは間違いない。出土した銭笵の一片は石製鋳型、もう一片は土製鋳型である。現在までのところ知られている中世の土製鋳型の出土例は、京都市平安京左京八条三坊[7]・鎌倉市今小路西遺跡[8]・堺市環濠都市遺跡[9]の3都市であり、博多遺跡群が全国で4都市目となる。石製鋳型については過去にその出土例が知られておらず、わが国初の出土品である。なお、わが国律令政府が鋳造した和同開珎の鋳型は、長門鋳銭司、平城京からの出土例が存在し、土製鋳型である[10]。また、中世遺跡からこれまでに出土した銭笵は、すべて土製の「枝銭」方式のものである。素材が石製の鋳型については過去に出土例がなく、非常に貴重な発見であるが、被熱した形跡がないことから、使用されていない可能性も高く、この石笵が実際の銭貨生産に結びつくのかどうか、類例の検出を待って慎重に考察を加えなければならない。

第85次調査で出土した二片の鋳型について、観察所見を以下に述べる。

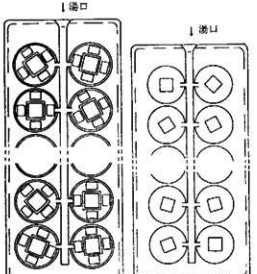
石製鋳型（図Ⅲ）の色調は暗灰色である。材質はシルト岩で、きめが細かく緻密である。表裏・側面に無数の細かい擦痕があり、湯道の中にも縦方向に擦痕が認められる。表面観察では、火熱をうけ

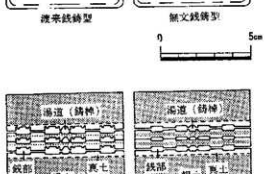


五銖銭用鋳型の表面（雌本）
（右図のA－A面）

中国漢代の貨幣鋳型と鋳造時の鋳型組立想像図
（スタックモールド方式の例）

図Ⅰ（注6文献より）





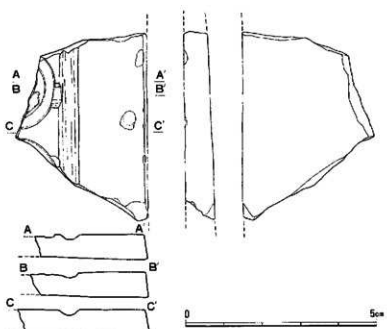
図Ⅱ（注9文献より）

順位	銭種	枚数	%	備考
1位	●開通元寶	265,807	11.7	北宋1039年初鋳
2位	●元豊通寶	251,855	11.1	北宋1078年初鋳
3位	●熙寧元寶	200,557	8.8	北宋1068年初鋳
4位	●元祐通寶	182,879	8.0	北宋1086年初鋳
5位	●開元通寶	170,690	7.5	唐　621年初鋳
6位	永楽通寶	113,882	5.0	明　1408年初鋳
7位	●天聖元寶	103,966	4.6	北宋1023年初鋳
8位	●紹聖元寶	87,441	3.8	北宋1094年初鋳
9位	●政和通寶	83,083	3.6	北宋1111年初鋳
10位	●聖宋元寶	80,740	3.5	北宋1101年初鋳
11位	●祥符元寶	49,674	2.2	北宋1008年初鋳
12位	無銘元寶	47,916	2.1	北宋1044年初鋳
13位	天禧通寶	46,563	2.0	北宋1017年初鋳
14位	●洪武通寶	46,071	2.0	明　1368年初鋳
15位	●皇宋通寶	44,530	2.0	北宋1056年初鋳
16位	祥符通寶	38,834	1.7	北宋1009年初鋳
17位	●咸平元寶	36,726	1.6	北宋　998年初鋳
18位	●治平元寶	35,503	1.6	北宋1064年初鋳
19位	至道元寶	34,340	1.5	北宋　995年初鋳
20位	●元符通寶	31,478	1.4	北宋1098年初鋳
21位	●景祐元寶	29,956	1.3	北宋1034年初鋳
22位	●嘉祐元寶	26,450	1.2	北宋1056年初鋳
23位	●大観通寶	24,434	1.1	北宋1107年初鋳
24位	●至和元寶	24,073	1.1	北宋1054年初鋳
25位	淳化元寶	18,528	0.8	北宋　990年初鋳
26位	●太平通寶	18,059	0.8	北宋　976年初鋳
27位	●治平通寶	11,433	0.5	北宋1064年初鋳
28位	漆黒元寶	10,330	0.5	南宋1174年初鋳
29位	咸淳元寶	10,010	0.4	北宋1023年初鋳
30位	至正通寶	7,857	0.3	南宋1265年初鋳
31位	乾元重寶	7,631	0.3	唐　759年初鋳
32位	宋通元寶	7,239	0.3	北宋　960年初鋳
33位	宣和通寶	6,931	0.3	北宋1119年初鋳
34位	至和通寶	6,597	0.3	北宋1054年初鋳
35位	慶元通寶	4,339	0.2	南宋1195年初鋳
36位	紹熙元寶	2,998	0.1	南宋1190年初鋳
37位	正隆元寶	2,987	0.1	金　1156年初鋳
38位	文帝通寶	2,970	0.1	明　1433年初鋳
39位	綏定通寶	2,925	0.1	南宋1228年初鋳
40位	朝鮮通寶	2,616	0.1	李朝1423年初鋳
40位までの銭種合計枚数		2,180,898	95.7	
40位以下の銭種合計枚数		98,913	4.3	分類不可72,946枚(3.3%)
総合計		2,279,810	100.0	

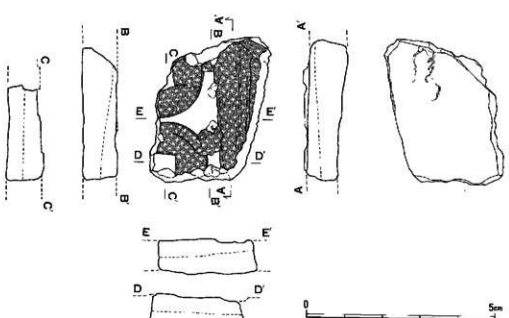
●崇山七峡銘銭鋳型に存在する銭種

表Ⅰ　備蓄銭銭種順位と鋳型銭種との関係
（注9文献より）

た形跡は認められない。幅5㎜・深さ1.5㎜の湯道と、一部ずつではあるが2枚分の銭面、およびそれらを結ぶ幅6㎜の堰が刻み込まれている。堰と湯道は直交している。側面から観察すると、厚みが若干変化しており、湯を流し込む上部の方が厚くなっていると考えられる。また、通常は湯道の両側に銭面が存在するのだが、鋳型の外縁部分は原型のまま残存していることから、湯道の片側だけにしか銭面が存在しないことは明らかで、特殊な鋳型の例であると考えられる。U字形の湯道の内側に銭貨を配置したのであろうか。残存部分から銭貨の外径を復元すると、約2.4cmとなる。これは通常の一文銭の標準サイズである。2.9㎜の輪（銭貨の外側の段）の部分を確認できることから、文字の確認はでき



図Ⅲ　石製鋳型（1/1）



図Ⅳ　土製鋳型（1/1）

ないが、何らかの文字が刻んであった銭貨の鋳型であると考えることができる[11]。A区4面の魚骨などを伴うゴミ穴と考えられる1163号遺構から出土しており、時期は層位から15世紀～16世紀初頭と考えられる。

土製鋳型（図Ⅳ）の色調は、粗土の部分が茶色・暗茶色で、真土部分は暗灰色である。粗土には砂粒が混じっており、表面にはスサが混入していることを確認できる。焼成は土師質で軟質である。表面は全面荒れ気味で、銭銘の確認はできない。銭面も緩やかな凹凸をもち、平坦ではない。洗浄作業時に、軟質のため真上の一部が剥離してしまったためであると思われる。湯道・堰・銭面は被熱していることを確認でき、この鋳型は実際に使用されたものであると考えられる。幅7㎜・深さ1㎜の堰が湯道に対して斜め方向に切ってあり、鋳型の上下を確認できる。上部の方が湯道も1㎝程あり広くなっている。不完全ながら2枚分の銭面を確認でき、その残存部分で銭貨の外径を復元すると、約2.4㎝となる。銭銘は確認できないが、輪はわずかに認められ、郭は認められない。標準的な大きさであることと輪を有することから無文銭ではないと推定できる。流通銭を母銭として踏み返すことによって、輪や郭がはっきりしなくなった可能性が考えられる。この鋳型はD・F区の4面で検出されており、時期は石笵と同様に層位から15世紀～16世紀初頭と考えられる。

ここで、簡単に他の3都市から出土している中世の銭笵についてまとめてみることにする。

京都市の平安京左京八条三坊では3地点から、銭貨の鋳型が見つかっている。最初に発見されたのは、八条三坊七町の14世紀中葉の遺構で1点のみであった。これは両面に銭面があり、その片面に銭銘があり、「□和□寶」と読める。反対の面には銭銘がない[12]。八条三坊六町では、14世紀中葉の別々の柱穴から1点ずつ、計2点出土している。1枚は片面のみに判読できないが銭銘を有し、薄い。湯道と堰が直交している。他の1枚も、片面のみに銭銘のない銭面を有する。最近出土した八条三坊三町の銭笵はまとまった出土例である。13世紀後半に属し、模鋳銭の鋳型では鎌倉市・堺市のいずれのものよりも古い時期のものである。銭面が両面にあるものと、片面にしかないものの二タイプに大別できる。両面に銭面を有するものが5㎜程度と薄く、片面のみのものが9㎜以上と厚いことから、片面に銭面を有するものの間に、両面に銭面を有するものを挟んで、銭貨の鋳造が行われていたと考えられている。「政和通寶」「元□通寶」「紹□元寶」などの銭銘を確認できることから、模鋳された銭貨はすべて中国銭であったと考えられている。銭笵の出土量から、小規模な生産であったと推定されている。以上のように、八条三坊では3カ所で銭笵が出土しているが、この区域が工人集団の居住区であったことが諸史料から確認されており、鏡や仏具の生産者たちが何らかの特別な契機に銭貨を鋳造したものと考えられている[13]。

鎌倉市の今小路西遺跡では、総量約7.5kgのかなり細片化した銭笵が、模鋳銭鋳造失敗品とともに、井戸から出土している。時期は15世紀初頭に属する。銭笵は縁が丸く断面が山形をなす、片面のみ銭面がある1㎝以上の厚みをもつものが一つのタイプである。もう一つは、縁が直線で断面が板状のもので、1㎝内外の厚みの片面にのみ銭面をもつものと、5㎜ほどの薄さで両面に銭面をもつものとに大別される。湯道については僅かながら出土しているが、報告書からは細片のため湯道と堰の様子については、読み取ることが出来なかった。判読できた銭銘は、「開元通寶」・「□元重□」・「天□□□」・「政□通□」である。この遺跡は、13世紀中ごろから15世紀前半にかけて、鋳造や青銅工に従事した工人達が居住した長谷小路周辺遺跡群の北に隣接しており、これらの工人との関連が考えられている[14]。

堺市の環濠都市遺跡では、SKT78・SKT271[15]・SKT344・SKT364・SKT354・SKT500・SKT628[16]の7カ所から銭笵などが出土している。湯道やバリのついた鋳放銭など未製品も出土しており、時期

は16世紀の中頃から後半に属するものである。質・量ともに最も良好な資料である。博多遺跡群出土のものを含めても、時期的に最も新しいものである。堺の鋳型の特徴は、銭銘を有する模鋳銭の銭笵の出土もさることながら、ここだけで無文銭の銭笵が出土していることである。量的には無文銭タイプの方が多く、全体の85.4%が無文銭タイプであると報告されている[17]。銭銘を有するものは、唐の「開元通寶」と明の「洪武通寶」以外は、すべて北宋銭の「皇宋通寶」や「元豊通寶」などであり、備蓄銭中に多く含まれるものが占めている。(表1)この銭銘の在り方も、重要な事実を示唆していると考えられる。15世紀以降の備蓄銭に多数含まれるようになる、「永楽通寶」の銭銘を有する鋳型が発見されていないのである。このことは、堺では「永楽通寶」の模鋳銭を鋳造していないと考えるのが自然であり、当時畿内では「永楽通寶」があまり流通していなかったことの反映であると、筆者は推定している。「東の永楽、西のビタ」といわれた流通の実態を、これらの鋳型の銭銘は物語っていると考えられる。16世紀になると無文銭が流通銭貨に混入してくることは、撰銭令の内容や出土銭貨の状況からも明らかであり、堺環濠都市遺跡で無文銭の鋳型が出現したというのは、このことを象徴的に示していると考えられる。また、商人居住区から鋳型が出土しているということも、特徴的なことである。職人の出張生産、つまり、出吹が想定されている。時期的に古い他の遺跡のように、工人が他の鋳物製品と同時に銭貨を製作するのではない姿が浮かび上がってくる。生産形態の復元も重要な問題である。

ここで、銭貨模鋳の特徴や問題点をまとめて考えてみることにする。

博多遺跡群内の他の調査でも、本調査区と近接している櫛田神社東側の第97次調査で、13世紀の銅器工房群が発掘され、15基の銅器の鋳造工房が確認されている。鋳型・取瓶・坩場・銅滓などが出土していることから、職人集団の居住区であると考えられている[18]。博多遺跡群内では、第61次[19]・第63次[20]・第72次[21]・第80次調査[22]などでも、鋳型・坩場・フイゴなどの鋳造関連遺物が出土しており、町内の至るところで鋳物生産が行われていたことは明らかである。銭笵自体は15世紀～16世紀初頭に位置付けられ、他の調査区とは時期的な差が存在するものもあり、これらが直接結びつけられるかどうかは不明であるが、中世においてこの付近に工人達が居住していたことは間違いない。博多遺跡群の場合、工人達が他の鋳物と同時に銭貨を模鋳していたということでは、工人居住区で生産されていた京都・鎌倉型であると考えられる。京都の例からも明らかなように、13世紀には銭貨の模鋳行為が行われ、徳川幕府によって銭貨が発行されるまでの間、日本各地で模鋳銭がつくられていたと考えられる。その生産主体は工人や商人、戦国大名などさまざまであろうが、時期によって変化していると考えられる。京都・鎌倉・博多においては13世紀から16世紀初頭にかけて、模造行為が工人達の余技として彼らの手によって簡単に行われていたことを推測できるが、16世紀中期になると、堺の出土例が商人居住区からであることから、商人達がかなり大量の銭貨を鋳造させていたのではないかという、これまでとは異なった生産形態が見えてくる。無文銭という銭銘を有しないものが大量に出現するところにも、時代の変化・民衆の意識の変化を読み取ることができる。流通銭貨量の絶対量不足という事態に対して、商人達が銭貨生産によって対応したという推測ができる。

技術的な問題点を一つ指摘しておきたい。土製鋳型はわれわれが想像しているほど、繰り返しの使用には耐えられないのではないかということである。鋳上がった銭貨を取り出す際に鋳型が破損し再使用できなくなる可能性が高いのではないだろうか。このことは、各地で出土している鋳型が細片化していることからも想像できる。注5の実験のように、従来言われている方法では実際に鋳造出来ない可能性もあり、「枝銭」を造る方法にしても湯道は小さく、溶けた金属が容易に流れ込むとは考えにくく、スタック・モールド法の実験と同様同形の金属を湯口に詰め、鋳型ごと加熱する方法をとった

可能性も十分考慮しなければならない。この検証のためには、片面のみに銭面を有する厚手の鋳型が、外側から火熱をうけているかどうかを観察すればよいが、残念ながら、現在までに出土している鋳型の大半は、外側の粘土が剥離しており、最も外側の状態を観察できない。従って、この問題については現在のところ解決の糸口がない。三角縁神獣鏡の製作の復元実験が行なわれ、従来想像されていた方法では鏡面の反りは出来ないことが報道されたが[23]、銭貨についてもどのようにすれば鋳造できるのか、その復元実験を実施することが重要であると考える。まさに、学際研究の必要性が感じられるのである。

東国の中心都市鎌倉、畿内では天皇の居住する京都、勘合貿易の堺および九州の博多と、中世を代表するすべての都市から銭笵が出土したことになる。今後、地方都市とでも言うべき場所から銭笵が出土することも予測でき、類例の収集に努めなければならない。中世の銭貨鋳造の実態が、この鋳型の出土によって明らかになりつつある。従来は中国製と考えられていた中世の銭貨も、ある程度の量は、国内で鋳造されていた可能性を想定しなければならないのではないだろうか。銭貨の鋳型は、やもすると見過ごしてしまうような目立たないものであり、今後さらに精度の高い発掘調査を期待し、類例の増加を待ちたい。

注

1．1993年8月1日に、慶応義塾大学鈴木公雄教授を会長として、西宮市立郷土資料館で発足打合会が開かれ、事実上活動を開始した。

2．1990年代に入り、堺環濠都市遺跡から銭貨の鋳型が出土していることは知られていたが、1991年8月～12月に実施された嶋谷和彦氏担当のSKT78の調査で、大量の銭貨の鋳型が出土した。

3．笵は鋳型の意味。

4．スタック・モールド法は重畳法・畳鋳法と訳されている。(stack＝積み重ねる、mold＝鋳型)

5．この方法で銭貨が実際に出来上がるかどうかの復元実験が、伊藤博之氏や斉藤努氏らによって行われたが、湯（溶けた金属）を流し込むという方法では全体に湯が廻らず、銭貨は出来ないことが報告されている。固形の金属を湯口に必要量入れておいて、鋳型の焼成と金属の溶解を同時に行い、自然冷却した場合に実験は成功して、銭貨が鋳造出来ている。(伊藤博之・斉藤努・大橋一隆・高橋照彦・西谷大「大泉五十の重畳式鋳造技術の復元」『日本文化財科学会』第13回大会研究発表要旨集、1996年)

6．鋳造技術については、石野享『鋳造　技術の源流と歴史』産業技術センター（1977年）を参照。

7．山本雅和「平安京左京八条三坊出土の銭鋳型」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第3号（1996年）

8．『今小路西遺跡』今小路西遺跡発掘調査団（1993年）

9．嶋谷和彦「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会（1994年）

10．佐藤興治「銭貨の鋳造について」(『おおいた考古』第2号、1989年）を参照。

11．現在まで出土している無文銭（銭銘を有しない銭貨）は、銭径がやや小さく、輪や郭（中央の孔の周りの盛り上がり）を持たない平坦な銭貨である。無文銭を製作する時は、原材料が少なくてすみ、なるべく手間のかかるようなことはしないと推定できる。

12．京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所（1982年）

13．注7が、平安京八条三坊の3カ所すべてについて考察を加えている最新の論考である。

14．宗臺秀明「中世の模鋳銭と社会」『中世都市研究』第3号（1994年）、同「鎌倉の模鋳銭」『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会（1994年）。

15．銭笵は出土していないが、鋳放銭や銅の湯道部分が出土しているので、これに含めた。

16．1996年度の調査なので未報告だが、嶋谷和彦氏の御教示による。

17．注9が嶋谷和彦氏の最新の論考である。他にも、嶋谷和彦「中世の模鋳銭生産　堺出土の銭鋳型を中心に」『考古学ジャーナル』No372ニュースサイエンス社（1994年）などがある。

18．毎日新聞（福岡版）1996年7月24日記事。

19．『博多24』福岡市教育委員会（1991年）

20．『博多31』福岡市教育委員会（1992年）

21．『博多42』福岡市教育委員会（1994年）

22．『博多51』福岡市教育委員会（1996年）

23．北九州鋳金研究会の実験（西日本新聞1996年10月4日、同11月19日付記事）

博多57
福岡市埋蔵文化財調査報告第522集

1997年３月31日発行

発 行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１
印 刷　大野印刷株式会社
　　福岡市博多区榎田２丁目２－65